

はりまり

なんなんな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔理沙が幻想郷じゃなくてアイルランドで修行してたらホグワーツから手紙が来た話。

東方旧作とwin版の設定をもんじゃにして更にifものという無茶です。

幻想郷の異変と絡めて進める算段も有りますが、グダリそうなら取りやめにします。

はりまりというタイトルですがべつにハリー×魔理沙ではありません。

目次

一話	手紙がきた	1
二話	先生がきた	7
三話	横丁にきた	16
四話	杖屋にきた	24
五話	駅にきた	37
六話	汽車できた	45
七話	学校にきた	61
八話	組分け帽子	72
九話	烏賊寮スリザリン	87
十話	初めの授業	97
十一話	初めの一週間	110
十二話	初めの一月の最後の夜の決闘の前の昼から夕方	121
十三話	初めの一月の最後の夜の決闘は無かった	135
十四話	臭い	146
十五話	玉遊び	159
十六話	クリスマス、朝	173
十七話	クリスマス、夜	185
十八話	不運	196
十九話	雑談	207
廿話	隠し事	214

一話 手紙がきた

アイルランドのとある片田舎。多少近代化の様子は見られるものの、どこか懐かしい雰囲気を持つ穏やかな村があった。畑ばかりで家の隣に『お隣さん』が無いような低い人口密度だったが、意外に電気も水道も平気で通っていてあまり不自由はしない。

まあそれは本題ではないが。問題は、そういう”整った”農村にしては近場の森の木々が鬱蒼と茂り放題で人の出入りが殆ど無いこと。木材が他所から入ってくるから、暖炉から電気式ヒーターへ需要が移ったから、田舎村でもこういうところで機械化グローバル化の暗い部分が見える……という話ではない。この森は、気付いたら同じところをぐるぐる回っているのだの奇妙な咆哮が聞こえるのだという不吉な言い伝えのおかげでそれこそ何百年も前から放りっぱなしで人の手は全く入らずにある。村の住人たちは反対方向の少し遠くの森から生活に必要な薪や木材を手に入れていた。森に入るのは昔から度胸試しの悪ガキ(とその腰巾着)ばかりであった。

……というのは村人たちの認識。この物語の主人公はまさにこの森のド真ん中に家を構えて暮らしている少女だ。名をメリッサ・ミストウッド。と言つてもこれは偽名だ。元の名は霧雨魔理沙という。

この胡散臭い森で少女が一人暮らす。一見すればおかしなことだ。例えこれが町中であっても幼い女の子の一人暮らしなんていうのはおかしなことだが。しかし、これにはもつともな理由が有る。魔理沙は『魔法使い』だ。魔法使いなんて胡散臭い存在なのだから、胡散臭い森に居てもなんら問題は無い。少なくとも魔理沙はそう思っている。

今日だって彼女はその小さい体とはちみつ色の髪をふわふわと揺らしながら大鍋をかき回し、深緑をしたアヤシイ薬と格闘していた。断じてごっこ遊びではない。完成したコレを飲めば小一時間は再生能力がヒトデ並みになって体が三分の二ほど無くなっても完全復活できるのだ。理論上。この前森の近くから攫ってきた男の子で試したときは三分の一しか回復しなかったけれども。付け足しておくが、

その男の子の残り三分の一は魔理沙の”手動の”回復魔法で補われ、元の村に記憶を消されて戻され元気にしている。不具合と言えば、せいぜい記憶消去が不完全で『森で女の子に会った』とかなんとか口走ってしまったことか。親は『それは昔森に入って帰ってこられなくなった子の幽霊だ』なんて、昔から伝わる怪談でもう森に入らないようにおどかす。

そう——その帰らなかつた少女こそ魔理沙……ではない。子供のしつけのための適当なデタラメだ。魔理沙はこの村の出身ではない。その名前から分かるように日本出身だ。まあ、その日本で家を出て森に入ったつきり帰っていないのだが。

ともかく、魔理沙はそんな風にして森で魔法使いをやっている。

「ふう。これで上手く行っただろ」

大鍋からヘラを引き上げると同時に液の色が透明な黄金色……魔理沙の思ったように形容すれば、調子が悪いときの小便のような色に変わる。ちなみにこの薬、調合に大失敗すると本当に小便とほぼ同じ成分になる。今回はアンモニア臭はしていないし、ひとまず『再生薬』にはなつたはずだ。

「さーて、あとは適当な範囲に遊びに来てくれれば良いんだが……」

そして出来た魔法薬を試す実験台が森に近づいて来るのを待つ。今回は特に自信が有る。早く出来栄えを確認したいもんだ。

光による素材の変質を避けるため閉め切っていた完全遮光カーテンを開き、窓の外を眺める。窓を開けたって日光の一筋も見えないほど鬱陶しく瘴気渦巻く暗い森しか見えないし、熱心に眺めたって来るワケでも……いや、魔力を込めて念じれば多少は意味が有ったりするけども。

しかし今回はその効果は無かつたようで。森に接近したのはどうやら人間ではない。

「人間のための薬だから、このお客さんは不合格だな」

どうやら大型の鳥。森の主人たる魔理沙が導かなければ、このまま森の上空を通り過ぎるか、林冠より低い位置を飛んでいたならば、振り返っても森の外が見えなくなつた辺りでループに入るだろう。魔

理沙の師匠が残した術だ。

師匠というのは魅魔という悪(?)霊だ。日本の故郷……『幻想郷』の『魔法の森』でふらついていた魔理沙を拾い、育て、数年前に放り出した人物。曰く『このままアンタが私のマネで埋まっちゃったら面白くないわ』とのこと。『なかなかやるようになったわね』なんて、それまで厳しかった評価がプラスの方に変わった数日後には数冊の魔導書とこの森、そしてメリッサという偽名(呪いなどを避けるため)を与えてどこかへ消えた。魔理沙の勘では、たぶん幻想郷に居る。しかし、今の魔理沙では幻想郷に行くことはできない。幻想郷は一応日本に所在しているのだが、特殊な結界によって隔離されているのだ。それを独りで越えられるようになったとき、本当の一人前の魔法使いとして文句でも言つてやろう。そういう『試練』なのだと思っている。そうでないと、魅魔との別れはちよつと厳しすぎる。

そんな風に感傷に浸っていた魔理沙だが、ふと違和感に気付く。

あの鳥、ここに向かってきている。

「不合格どころかとんだ上級者だぜ」

引き攣った笑みをうかべつつ、家の中を上から下まで駆け回り、思いつく限りの防衛魔法と装備を整える。実の親からの唯一の贈り物(と言つても事情を話して最後の親心で製作を頼み込んだだけで、実際に作ったのも魔理沙に手渡したのも知り合いの半妖だが)である八卦炉も、普段使いと予備、合わせて二つに自作の模倣品を加えて合計三つ全て装備した。マッチ程度のちよろ火から森を丸焼きにするような大火力まで出せる、こと出力においては魔理沙が全幅の信頼を置いているアイテムだ。師匠もしきりに良いものだと言っていた。先ほど作った再生薬も早速使用し、身を固くして”敵”の接近に神経を集中する。

なにしろ、この森への侵入阻害は師匠の魔法。魔理沙はまだこの魔法を理解しきれておらず、師匠が残したシステムそのままを利用してある状態。それを、相手は破った。単純に考えて、一部または全部の分野で自分より高レベルにあることは確かだ。

遠見の魔法が侵入者の姿を捉え、居間(侵入者対策本部)の真ん中

に置かれた水晶玉に映し出す。

「梟……う。」

なんとということはない。一般的な梟。フクロウ目フクロウ亜目フクロウ小目メンフクロウ科メンフクロウだ。一つ違うとすれば、その嘴に封筒を啜えていることくらいか。

手紙。友好的な連絡手段か、見たら死ぬ系の呪いをダイレクトに届ける手段か。もし前者だったらこのまま家の周囲の結界で焼き潰されるのは惜しい。或いは師匠からの手紙かもしれない。となれば、森に侵入できたのも頷けるといふものだ。

まあ、違う可能性も十分に有る。油断はできない。魔理沙は部屋の隅に積まれたガラクタの中から出来の悪い案山子のような人形を取り出した。その顔に手をあて、ムニヤムニヤと指令を呟く。いわゆるゴーレムだ。見た目はお世辞にもかわいらしいとは言えないが、魔理沙本人は『それっぽい』と言って気に入っている。

指令を受けたゴーレムが家の外に出てから梟が到着し、その枯れ枝のような腕にとまるまでそう時間はかからなかった。梟の口から黄色味がかった封筒を受け取る様が、ゴーレムの子機である水面鏡に映る。この水面鏡は呪い除けであり、何らかの強い魔力をもつものが映り込むと水面が波立ちマトモに見えなくなる。これによって視覚から作用する呪いを回避できるのだ。

封筒の開け口には『H』という文字と獅子、蛇、穴熊に鷲の模様で装飾された紫色の蠟で封がしてある。なんの紋章か知らないが、それなりに『いいところ』からきた手紙のようだ。表を向け、宛名を見る。

《メイヨー州 隠し森

中央の民家

メリツサ・ミストウッド様》

魔理沙は落胆した。『メリツサ』と呼ぶということは、魅魔ではない。しかし同時に安心もした。魅魔ではないが、相手は偽名を破つてもいない。強力な呪いの類は無効になるだろう。

「いや、中に本名が書いてあるかもな」

封筒で油断させて中身にしかけてあるかも、と思い直し、一瞬気を

抜いた自分を戒める。

ゴーレムが封を開ける。力加減を間違つて封筒が破れた。

「ちえつ、まだまだ精度が甘いな」

中には二枚の紙。とりあえず、順当に上にある方から広げた。水面は揺れない。

《ホグワーツ魔法魔術学校

校長 アルバス・ダンブルドア

マーリン勲章、勲一等――

つらつらと肩書きが。マーリンなんて知らないな。読み飛ばす。

《親愛なるミストウッド殿

このたびホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。

新学期は九月一日に始まります。七月三十一日必着でふくろう便にてのお返事をお待ちしております。

敬具

副校長 ミネ

ルバ・マクゴナガル》

なるほど。いかに尊敬する師匠であろうとも、さすがに相手が学校で大々的に魔法を教えようという先生方なら術を破られてもおかしくはない。たぶん。師匠(と自分)は魔界神と戦ったことも有るのだが……いくつかあるうちの”しよぼい”魔界だったのかもしれない。いやあ、世界は広いな。

……釈然としないが、とりあえずこれは入学案内で、もう一枚の紙が教材リストと。

「うん、入学案内な」

全く案内できてないが。ホグワーツがどこにあるのかも分からないし、新学期が九月一日に始まるとして、いつからいつまでのうちに学校入りしてればいいのか。まさかここから毎日通えるとも思わない。

入学すると返事をすれば詳細が送られてくるのだろうか。しかし、そこでどういう種類のどの程度の魔法が学べるのかも不透明な内から入学を決める気にはなれない。その辺も含めて、質問の手紙を返そう。とりあえず書き終わるまで梟を家に入れてやる。森の瘴気にあてられて少し弱っていた。

解毒兼栄養ドリンクを用意しながら、ついでに硯と墨を引き出す。精神圧縮墨。書いた文章に文章以上の”思い”を詰め込むことができる。

梟の回復を待つ意味もあって、たっぷり時間をかけて墨を擦る。調子が戻ってバサバサと準備運動のように羽ばたくのを横目で見ると、さらりと書き上げた。

《親愛なるダンブルドア殿

なんのこったよ。

かしこ

魔法使い メリッサ・ミストウッド》

二話 先生がきた

ホグワーツからの手紙が届いた次の日。魔理沙はいつもよりそわそわとして落ち着きが無かった。『なんのこった』と思って、実際にその返事をした入学案内であったが、やはり期待する部分もある。梟媒体だったが何といても魔法使いの連絡手段。もう相手方についているはずだ。それでどう説明が返ってくるか。見たことも無い原理の魔法を教えているのなら嬉しいものだ。昨日の夜には森の入り口に梟（又はホグワーツの職員）を出迎えるゴーレム（《なににするものぞ？》という看板を持っている）が立てられた。……手紙の言葉遣いに気を悪くして返事がこないという可能性も一瞬頭をよぎったが、その程度で拗ねるような度量の小さい組織なら付き合わないでもいいやと思いついてすぐに不安は忘れた。

しかし、正午を過ぎた頃にはもう落ち着いてきていた。そわそわすることに飽きたという部分もあるし、はしやいんでいるのがなんとなく気恥ずかしくなつて意識して引き締めた部分もある。

「つてことで修行だ修行」

気合を入れなおし魔導書を開く。今日からはこの中の魔法からいくつか組み合わせて新技でも作ってみようか。

しかし、組み合わせ相性の良さそうな魔法の選定に入ろうとしたちようどその時、ゴーレムの視界に森に入ろうとする人影が映った。

その男の特徴をざっと並べると……ちゃんと洗っているのか疑問に思うようなネットと半端に長い黒髪、骨折か何かでそうなったんじゃないかと思わず邪推するほど急角度の鉤鼻、悪質な病や毒と生命力が今まさにせめぎ合っているという様子の不健康そうな土気色の肌。……まあ、普通ではない。普通だったとしてもこの見た目のおかげで他人から虐げられてそのうち振じ曲がるに違いない。お気の毒だ。それに服装。上から下まで真っ黒だ。魔理沙だつて黒を基調とした服だがその分大きな白いエプロンが目を引くし、フリルやリボンやらの”遊び”が有る。森に近づく子供を誑かすためにむしろかわいらし”すぎる”ほどだ。だがこの男の服はどうだ。何かの焼け

跡かと言いたくなるほど本当に真っ黒。完全に”私は人付き合いなんて興味有りません”と物語っている。だというのに、その男はずんずんとゴーレムに近づき、「ホグワーツの遣いとして参上した、魔法薬学教授 セブルス・スネイプだ」と名乗った。その言葉の様子もまたぶつきら棒の投げやりで「本当は来たくなかったんだがな」という幻聴が聞こえてきそうなほどだった。

十代の子供にモノを教える先生がそんなんで良いのかという疑問が頭の中で反響する中、「いや、確かに人としてはアレかもしれないが如何にもデキそうな先生じゃないか。うん、アレが地下室か何か薄暗いところで何か臭い液体を弄ってるのを想像してみろ。とつても似合うだろ？」などと長々と自分を説得し、ゴーレムに次の指示を送る。

ぎこちなくお辞儀して手で家の方を指し示し、先だつて歩き始めるという一連の動作を確認してから、最小限の防衛だけ残して、魔導書やらその他一切の研究道具を地下室に片付けてついでに居間の大部分を占領していた失敗作やらガラクタやらも押し込んだ。

その作業がなかなかの時間を取ったせいで、ひとまず完了してホツと椅子に座ったときには玄関の呼び鈴が鳴ってしまった。

ため息を一つついて玄関を開ける。ドアのすぐ前にさつき見たよりも更に表情が険しくなったスネイプが立っていた。いったい何だと言うんだこの男は。魔理沙は”いつ何があってもいいように”じんわりと身体に魔力を巡らせ始めた。

「……………どうぞ」

「……………うむ」

ともあれ、一度話してみなければならぬ。それにどうせならさつき”準備”した場所で相手をした方が有利だ、そういう判断で居間に通す。

いつもは失敗作の山になっている場所に今日は椅子と机、それにお茶（原料はアレなものだが一応茶の味がする）の用意がしてある。しかしそれは同じ年頃の女の子の中でも小さい方である魔理沙の背丈に合わせた作りであったためにスネイプが座るとひどく窮屈になりそうだ。

「ちよつと失礼するぜ」

これ以上機嫌を悪くさせるのは自分ためにならないと思い、すぐに直す。魔理沙が手を軽く上に挙げると、その動きに合わせてまるで粘土が引き伸ばされるように椅子と机の脚がニユツと細長くなった。これでスネイプも新たに腹を立てるポイントは無いだろう。そこへ座ると今度は魔理沙の足がつかなくなるわけだが。

「さて、ミス・ミストウッド」

「あー、メリッサでいい。ミスミストってなんかマヌケだろ？」

「……ミストウッド、君は……どの程度の魔法を学べるのか——ホグワーツで学ぶことがあるものか……低レベルな授業のせいで貴重な時間を無駄にするのではないかと疑念を持っていると、あの”驚くべき”手紙に記していたが」

「そうやってはつきり言葉にするとめちやくちや感じ悪いけど、確かにそうだ」

「なに、むしろ魔法と聞いて考えも無しに飛びつく方が愚かなもの。当然の疑問だ。特に、君のような……既に杖無し無言呪文をマスターしている”優秀な者”にとっては」

「そりゃあ、どうも」

『杖無し』と『無言』がどの程度凄いことだとされているのか分からないからいまいちピンとこない。

「しかし、ホグワーツでは直接使う魔法以外にも様々なことを教えている。薬草学に魔法生物学、三年から始まる占い学などはまだまだ解明されていない部分も多く、本物の預言者にまみえる機会はそうないはずだ。ホグワーツにはそれが居る」

もつとも、スネイプは預言なんて大嫌いだが。

「まあ、面白いとは思うが」

面白い”いくつかの”教科のためにワザワザこの森を出るのは気が進まない。師匠から渡された魔導書もまだまだ未解明未取得な部分が多い。ここでやることはいくらでも有る。あと魔理沙は認めないだろうが、外に出るのに少しビビっている。好奇心と戸惑いが半々くらいだ。

「……こうして交渉のまねごとをしているが、根本的な話をすると、基本的に魔法使いの子供は学校に入ることが義務付けられている。少なくとも我々の”世界規模の”魔法コミュニティではな。それこそ、未成年が学校外で意図的に魔法を使うと魔法省から罰せられるのだ。ホグワーツではなくともどこかの学校には入るよう、イギリス魔法界として要請している。その中でホグワーツは最高の魔法学校とされているため、消去法的に、ホグワーツ入学が賢明な判断と言えるわけだ」

「全く知らないが、魔法界つてのは窮屈そうで余計に嫌になつたぜ」
「無論、訪ねてくる職員を全てやり過ごすなり返り討ちにするなりすれば君は自由と言えよう。吾輩としても秘境で独自の魔法を極めようという魔法使いをワザワザこちらに引き込むのは気が進まん。余計な世話であろうし、こちらにも面倒を運ぶことになる。この森の魔法が有ればそれも可能だろう。魔法省が総力を上げれば分かんが、そうなる前に諦めるはずだ」

スネイプは小さく「まして今年ハリー・ポッターが入って来る」と付け足したが、魔理沙にはそんなことより気になる一言があつた。

「……そっちは森の結界を破ってるんじゃないのか？」

「残念ながら破つてはいない。そうでなければ今頃 魔法生物規制管理部から山のように私有地調査許可申請が届いているだろう」

ここまでの道のりを思い出してスネイプの顔の皺は更に深く、さながらクレバスのようになる。

「大小様々な妖精に小鬼、毒蜘蛛毒蛇闇の生物。植物とて当たり前の雑草のように珍種が群れて生えている。特にキノコなどは目眩がするほど多種多様だ。吾輩の薬棚をひっくり返してもこうまで混沌としたことにはならんだろう」

「ああ。研究には役立つてるぜ」

「であるのに、だ。こちらが手紙を出す前に感知した魔力はただ一度……ミストウツド、君の魔力だけだ。吾輩には何らかの罠に思えて仕方が無いのだがね？」

「私にもその覚えは無いぜ。……でも確かに、単純に結界が揺らいだ

ならその辺のバケモノの魔力も溢れ出すよな」

それでどれが誰の魔力だか分からなくなろうというものだ。だが、結界は魔理沙の魔力だけ鮮明且つピンポイントで通した。罫かどうかはさておき、スネイプの言う通り人為的な物だろう。そしてそんなことができる存在の心当たりは今のところ一人しかいない。

「魅魔様か」

「ミマ?」

「私の師匠だ」

「……ああ、この土地はミマという人物の私有地として届け出が為されている。700年前にな。して、その人物から直接魔法を習ったのかね? 今はどこに居る?」

「確かに直接習った。今どこに居るのかは知らない。届け出つてのは、魔法省にされてたのか?」

「左様」

結界を弄くつたのは恐らく魅魔（又は魅魔が予め仕掛けていた術式）。鼻を通したのもたぶんそうだ。

そして、魅魔は魔法省や魔法界と関わりが有った……。

「ホグワーツって魔法界ではどのくらい有名なんだ?」

「”マトモな”魔法界の一員ならば知らぬ者はまずいない。それこそ、あの”案内する気のない”入校案内でも支障がない程度にはな”気を悪くしたんなら謝るぜ”
「かまわん」

で、ホグワーツのことは皆知ってる。

ということとは、魅魔は魔理沙をホグワーツに入れるつもり(だった)ということだ。ホグワーツからどういふふうに入校案内が届くかというのは魅魔も知っていたはずだから。

「じゃあ、入ってみようかな」

行くように仕向けたということは、行った先で学ぶことも有るといふことだろう。魅魔は割と破天荒な霊（悪霊と呼ばれる程度には）だったが、魔理沙に魔法を教えることについては”マジ”だった。マジ過ぎて何度も死にかけた覚えがある。もしかしたら修行にかこつ

けて自分の魔法を試してただけかもしれない。……そうだとしてみても、魔理沙を使って探らせる”何か”が有るということになり、魔理沙はそれを覚え込んでしまえば結局自分の利益になるワケだ。

「……ミマについての話を聞いて、吾輩は俄然ミストウツドの入校に対する不安が高まったのだがな」

対してスネイプは渋い顔。魔法界の歴史に載っていない、少なくとも700年は活動している魔法使いの直接の弟子だ。面倒じゃないはずがない。

「お前に決定権が有るのか？」

「無い。が、言葉遣いの成っていない生徒の成績を低く付けることはできる」

「それは失礼致しましたわ」

ついさつきまでの粗暴さが嘘のように上品に口元を手で隠してウフフとはにかむ。スネイプは不思議な寒気を覚えた。

「……『お前』等の特に強い口調を使わなければ、今まで通りの話し方で構わん」

「いえいえ、言われてみれば、先程までの態度は先生に対するものとして不適切でしたもの。ああ、お恥ずかしい」

「止めなさい」

「はいはい、分かったぜ」

今度は歯を見せていかにも悪戯っぽくニシシと笑った。用心深いがそれ以上に人懐こい性格である。この頃になると最初の警戒はどこへやら、完全にスネイプのことをからかい甲斐のあるヤツだと思っていた。からかわれる本人の方は魔理沙のことをフェアリーのようにだと思っていた（もちろん悪い意味で）。

「それで、入学することは決まったワケだが……結局どうやって行けば良いんだ？」

「そのことも有るが、まずもって君は教材の買い方も分からんだろう。これまで魔法……いや、”我々の”魔法界に触れずに暮らしてきたことだしな。今から吾輩が付き添って買って買い物に行く。……この分では殆どの備品は元々持っているのだろうか」

「ああ、確かに実験器具は一級品を揃えてる自信が有るぜ。服もなんとでもなる。買わなきゃいけないのは教科書だな。あと、杖もよく分からんし、鍋も……『標準 二型』だったつけ？ そっちの規格が分からないから見ることになると思う」

「リストには一応目を通していたのだな。まあ、その買い物間に追々説明しようではないか」

「どこで買うんだ？」

「ダイアゴン横丁という場所だ。ロンドンにある。本も杖も他では買えないということはないが、ダイアゴン横町の品揃えには及ばん。これからイギリス魔法界の一員となるにあたって見ておいて損はあるまい」

「ロンドンまで、か。結構遠いな。どうやって行く？ そっちの常識じゃ、どうせ私が空を飛んでいくのは『ルール違反』なんだろう？」

「『姿くらまし』を使う」

「姿くらまし？ ああ、隠形の術だな。『バレない反則はテクニク』ってか？ ”センチ”の割にはいい考えしてるじゃないか」

「姿くらましは移動手段だ。言うなれば『瞬間移動』……」

と、落ち着いた口調で魔理沙の何やら勝手に不名誉な勘違いを訂正する。が、その言葉を聞いた方は跳び上がらばかりの勢いで訊き返した。

「瞬間移動!? お前、瞬間移動できるのか!」

「『お前』?」

「……スネイプ 先生 は瞬間移動ができるのか?」

「如何にも。……難しい部類ではあるが、『姿くらまし・姿現し』は広く知られている魔法だ。君の方では珍しいのかね? 瞬間移動というものは」

「珍しいって言うかまず自分が今居る場所と目的地の座標を 正確に 把握する必要がある。間違えたらその場所に在るか或いはこれから移動する部分が消滅したり崩壊したりする。次に移動物が消えてそして現れた地点の周囲の状況変化に対処しなきゃならない。もと居た場所は身体一つ分の空間が真空になって例えばここから何

の対策も無しに跳べば乱気流で家の中がめちやくちやになるし逆に
行先の方は自分の身体分の真空を確保しておかないと身体を構成す
る物質と向こうにある物質が強制的に重ね合わされてうっかり新元
素を作っちまいかねない。もちろん自分は大怪我どころの騒ぎじゃ
ないぜ。超高精度高難度の計算処理が必要で普通のアタマジや結局
瞬間で移動なんてとてできない。もともと”そういう能力”を
持っているか魔法を極めて自分に最高級の改造を施した魔法使い
じゃないと全くもって実用的じゃない。私も瞬間移動の『し』の字も
齧ってない。緊急時には単純な『高速移動』の方が素早いし安全だ。
それこそ最”非”優先研究対象だぜ。『扉』を作るタイプだと結界術
の知識とやっぱり高速計算が必要だしもとの身体を捨てて魂だけ跳
んで行った先で新しく身体を構成し直す『妖精型疑似瞬間移動』もそ
れはそれで肉体を失った魂の完全な保存がかなり難しくてまず”不
滅”になつとかなないと寿命を派手に削ることになる……い！」

魔理沙は興奮気味の早口で一氣に説明した。そのせいでスネイプ
には殆ど聞き取れず、何か尋常ではないということしか理解できな
かった。

「それが……一般的なのか……」

「姿くらしも体が”ばらける”危険はある上に、17歳以上で試験
に合格しなければならんが……」

スネイプがフォロー(?)するも、魔理沙は「これは……:とんで
もないぜ……」などとブツブツ言うばかりで聞こえているか怪しい。
「いつまで呆けているのだ。君はこれからホグワーツでそれを学ぶの
だ。さっさと吾輩の腕につかまりたまえ」

「跳ぶのか、今から」

「先ほどからそう言っている。さあ、つかまりたまえ。途中で離すと
どこへ跳ぶか分からんからしつかりとな」

「うん。……じゃあ、よろしく頼むぜ！」

スネイプに続いて立ち上がった魔理沙が、腕にぎゅむつと抱き着い
た。スネイプは少々やりにくさを感じながらも、すまし顔で杖を掲げ
る。

……何も起こらない。

「……………」
「……どうやら、ここまでは姿くらはしは使えんらしい」
「徒歩で森の外を目指す間、二人は全くの無言だった。」

三話 横丁にきた

細い路地の間にポンツと大きく短い音が響いて、姿現しが完了する。森の外で姿くらしを使ったそのままに直立不動だったスネイクに対し、魔理沙は多少空中に浮いた状態で現れ、膝もついてなんとかこけずに着地したという状態だった。出発するときにかぶって来た大きなリボン付きの三角帽も足下に落ちてしまっている。

「着地失敗か。こういうのには自信があっただけだな」

「初姿現しで足から降りただけで上等というものだ」

「そりゃ良かった。軽くシヨックだったんだ」なんて返しつつ、チョイトスカート裾を掃って帽子をかぶりなおす。

「面白いなこの術。」そういう能力”を無理やり付加してる感じだぜ」

「……確かに、この魔法のコツは『どこへ、どうしても、どういう意図で』と、我が強く”無理やり”ではある。しかし……一度体験しただけで分析を？」

「何度でも好きに体験させてくれるワケでもないんだろ？ それに、私なんてまだまだだぜ。術を”受け終わって”も、この程度のいい加減な推測……いや、推測にもならない”感想”しか言えない」

「……なるほど。しかし吾輩が見てきたほぼ全ての生徒よりは冷静で鋭敏な思考と言えよう。それよりも、さあ、着いたぞ。ダイアゴン横丁だ」

スネイクの後について路地から一步踏み出すと、その左右には石畳の曲がりくねった通りが延々と続いていた。その場から見渡すだけでも数え切れないほど沢山の珍妙な看板や品物、そして”胡散臭い”恰好をした人々の姿が目飛び込んでくる。

「ほへー……」

感嘆して言葉も出ないという風で、目と口がマヌケに開いている。「どうしたね？。また珍しい魔法でも見つけたか」

魔法使いの子供にしては大げさな、それこそ初めて魔法と魔法使いを見たような反応に、スネイクは嫌な予感がした。瞬間移動のときの

ように”はじけ”られては面倒が過ぎる。全く、冷静なのかと思えばすぐに興奮するし他人をからかう。有能な”こども”というのは油断できない。

「いや……ホントに開けっ広げにやってるな、って。私の方じゃ魔法使いなんて師弟や主従でもない限り互いに研究のライバル同士でしかなかったから。こんな風にマジックアイテムやらその材料を活発に売り買いしてるのはちよつと驚きだ。予想はしてたが実際に見るとな」

「事情は分かったが、これからこの社会で暮らすのだ。少なくともホグワーツの生徒である7年間はな。慣れてもらわなければ困る」

「ああ。もう慣れた」

そう言つて本当にもう慣れた様子だから大したものだ。内心軽くギョツとした。

「……それで、金はいかほど持っているのかね？ 或いは、何らかの鍵や番号、合言葉などをミマから残されているとか。もしかするとこちらの銀行に金庫を持っていたかもしれない」

「鍵も金？ かね？ も無いが金？ きん？ なら持つてるぜ」なんて洒落っぽく言いながら帽子と頭の間腕を突っ込み、引き抜いたときにはその手に金塊が握られていた。

「空間を弄ることは君の魔法では超高度なのではなかったのかね？」

「ああ、単純な世界を作つて、隔絶魔法を織り込んだ布で作った帽子を出入り口にしてるだけだからな。簡単じゃないが、難しくもない。それに、出発前説明した方法でも”バラバラになつていい”ものなら少しづつ移動させれば計算量は抑えられるしな。……どのくらいあれば足りる？」

金のレートを気にする魔理沙だが、スネイプにとつてはそんなことは些事の些事だ。こいつ、今『世界を作る』と言つたか!?

「世界を……瞬間移動などより随分と高度なものに聞こえるが。正に神のような」

思わず立ち止まつて魔理沙の顔を覗き込む。しかし、当の本人の態度は非常に軽い。

「おっと、これはそつちじや珍しいことだったか。だけど、そりや海があつて山があつて植物動物に人間が暮らして……なんて世界は私じやとうてい作れないし、貰つてもすぐ壊しちまう。あくまで、無造作にモノを放り込めるだけの”箱”だよ。しかもコイツはさほど大きくもない。ウチの便所より狭いな」

「……それがそちらの常識だというのなら、領くしかないのだろうが……これからこちらで学ぶにあたって、この認識の差は支障を産むやもしれんな」

「だろうな。スネイプ先生以外にはマジックアイテムの類は貰つたか買つたことにしてとぼけておくれ。つてか、使わない方が良いかもな。それで、金のレートだが……」

スネイプは一応理解したが、納得はいまいちできていなかった。しかし魔理沙がとにかく話を進めようとする。その気分屋具合に若干の不満を抱きつつも、仕方なしに再び足を進め始めた。

「恐らくその量で足りるだろう。無駄に高価なゴテゴテとした 愚か者向けの鍋を買わなければ、な。しかし細かいことは銀行に行つてみねば分らん」

仏頂面のまま肩で風を切るような速足で歩く陰気な男の後ろをちみっこい金髪娘がちよこちよこことついていく。何も知らない者が見れば訝しみ、事情（特にスネイプについて）を知っている者が見れば後でクスクス含み笑いをするような光景だった。

鍋屋やら服屋やらを通り過ぎ、薬の材料を売っている店の前あたりで魔理沙が疑問を口にした。

「なあ、あんな保管法で品質は大丈夫なのか？」

道沿いに山積みにされた何らかの生物の内臓を指さす。あれでは変質は免れないし、虫も湧くだろうに。自分が調合するなら、あの材料は使いたくない。

「……確かに好ましいモノとは言えんが、保護呪文もかけてあるだろう。アレはさほど精度が重要な薬の材料でもないということもある」

保護呪文なんかかけたならそれこそ魔力的にも変化して魔法薬の材料失格なんじゃないか、という問いは飲み込んだ。魔法薬学教授のス

ネイプが『別にいい』と言っているのだ。別にいいのだろう。……何というか、魔法使い同士なのに互いにカルチャーショックを受けてばかりの二人だ。

その後も道を更に進む。魔理沙が「動物屋のすぐ近くにワザワザ別で梟屋が有るのは何でだ？」と訊けばスネイプが「他の動物を集めたより梟の人氣が高いからだ」と答え、スネイプが「先ほどの帽子の技術を応用すれば瞬間移動も容易なのではないかね？」と蒸し返せば魔理沙が「ティーポットの蓋には茶が注ぎやすいように穴が開いてるけどそれはつまり出入り口が二つある空間は維持が困難って証明なんだぜ」と分かりやすいような分かりにくいような説明をする。

「さて、グリーンゴッツ銀行……魔法界唯一の銀行だ」

そうやって歩くうちに嫌でも目を引く白く巨大な建物の前にたどり着いた。だが好奇心旺盛な魔理沙の金色の瞳は、そのわきから延びるダイアゴン横丁とは対照的な薄暗く陰気臭い（しかも実際に臭い空気が漂ってきている）通りも目ざとく見つけた。

「あつちはなんだ？」

「普通の子供なら銀行に気を取られて気付かないか見なかったことにするような雰囲気なのだが……まあ、ミストウッドなら興味を持つと思っていた」

スネイプはうんざりしたように言葉を続ける。

「夜の闇横丁という。魔術用品や材料等を扱っているのはこのこと同じだが、特に闇の魔術……言わば攻撃的な魔法や陰湿な呪いの類いの専門店が並ぶ。しかも違法なものや盗品がかなりの割合で紛れている。客層は」

「当然輪をかけて胡散臭いな」

「左様。君もこちらの魔法に多少なりとも危機感を持っているのならば迂闊に近付かぬようにしたまえ。或いは、教師や魔法省等に目をつけられたくなければ……。もつとも、その分“掘り出し物”とも出会い易い上、逆に闇の魔術や生物の対策になる品も多いのだがね」

「ああ、覚えておくれ」

横目で魔理沙の表情を窺う。この様子では来年には忘れて（それか

覚えていてもワザと）平気で探索してるだろう。

「さあ、手早く換金しようではないか」

言っても仕方がない。むしろ下手に探索して校則に触れることでもしてくれれば退学にもできよう。そう切り替えてグリーンゴツツへと入っていく。ブロンズに輝く大きな扉の両脇には立派な赤と金の制服を身に纏った小鬼が立っていた。

「賢そうだな」

浅黒くて皺が深く骨の出張った老け込んだような顔にずんぐりとしたプロポーション、そして極端に長い指。それらの特徴的過ぎる特徴が魔理沙とほぼ同じ大きさの体に振じ込まれているのだから、……はつきり言ってしまうえば小鬼というのはブサイクな種族である。

しかしこの小鬼は、勿論先に挙げたような特徴はあるものの、背筋はスツと伸びて口元は引き締まり、目も真っ直ぐ前を向いて落ち着いている。身体を停止させておくというのは、意外なことに高度な脳を持ってきつちりとした教育を受けていないとできないのだ。

「ああ賢いとも。ホグワーツのノロマな生徒とは比べ物にならないほど厳格で忠実だ」

『ホグワーツは最高の学校』じゃなかったのか？」

小鬼の作法通りという感じのお辞儀を受けながらブロンズの扉をくぐると、その次には銀色の扉。何やら盗つ人を戒める詩のようなものが刻んである。『宝の他に 潜むものあり』……おおかた防衛の仕掛けのことなのだろうが、魔理沙にとってはそっちもお宝に思える。魔法界の銀行の防御など、いかにも堅そうではないか。

「非常に残念ながら、最高の集団でも千人も居ればウスノロが大半となるのが人間というものだ。ホグワーツでさえ”ああ”なのだから、もし吾輩がよりレベルの低い学校の教師となったらと思うとゾツとする」

「そりや生徒の方もゾツとするだろうぜ」

ここでもまた左右に立っていた小鬼にお辞儀されたが、それはもう眼中にない。扉の先に広がる大理石のホールの見事に目を奪われていた。

百を軽く超える人数の小鬼がカウンターで記帳や宝石鑑定等を行っている。更にホールから無数に延びる通路の扉にはやはり小鬼が立ってこれまたキビキビとした態度で客の案内をしている。

そんな様子を見まわしながらスネイプに続いて奥へ進み、カウンターに居た一人の小鬼に近付いた。カウンターは魔理沙の肩辺りまで高さが有り、小鬼たちは脚高の丸椅子に座って作業しているようだ。

「金をガリオオンに換金したい」

「……モノはどちらに？」

小鬼が机に手を置き少し乗り出す。スネイプが金を持っているものと思っていたのか魔理沙が金塊をカウンターに置いたのに一瞬驚いたような表情をしたが、そのまま流れるような動作で秤に乗せた。

「……39ガリオオン8シッケル19、3クヌートになります。端数を記録し、換金を実行しますか？」

「うむ」

「しばしお待ちを」と言つて丸椅子から降り……そのままカウンターのかげにかくれる。魔理沙が覗き込もうと少し背伸びしたときにはもうコインの入った袋を抱えて顔を上げたところだった。

それをカウンターのの上に一度出して並べ、数を確認する。金貨39枚、銀貨8枚に銅貨19枚だ。金貨からそれぞれガリオオン、シッケル、クヌートで価値もガリオオンが一番上なんだろうということは何も考えずとも理解できた。

スネイプが頷くと、再び袋に戻してこちらに寄越し、換金は完了となる。作法は一流だけど愛想は無いな、という感想だ。

「29クヌートで1シッケル、17シッケルで1ガリオオンだ」

グリーンゴツツから出る途中、銀の扉の辺りで思い出したようにスネイプが説明した。魔理沙は「ふくん」と気の抜けた返事をしながら『距離でもないのに十進法を採用しないなんてバカだな』と思っていた。

必要な物を揃えるのに十分な現金（スネイプが発言を訂正しなかったのでたぶん足りるのだろう）を持った二人はダイアゴン横丁をもと来た方へ歩く。

「まずは鍋屋だな」

「本屋の方が近いぜ？ 教科書を売ってるのは別のところなのか？」

「そんなところだ」

スネイプは半分急かすように魔理沙を鍋屋に連れて行った。その店の扉をぐぐれば、すぐにキンキラキンの純金鍋やら折りたたみ式やら勝手にヘラが回る自動掻き混ぜ鍋なんかが目に入る。しかしそんな鍋は即座に意識から外れて『標準二号』を探しにかかる。魔理沙は鍋の変な加工のせいで薬の質が変わるのをかなり気にする。飾りや魔法や折り目なんて糞喰らえだ。できるだけシンプルなもの良かった。

「二号つてのは……これか。ああ、私が持つてるどの鍋ともちよつと違うサイズだな」

サイズを見つけたらあとは微妙なキズや歪みの吟味だ。これによって熱や圧力のクセが生まれ、場合によっては使い物にならない（魔理沙の基準で）。いくつか吊り下げられている錫製の二号鍋を眺めたり覗いたりぺちぺち叩いて調べていく。

「……これが良いかな。これにするぜ」

十分弱の考慮の末、ようやく一つ決まったらしい。その旨を付き添い人に伝えようと声をかけたのだが、姿が見えない。どうやら鍋屋の中には居ないようだ。

「このくらい待つか、それが無理なら急かしてくれりやいいのにな」
「やっぱり友達が少ないんだろなあ、スネイプ先生」なんて心の中で呟きつつ、戻って来るまで適当に他の鍋を見物していかと店の奥へ踵を返した瞬間に丁度スネイプが入って来た。腕には何冊かの本を抱えている。魔理沙を本屋に連れて行きでもしたら大変（面倒）だろうからと、ワザワザ品定めに夢中になっているのを見計らって教科書を買ってきたのだ。

「急に居なくなっただと思ったら、一人で本屋行ってたのか。何も言わずに生徒を置いて行くのは教師としてどうかと思うぞ？」

会計を済ませた辺りで魔理沙が抗議する。スネイプはわざとらしい猫なで声で答えた。

「どうしたね、まさかとは思うが、心細かったのかね？」メルちゃん”

「そうだけ。『もう私、スネイプ先生が居ないと不安で不安でたまらないのお』」

同じくわざとらしく腕を広げて駆け寄る魔理沙。当然、スネイプはそれを見た目に反して機敏な動きでサツと避けた。

「買い物してくれるのは結構ですけど、暴れるなら通りに出てからにしてくれませんかねえ？ スネイプ先生」

しかし続く店主の注意は躲せず直撃。なにせ音速だ。振り返れば魔理沙がニシシとあの”悪戯顔”で笑っている。

嵌められた！

羞恥心で顔色が土気色からテラロツサのような赤褐色になったスネイプは「……失礼」と謝罪兼退店の挨拶だけ述べて、魔理沙の抱擁を避けるときより更に輪をかけて素早い動きで店を出た。

「そんなにイライラしないでくれよ。スネイプ先生から振って来たんだぜ？」

いつの間にか鍋と教科書をしまい込んで追いついてきた魔理沙が弁明する。確かにそうだ。なんとなく振り回されている意趣返しにと大人げなく皮肉など言うからそれが返ってきただけだ。それは分かっている。分かっているから余計言葉にならない。

「さて、あと必要なのは杖だけだな」

結局、さっさと忘れることにした。幸運なことに、魔理沙も程度を弁えているのか追い打ちはしなかった。歩く速さもそのうち元に戻り(それでも普通よりかなり速くて何人も追い抜かした)、やがて一軒の小さな店の前で立ち止まる。

《オリバンダーの店——紀元前382年創業 高級杖メーカー》

四話 杖屋にきた

《オリバンダーの店——紀元前382年創業 高級杖メーカー》

とても高級店とは思えない狭い店幅に埃っぽいショーウィンドウ（しかも飾ってある杖はたった一本）という店構えだが、『高級杖メーカー』なんて看板を掲げてて文句を言われなのだから、高級店なんだろう。看板の文字も全体的にかすれているけど。

スネイプはそこに入っていく。「マジか。腹いせにしよばい店で買わせようとしてるんじゃないか?」……なんていう失礼な考えは、店の中の空気を感じた瞬間に霧散した。天井近くまで積み重ねられた数え切れないほどの細長い箱の列の間から漂う気配は、確かに超一流の『作り手』のものだ。

「いらっしやいませ」

良い年の取り方をした老人特有の温和な声がしたと思ったら、目の前におおかたそのイメージ通りの老人が立っていた。

「おお、セブルス。セブルス・スネイプじゃな。久しいのう……26センチの樺の木。指先の動きに忠実で魔力の集中性能も高く、繊細な呪文に向く」

「左様ですな。私もこれほど使いやすい杖は無いと思っておりますよ。……で、今日はこの娘、ホグワーツの新生の杖を買いに来たのです」

老人の話をぞんざいに流して、横にいた魔理沙を少し前に押し出す。星一つ無い夜空の月のような目……魔理沙に言わせれば『一流ベテラン研究者特有のイツちゃってる目』が、魔理沙の大きな瞳を覗き込んだ。

「マクゴナガル先生はときたまそのような用事でいらっしやるのじゃがな……スネイプ先生は初めてじゃな」

老人の瞳の中に映る自分の瞳に映る老人と目が合った。

「お名前は?」

「メリッサ・ミストウッド」

老人は「ふーむ」と唸った。魔理沙はなんとなく偽名を見透かされてそうだと思つてひやりとした。しかしすぐに老人が「それでは拝見させていただきます」と言い、ポケットから巻き尺を取り出して次の動作に入つたことで多少安心した。バレなかつたか、バレたとしても支障はないということだ。このタイプの人間が、まさかぺちやくちやと他人の秘密を広めたりつまらない呪いに精を出したりはしないだろう。

「杖腕は？」

「杖腕って？」

そのまま利き腕のことなのだろうか。それとも、何かしら他の要因（例えば魔力の流れ方）で杖を持つべき腕を判断する基準があるのだろうか。そう思案していると横からスナイプの説明が入つた。

「利き腕のことだ」

利き腕のことだった。

「なら両方だぜ」

「両方？ では、何か緊急のことがあつた場合に咄嗟に出るのはどちらですか？」

「その出来事に近い方。真ん前なら多分半々の確率だ」

「ふうむ。身体は左右で微妙に違うものじゃからのう。この店ではその微妙な筋肉の付き方等からも振りやすい杖を選考していくのじゃが……」

「じゃあとりあえず両方採寸してみても杖の選択肢が多く残る方を杖腕にするぜ」

「さようですか。では、腕を伸ばして。そうじゃ……」

先程から老人の手の中で待機していた、銀色の目盛りの入つた長い巻き尺が自動で採寸していく。

肩から指先、手首から肘、肩から床、その後指の一本一本に絡み付いて太さ長さを調べ、何故か頭の直径や脚の諸データ、左右の鼻の穴やその間なんかも測られた。

それが終わり、さあどんな杖が出てくるかとワクワクする魔理沙だが、当の老人が「うーむ……」と唸って何やら考え込んでしまつてい

る。

「どうしたのですかな？ 何か不具合でも？」

「いや、スネイプ先生、左右の寸法に全くもって違いが無いのじゃ。確かに数字の上では多少の違いはあるのじゃが、おそらく今日一日のむくみやなにやの調子。明日には逆転も有るでしょう。そして予想が正しければこのまま左右均等に成長する……。どちらを杖腕としたものか……」

「じゃあ問題無く両方で使えるってことじゃん。何言ってるんだ？」

魔理沙の冷静な指摘に「おお！ 確かにそうじゃな。ではではこれから杖の選考に入りましょう」と言い残して老人は箱の列の間に消えた。これにスネイプは眉をひそめてため息をついたが、魔理沙は特に気にしていなかった。研究者には変なヤツが多い。あの爺さんもそういうことなんだろう。箱の壁の向こうから老人が語る。

「オリバンダーの杖は強力な魔力を持った物を芯に使っております。多くは一角獣のたてがみ、不死鳥の尾羽、ドラゴンの心臓の琴線。他にも私や父祖らが選び、残した良質な芯材たち。一角獣も不死鳥もドラゴンも何匹も居って、しかも、例えば同じ不死鳥の尾羽でも尾の左端の羽と真ん中の羽では様子が違うために杖の性能も変わるのじゃ。『兄弟杖』として特別な因果でつながりはするのじゃがな。そして本体となる木材も同様。それに仕上りの長さ太さでも変わる。じゃから一つとして同じ杖は無い。もちろん、ピッタリと一人一人に合う杖をお渡ししますから、他人が貴女の杖を使ったり、貴女が他人の杖を使ったりしてもしつくりと来ない。自分の杖程の力は出せないわけじゃ」

老人は一つの箱を列から引つ張り出してきた。

「もちろん、儂を遥かに凌ぐ杖職人が作った杖なら分からんが……。そんな者はそうそう居ないと自負しておる。さあ、ではまず、これを。サンザシに一角獣のたてがみ。25センチ、なかなかの弾力」

簡単な説明とともに杖が差し出されたが、魔理沙はまさかの文句をつけた。

「もつと短くて手元で振れるのが良いと思うんだが」

なんとなく合っていない気がする。無論、魔理沙は相手を一流の職人と踏んでいたから文句を言う予定は無かったのだが……老人の方もあまり合わせようとしていない感じがするのだ。

「いやいや、貴女には長い杖が合う。これでも短いかと思うほど。ほんの小手調べじゃ。多少は合わせたのが、の。それにピタリと合う杖ならば長くとも思い通りに振れるものじゃよ」

そう言われて納得（まさか短い方にズレているとは思わなかったが）し、とりあえず握ってみた。確かに重さの感覚からして、その長さのわりに軽く振れそう。老人が「では少し振ってみてください」と言うので、その手元のジェスチャーの通り縦に振ってみる。杖はスポンツと音をたてて魔理沙の手から抜け飛び、老人の眉間にクリーンヒットした。

「ううむ、ここまで合わぬとは予想外じゃ」

老人は額をさすりながら杖を片付け、また新たな杖を出してくる。

「これは向いておるはずじゃ。クルミにドラゴンの心臓の琴線。32センチ、あらゆる呪文に適応」

今度はどうやら真剣に当てにきているらしい。おとなしく受け取って、さつきと同じように振る。すると、杖先から赤や緑の火花が飛び出し……申し訳なきようにヌルツと魔理沙の手から杖が滑り出た。老人はその手にすぐさま次を突っ込んだ。

「クマシデに一角獣のたてがみ。33センチ、主にとことん尽くす」

暫く静かにしていたが、やがてブルブル震え始めて、最後にはさつきと同じように抜け出た。

「うーん、難しい。このどちらかで材と芯は確定して、あとは個々の差を合わせていくだけじゃと思っただが。まさか拒絶とは」

「杖に拒絶されたのか、私は」

魔理沙には杖というものがどういうものか分からないが、どうも性格というものがあるようだ。そして初めの杖は盛大に突っぱね、あとは「申し訳ないですが別のご縁で……」という感じ。しかも二つの説明は如何にも”何にでも合う”ような言い回しだった。それにも合わなかったと思うと少々凹む。

「いや、そう気を落とされるな。全くもって気が合わないのなら初めからうんともすんとも言わん。何かが起こるといふことは、第一印象は良いのじゃ。問題は杖が貴女の魔力を引き出し始めてから起こっておるといふことになる」

魔法の杖たちによる判定は『第一印象が良くてちよつと付き合つてみるとすつ飛んで逃げたくなるような人』ということか。なんて追い打ちだ。

「あー、こういうのはよくあるのか？ 杖が逃げるみたいだな」

「いや、なかなかお目にかかれない。相性が悪ければ無反応か暴発がほとんどじゃ。良ければ持ち主が望むような光景……多くは美しい光や温かさなどが辺りを包む。どっちでもなければ地味な光や火が杖先から出るのう。……杖が飛び出すのは……そうじゃ、ミストウッドさん、貴女は杖無しで魔法を上手く操れるかね？」

「ん、まあ、一応な」
なにやら思い当たった様子の老人に、曖昧な答えを返す。一応本当のことだ。ガッツリそつちを武器に生きてきたとまでは言わなくてもいいだろう。

「ならば、杖を振るときに何らかの魔法を使おうとしておるのじゃな？ それの問題なのじゃ。杖無し魔法のために既に集中や加速などを完了した魔力を、杖が更に高密にしようとしてしまつて異常な性質の魔力を産みだす。結果、杖が危険を感じて逃げ出すのじゃ」

「いや、私は何かの魔法を使おうとはしてないぜ？ 考えてたことと言や、せいぜい『できたら暗い色の杖が良いな』くらいなもんだ」
「ならば次は発散させるように意識すればよかろう」

スネイプの低い声がまたもや横から指摘した。しかし魔理沙は不満気に眉を寄せた。「わざわざそんなことしなくちゃならないんなら杖なんて要らなくないか？」と、杖職人を前にしてこの言いようである。老人は困ったように笑ったが、スネイプは変わらずしかめっ面で返答した。

「魔法界には『杖』という単語が入る諺がごまんとある。法やスポーツのルールにも必ず杖に関するものが有る。それほど杖の携帯は常識

で、言わば文化なのだ。もちろんホグワーツでも杖を持っていることを前提に話が進む。君が、教授らや学友たちから何度も繰り返される『何故杖を持つていないのか?』という問いに7年の間逐一答えるつもりならば吾輩は別に構わんが」

「それは面倒だ」

魔理沙はやれやれと首を振って、プラスの考えを探す。そうだ、体内では魔力を増幅させること”だけ”にとことん集中すれば、魔法の威力強化というメリットも生まれるのではないだろうか。どんな魔法を使うか考えつつそれをするのは簡単じゃないだろうけど、要は慣れだ。

「じゃあ、うん、つづけてくれ。爺さん」

「では先ほどの杖から。貴女にはクルミかクマシデ……そうでなければクリが合うと思うのじゃ」

差し出された杖を握る。今度は手元に魔力が集まらないよう意識して。杖の先端から風が吹き出し始めた。

「ふむ。良くはなったが、これではないのう」

サツと取り上げ、今度はそのひとつ前の32センチのクルミの杖。先ほどより激しい火花が上がるも老人は納得しない様子。これまたひったくるように取ってしまう。

クマシデ、クルミ、クリ、他のどれか、クマシデ、クルミ………という風に杖をどんどんと試していく。なるほど、確かに老人の言った通り魔理沙にはクマシデとクルミとクリが良いようだ。他では明らかに反応が悪い（レッドオークと、あとトウヒとかいう木が偶にマシな反応を示した）。一つ文句をつけるとするなら、興が乗って来たのかほとんどん交換が早くなってきて、特に取り上げる動作が乱暴すぎて手が擦り切れそうになることだ。魔理沙が何回かに一度 杖を持つ手を変えなければ今頃血が滲んでいてもおかしくない。まあ、そうになったら回復すれば良いだけの話だが。

しだいに杖の木はクルミとクリの二種類に絞られ、代わりに芯の種類が増えていく。『不死鳥』と言えば『尾羽』だったのが『飾り羽』も登場しはじめ、更には「儂は好きではないのじゃが……」と言いつつ

『ヴィーラの髪』とかいうのも出てきたりした。

「クリは芯によつてその性質を大きく変え、また、使用者にも引つ張られるのじゃが……別の性質として、魔法生物学、薬草学、又は飛行の才能に優れる者に惹かれる傾向があります」

「まあ、自信あるぜ」

「そうじゃろうそうじゃろう。そしてクルミ……こちらはその適応能力が特徴じゃ。あらゆる呪文、治癒に変身に闇の魔法にと、本当にありとあらゆる呪文を完璧にこなす。貴女の難しい魔力にも合わせる気概を持つておるじゃろう。しばらく使えば”面倒くさい”意識も不要になるはずじゃろうて」

「そりゃあ結構なことだぜ」

老人はどうやら軽い皮肉のつもりで言つたらしいから、魔理沙は全然気にしていないという風に芝居がかった横柄さで応えた。

「そこでこの二つを試していたのじゃが……貴女の性格から察するに”いずれ”おかしな”使い方も試すことが有るじゃろう。となれば、クリでは少々対応力不足じゃ」と、老人は店の奥から一際長い一本を取り出してきた。

「クルミにスフィックスの髪。45センチ、筆舌に尽くし難い」

その（残念ながら）真っ白い柄を握る。杖先に変化は無い。しかし、腕に走る感覚が複雑に変化している。試されている。「杖のくせになかなか粹じやないか」と魔理沙の口角が少し上がった。さっきまでの杖とは真逆に集中力を上げ、次々にやってくる魔力の波に追従し、追いつき、先を予測して同調する。

その作業はあまりに静かで、本人以外……特にスネイプには何をやっていいのかサツパリ分からなかった。取り敢えず杖職人としての見解を聞こうと老人に声をかけようとすると、口を開く前に手振りで止められる。よく分からない状況に唸り声が出た。その瞬間、真横で火花の爆発が起こった。

スネイプは思わず「プロテゴ」と、盾の呪文を唱えたが、どうやらもともと無害らしかった。飛び散った光は壁や老人の体などに当たると更に小さな火花に別れて跳ね返る。やがて光の乱舞が止まった

とき、散りばめられた輝きによって辺りはまるで星空のようになっていた。

「いやはや、素晴らしい。全くもって、素晴らしい。かように難しい魔女と杖の奇跡的な出合に立ち会えることこそ杖作りの誉れじゃ……！」と、老人は感激に震えている。

「その杖は昔っから店の奥に仕舞い込んであったものでのう。我が父にして先代でもあるジェルベーズ・オリバンダーの話では、芯材はなんとあのギーザの大スフィンクス『アブル・ホール』の髪だそう。製作者であるオリバンダーの先祖をはじめ、今まで試した数人の魔女と魔法使いはみーんな精神を病んで聖マンゴ送りになった、とも」

「聖マンゴが何だか知らないが、何てモノ渡しやがる」

つまりあの魔力の波を上手く乗りこなせなければ、そのまま飲み込まれて気が狂ってしまうということだ。やはり魔理沙の予想は正しかった。この爺さん最高にイツちまつてる。評価の言葉自体はほぼ変わらないが印象は180度変わった。やって良いことと悪い事の境界が曖昧すぎる。『心という器はひとたびヒビが入れば二度とは……』だ。敵意もなしに精神面の危険をしかける人間は隔離するべきだと魔理沙は思う。きつとそれはこっちの常識でもそう。魔理沙が横目で見上げれば、スネイプも苦々しい表情をしているのだから。「そうかつかなされるな。その話は父が酔っていたときにしたものじゃ。俺も本気だとは思わんよ。……若い頃、試しにお客様に持たせてみようとしたら奥から走ってきた父にぶん殴られました。父が俺に手を上げたのは後にも先にもその一度きりじゃった……」

「どう考えてもガツチガチの”ガチ”じゃねーか！ まずお前が聖マンゴに入れよ」

魔理沙は思わず声を荒らげたが、老人には全くこたえていないようだ。笑顔のまま話し続ける。

「ははは、これは手厳しい。しかしながら、ピッタリとフィットしたじやろう？ ええ、貴女も今更他の杖にしようとは考えておらんはずじゃ」

「ちえっ……」

知らないうちに危ない橋を渡らされていたのは気に入らないが、全く、老人の言うその通りだ。今まで試したどの杖よりも……いや、今まで手に触れた全てのものよりしっくりくる。腕だけは確かなのが許せる点であり、イラツとするポイントでもあった。

「いや、素晴らしいものを見させてもらった。儂は、儂が売った杖とその持ち主を全て覚えておるが、貴女はその記憶の層の一番上に居続けるでしょうな」なんて調子の良いことを言いつつ、老人は杖を茶色の紙で包んで箱に戻し、魔理沙に手渡した。

スネイプが老人に「ガリオンを渡し、これで買うべき品は揃ったことになる。」

店を出たところで背の高い老婆が「スネイプ先生」と声をかけてきた。

「おや、マクゴナガル先生。……そちらも、新入生の案内ですか？」

どうやらこの厳格そうな、エメラルド色のローブを着たマダムもホグワーツの先生のような。そして、その後ろに緊張した様子で荷物を抱えて立っているいかにも真面目そうな若い夫婦と、もつと緊張しているらしいもじやもじや栗毛の女の子が新入生とその家族ということで相違ないだろう。魔理沙は、向こうには両親が居るのに何故先生が案内しているのか疑問に思った。

「ええ。こちら、ミス・グレンジャー。あとは杖を買えば買い物は終わりです。そちらは……今来たところですか？」

てんこ盛りになっているはずの荷物、二人については魔理沙の持つ杖の箱だけなのを見てそう判断したようだ。

「いや、こつちもこれで最後だったぜ。先に買ったものは重いし邪魔だったから一旦置いてきた」

本当は帽子にしまったのだが、そのことは誤魔化しておく。

「そうですか。では、9月になったら学校で。気を付けて帰るのですよ。スネイプ先生が付いている以上危険は無いでしょうけれど」

「おう、またな」

「それでは」

マクゴナガルに続き、グレンジャーの家族も軽く頭を下げて通り過

ぎる。

女の子が真横にきた辺りで魔理沙が口を開いた。

「杖屋の爺さんには気をつけろよ？ 私ほさつき殺されかけた」

それを聞いて一家は揃って目を見開いて硬直。マクゴナガルは不機嫌そうな顔で魔理沙に近付いた。

「ミス……えー……」

「メリッサ・ミストウッドです」

「ありがとうセブルス。……ミス・ミストウッド。あまり初対面の人をからかうものではありません。貴女にとつては大したことない冗談でも、言われたその人にとつては非常に恐ろしいことかもしれないでしょう。それに、私もこの店のお世話になってますし、個人的にも気分が良いことはありません」

「確かにミストウッドの悪戯癖は私も手を焼いておりますが」

スネイプは「ああ、”顔から火が出て”焼けてたな」という小声のちやちや入れを無視して言う。

「この事はほぼ真実ですぞ」

「では、貴方もミスター・オリバンダーがミス・ミストウッドを殺そうとした、と？」

「さしたる説明も無しに危険な杖を渡されましたな。後から聞いてみれば死にはしないようですが……今まで試した者は皆、精神疾患で聖マング行きになったと」

マクゴナガルが黙ってしまったので、それっきりでその場は別れる。向こうからしたら非常に感じの悪い相手になったかもしれないが、仕方ないことだ。魔理沙に危機があつたのは純然たる事実。『あの緊張に冷や水をぶっかければどんなに震え上がるだろう？』という悪戯心が有つたのもまた事実だが。

結果。グレンジャー一家は店に入った途端に一本のブドウの杖を差し出されたのだが、そこから店を出るまでに百回近く「これは安全なのですか？」と口にした。魔理沙が見ていたら大いに笑っただろう。

で、その魔理沙たちは同じ頃にはダイアゴン横丁の端っこ近くまで

きていた。「教授方には丁寧な言葉を使うものだ」「相手の實力を見ない限り普段の話し方で行くつてポリシーなんだぜ」「では吾輩はその格が無い、と?」「おま……いや、スネイプ先生が自分でやめろつて言っただらる」なんて言い合いつつ更に歩くと、最後にレンガの壁に突き当たった。

「ここがダイアゴン横丁の玄関口、『漏れ鍋』だ」

「となるとやっぱり普通の壁じゃないわけか」

「左様」

「よく見ておけ」と言い、スネイプが杖でいくつかのレンガを叩く。するとみるみるうちにブロックが組み変わり、大きなアーチになった。その先は小汚いどっかの中庭のようだった。その先の扉に入る。やはり薄汚れたパブだった。不思議な雰囲気を持っている魔法界の“常人”の服装も、この薄暗い店の中では何やら浮浪者めいたものに見える。

バーテンダーの爺さんが、「スネイプ先生がここにいらつしやるとは珍しい」と声をかけてきた。「新入生の案内だ」とだけ応えて通り過ぎる。魔理沙の方は入学を祝福する言葉に元気よく返事した。

そうやって裏口からまっすぐ進むと、今度はパブの玄関に突き当たる。

「ここまでが魔法界。ここから出ればマグルの世界だ」

漏れ鍋の向こうの魔法界とはうって変わって、スマートな服に身を包んだ人々が歩道を行き交い、その向こうの車道を自動車が走っている。『マグル』とは何かと訊こうと思ったが、見たら分かった。つまり魔法を使えない人間のことだ。

「えらい街中だな。大丈夫なのか?」

「漏れ鍋のすぐ前の歩道までは認識障害がかかっている。正確にはそこまでが魔法界だ」

言われてみれば確かに通り過ぎる人たちは(そうだと知っていなければ誰も入りたがらないような安っぽい店構えだがそれでも不自然なほど)漏れ鍋に見向きもしない。魔理沙たちが居ることにすら気付いていないようだ。

「そして、君が気にしていたホグワーツへの行き方だが」とスネイプが言い出して始めてそのことをすっかり忘れていたことに気が付いた。なんだかんだ言って、魔理沙本人も知らぬ間について浮かれていたらしい。

「キングス・クロス駅という”表向きは”マグルの駅が有る。その『9と3／4番線』からホグワーツ……の近くのホグズミード行きの汽車『ホグワーツ特急』が出る。これが切符。乗るべき日にちと時間も書いてあるから見ておきたまえ。そしてこれがキングス・クロスまでのポートキー……つまり瞬間移動装置だ。普通ならこんなものは用意しないのだが、君は海の向こうのアイルランドに一人で住んでいる。普通とは言えぬだろう」

魔理沙は切符など一瞥もくれずポケットに突っ込み、ポートキー（外見上はただの割れた試験管）をしげしげと眺めた。

「9月1日の午前10時になれば跳べる。君はそれに触れているだけで良い。吾輩が短時間で適当に呪文をかけた許可証も無い粗雑品であるから、その一度しか使えないがね。……分解はしないように。一個を調べた程度で再現はできんだろう?」

「なんで分解するつもりって分かった?」

「見れば分かる」

「ならもう一個欲しいって思ってるのも分かるよな」

「……いいや? 全く」

スネイプは眉を上げてとぼけた。魔理沙は「ケチだなー」なんて言っただけながらポートキーを慎重に帽子にしまった。

「それではつかまりたまえ」

「おう」

スネイプの肘の辺りに腕を巻き付けて、再びの姿くらまし。魔理沙の家の森……昼間、案山子ゴーレムが立っていた辺りに着いた。今度はいっけり足の裏だけで着地できたが、やはり術を完璧に見破るまではいかなかった。一回目で思った通り、”外”に対して殆ど魔力による操作が無いことははつきりしたんだが……。

「出発前にも言ったことだが、そう簡単に姿くらましを会得できるな

「ら学校は要らん」

「はあ……まあ、だろいな」

「そうだ。……では、またホグワーツで会おうではないか。その時、君が”利口な”生徒であることを願う」

「任せとけ」

スネイプはフンと鼻を鳴らし、背を向けた。そして次の瞬間には姿が消える。魔理沙も踵を返して森へ消えた。

スネイプの言った通り、向こうの魔法をワザワザ焦って自分で解明する必要は今のところ無い。湯気が立ち肉汁が溢れるステーキのように魅力的に好奇心をそそるが、敢えて我慢しよう。学校が始まってからだと周りの目もあって自分の研究は進められないだろうから、出発まではそつちをやっておいた方が効率的だ。

そうして二人が自室に戻ったのは奇しくもほぼ同じタイミングだった。スネイプは喋り過ぎで喉がカラカラなのに気付き、魔理沙の方は知識欲に負けて魔法論の教科書を開いたのだった。

五話 駅にきた

あれから一ヶ月と少し経った。新しい魔法に触れ、そしてそのおかげで自分の研究になんとなく集中できなかつた時間は、魔理沙にプラスとマイナスが複雑に絡み合った妙な感情をいだかせた。

そして、ホグワーツへの出発当日の午前十時。魔理沙は三度目の瞬間移動と魔法論の教科書のおかげで、魔法界の瞬間移動の肝が『瞬間移動のイメージを』貼り付ける』ことだということまで解明した。これで少し機嫌が良い方に傾いたのだが、その後すぐにまた元に戻ってしまう。いや、急転直下のマイナスだ。ポートキーが連れてきたのは、”マグル側”のキングズ・クロス駅のかげの路地だったからだ。

魔理沙はてつきりそのまま『9と3／4番線』に跳ぶものだと思っていたし、もつと言えば車内に直通も期待していた。それが、路地を出たとたんにスーツとジーンズばかり。ローブやマントなんて全く見ない。魔法界に行くつもりだった魔理沙はいつものフリフリエプロンドレスと三角帽。当然ながらマグルのなかではメチャクチャ浮いてしまい、道行く人々皆が振り返った。幸い、魔理沙が小さく可愛らしかったのが原因で人々の視線は優しいが、本人にはそんなこと関係ない（それに気付くほど余裕も無い）。まさかこの人通りの中で魔法を使うワケにはいかず、できることと言えば心の中で精いっぱいスネイプへの呪詛を唱えながら9と3／4番線を目指すことだけだったわけだ。スネイプは腹を下した。

この場合、魔理沙は適当なトイレの個室にでも入って服を変化させれば良かったのだが、いかんせんこういう近代的に整った町の大きな駅になじみが無い。青と赤の人影のピクトグラムが何を表すのか分からなかった。

一つ救いが有るとすれば、魔理沙が”入り口”に見当をつけるのに殆ど苦労しなかつたこと。まず「ワザワザ『9と』と表すということ」は元々の9番線に近いってことだな」と考えてついでに「そんなもつて10との間だ」とも考えた。その時点では真偽は定かでないが、他

に拠るものも無い。とにかく今は進むしかない。

推理に従い9番プラットホームと10番プラットホームの前まで昨日のスネイプばりの速足で突き進む。誰かとすれ違うたびにひそひそ声が聞こえる気がする。魔理沙は更に速く脚を動かした。そのせいで柔らかい金髪と白いリボンがびよんびよん揺れて余計に目を引いた。

二分後、大急ぎの甲斐あって目的地に着いた。魔理沙はすぐに周囲を探る。やっぱり9と10の間の改札口の柵が怪しい。と言っても柵自体は普通だ。怪しいと思ったのは、寄りかかったりすぐ近くを通ったりする人が 全く 居ないからだ。

向こうに進めば10番線、こちら側は9番線という分かれ道なので、当然ここは最後の確認や待ち合わせをする場所になる。そうやって足を止めたらどこかに寄りかかって休みたくなるのが当たり前だ。でもここ……9番プラットホームと10番プラットホームの間では、皆律儀に直立でメモを広げたり時計をチラチラ見たりしている。まるで「そこには近づくな」と暗示をかけられているようだ。明らかに、認識障害魔法の作用ととれる。

柵が入り口だとして、それを開く方法（例えば漏れ鍋のレンガ壁なら杖で叩くこと）は分からないが、それは他の新入生やその家族が教えてくれるだろう。それこそ、魔理沙はこの壁に寄りかかって待つていれば良い。素早く近寄った勢いのままくるりと背を向け体重を預ける。「あ、これ、柵、無い」と思った瞬間には尻もちをついていた。

しかしそれでミッシュンクリア。なんとも情けない恰好だが、魔理沙は念願の『9と3／4番線』に到着したのだ。魔理沙の頭上に『9／4』と刻まれた鉄のアーチがかかり、振り返れば紅色の蒸気機関車が静かに停車している。多少トラブルが有ったとはいえ、まだまだチケツトに書いてあった発車時間の11時までには余裕が有る（むしろ速足になったおかげで到着が早まった）。プラットホームはマグル側の混雑が嘘のように空いていた。この分なら車両の中も席が選び放題だろう。

魔理沙は何事も無かったかのように立ち上がって、ゆっくりと学生

？ガキ？を詰め込むには過剰に思えるほど高級感が漂う車体を眺めながら、良さそうな席を探した。

結局端から往復して、前から三両目の真ん中辺りのコンパートメントに収まる。入り口から入って来る生徒たちを眺めたかったからだ。それをするには三両目は少し遠かったが、残念ながら一両目は指定席か何かのようで、そこからここまででは誰かしらが座っていた。早いといっても上には上があるものだ。

やがてちらほらとアーチをくぐってやって来る人が増えてきた。魔理沙はその過剰とも言える視力を活用して観察を始める。

如何にも金持ちで気取ってそうな青白い顔の親子。ふてぶてしい印象の蛙を持った、丸顔の鈍くさそうな子供とお婆さん。あ、グレンジャーも来ている。多くはマグルの服装でやって来たが、どうやって表のキングス・クロスを突破したのか、魔法使い（しかも小汚い）の恰好で（魔理沙とは違って）平気が入って来た者もいた。話し声やトランクのガタつく音、鼻や猫の鳴き声が空間を満たしていく。大小様々な動物たちを見て、ペットを持ってこなかったのは失敗だったかなど後悔した。まあ、来年にはポケットに妖精でも入れてくるさ。推奨ペットは鼻と猫とヒキガエルだけど、問題は無いはずだ。さつきチラツと見かけた縮れ三つ編みの男の子の荷物からは巨大な蜘蛛の脚がとび出していたし。

そうやって一年目も始まらないうちから来年のことを考えていると、突然コンパートメントの戸がガツンと音を立てるほど乱暴に開かれた。穏やかな時間を邪魔された魔理沙は少し機嫌を損ね、目を細めて振り返った。

「えらく不作法だな？ そんなに無駄な力を振るって、戸が傷む以外に何か意味があるのか？」

「……………んん……………ああ……………」

視線の先には二人の男の子が居たのだが、両方とも太っていて（精一杯良く言えばがっちりして）子供のくせに人相が悪かった。しかも頭の回転も良くないようで魔理沙の指摘にモゴモゴと聞き取れない声を漏らすばかりだ。何か、「誰か居ると思わなかった」みたいな

ことを言っているようではあるが。

「どうしたんだ二人とも」と、戸の向こうから声がする。もう一人近づいてきたらしい。魔理沙はその高慢そうな口調から、姿を見る前に顔を思い浮かべることができた。きつとあの青白い一家の子供だ。

そして太つちよ二人を退けて本人が魔理沙の前に姿を現す。予想は当たっていた。横の二人と対照的に顎の尖った顔に浮かぶ表情と綺麗に撫で付けられたプラチナブロンドの髪を見れば、相当に甘やかされて育ったのは瞭然だ。

「その二人が騒がしいから文句言ったんだ」

デブが中々問いに答えないので魔理沙が代わりに説明した。お坊ちゃんはやれやれと肩をすぼめた。

「それは迷惑かけたね。席を探すように言ったら張り切り過ぎちゃったみたいだ」

「まあ、次から気をつけたらいいぜ」

こんな歳、しかも入学前から子分を従えているなんて思った以上の金持ちらしい。確かに、線の太い二人が両隣に控えてるとまるで貴族と護衛だ。魔理沙も元々は大店の娘だったが、さすがにこんなにはつきりとした上下関係なんて持ち合わせていなかった。その時はもっと幼かったし、お付きが欲しいとも考えなかったけど。

お坊ちゃんは「ところで君、荷物は？」と、コンパートメントの上の方にある棚を見て訊いた。入学に必要な品はなかなか邪魔っ気に嵩張るはずだが、それが見当たらない。それに魔理沙は「ああ、仕舞ってるんだぜ」と、膝に乗せていた帽子を指さした。原理はアレだが、まさかこつちには容積増加の魔法が無いなんてことはないよな、と心の中で確認しながら。

「へえ、帽子の形の無限小物入れなんて珍しいね。ってことは、君はマグル出身じゃないんだな」

「ああ。一応な」

「じゃあ、ここ、相席いいかい？」

「ここを一人で占拠するほど幅を取る体形じゃないぜ」

何が『じゃあ』なのか分からないが断る理由も無い。お坊ちゃんが

戸をくぐって入って来た後ろで、手下二人が何処かへ行った。魔理沙が視線で追うのに気付いたのか「一旦置いてきた荷物を取りに行つたんだよ」と説明してくれた。

「僕はドラコ・マルフォイ。君は？」

そう言いながら魔理沙の隣に座る。四人掛けコンパートメントで、向かい側の二つの席が空いているのに隣に座ってくるのは、そのキザったらしい態度もあって馴れ馴れしくて少し嫌な感じがした。しかし、よく考えればコイツが座らなければ隣にはあのノロマのどちらかが座ることになる。

魔理沙は何も文句を言わずに名乗り返した。

「メリッサ・ミストウツドだ」

「ミストウツド？ 聞いたことない名前だな……………」

何か引つかかるところがあるのか、もしかして”そういう情報”に強い家の子供なのか、と慌てて説明を付け足す。

「今まではちよつと魔法界とは距離を置いてたからな。聞かない名前なのも仕方ないぜ」

「ふーん」

胡散臭い返答にドラコは少し怪しく思ったが、丁度そこに二人が戻ってきて棚に三人分の荷物を上げ始めたことで思考が逸れた。もう慣れたけど、このもたもたとしているクセに筋力が有り余つてガタついた、知性も品も感じられない所作はなんとかならないものだろうか。

「こつちがクラブで、こつちがゴイルだ」

「へえ。…………私はメリッサ・ミストウツド。二人ともよろしくな。」

二人はちよつと声を出して応えた。失礼極まりないが、二人を見分けるのは至難の業だと思った。もちろん、クローンじゃないのだから差は確かに有る。片方は少し顔がマシで背が低く、代わりに腕が不格好に長い。しかし、だいたいの雰囲気や役割は同じだし無口だから性格の細かい差も分からない。意識していればそのうち分かるようになるだろうけど、まず特別に意識を向けようと思う存在でもない。…………とんでもない話だが、魔理沙は人懐っこい笑顔の裏でそんなこと

を考えていた。

「それにしても、荷物全部を入れられる小物入れなんてすごいな。僕のなんか箒一つ入れるのが精一杯さ。『無限』小物入れなんて名前だけだね」

「無駄に大きくてもそれはそれで不便も有るだろ」

「父もそう言って小さいやつしか買ってくれなかったんだ。大きな小物入れに何でもかんでも入れて、いざ一つ出したいときに『呼び出し機能』の調子が悪かったときの苛立ちは想像を絶する、ってね」

何というか、横丁でも思ったことだがマジックアイテムを売り買いくるというのは魔理沙にとつてなかなか違和感のあることだった。今みたいに、買うのが当たり前のことのように話されると特にだ。

「君の帽子も高かっただろうね」

「私は渡されただけだからな。値段は知らないぜ」

適当にぼやかして応える。自分で作ったなんて言ったら、またちよつとした問答になりかねない。魔理沙は新しい魔法を習うのが目的なのであつて、自分の魔法を説明するために魔法界に来たわけではないのだ。

「じゃあ相当良い家柄なのかな？ その服も上等だし。もしかしてもう魔法を使えたりするのかい？」

「一応な。家の秘伝だから、見せびらかしたりはできないが」

「……そうか」

聞き分けの良いような返事だが、子供らしく露骨に残念そうな顔をする。『良い家柄』と言われてすぐだけれども、魔理沙は少々下衆な損得勘定を始めた。この子供はなかなかの財力持ちの情報通のようだし、ご機嫌を取っておくのも悪くない。あまり重要じゃない部類の子供だまし”なら見せてやって損はしないだろう。

「ま、せつかく初めての汽車で一緒になつた縁だ。ちよつと見てくれ」

と、ポケットからこれまたレース付きの柔らかそうな白いハンカチを取り出した。

仕掛けが無いのを確認させるように裏表を一度ずつ反して見せた

後、親指と人差し指でつまんで上下に軽く五回ほど振る。その動きが止まったとき、魔理沙の指からぶら下がっていたのは真っ赤なベルベットの布きれだった。ドラコたちは完全に意表を突かれたかたちになる。なにせ魔理沙はまだ杖を出していなかったし、呪文も唱えていない。彼らが魔法を知っているだけに、その”予備動作”無しに自在に魔法を操るのを見たときの驚きは大きい。そうして「ん？ どういうことだ？ いつの間に？」と固まっている間に魔理沙は次の動作に移っている。今度はその赤い布を手の平に乗せ、くしゃくしゃと握り込み始めた。魔理沙の子供っぽい小さい手では片方に全てを納めることはできず、両手で抑え込むように隠す。

そのまま一時停止。どうなるのかと期待が高まる。魔理沙は「よく見とけよ？」と言うような表情で三人それぞれに目を合わせた後、ゆっくりと指を開く。手の平の上に、さっきのベルベットと同じ朱色をした美しい薔薇の花が一輪咲いていた。

魔理沙は茎の下の方をつまんでドラコに差し出した。礼の言葉も、手を開いたときには無かった茎がいつの間にも何処からきたのか考えるのも忘れて素直に受け取る――

「痛ッ」

――と同時にチクリと指先が痛んだ。「そうか、棘か」と薔薇の特徴を思い出しつつ、違和感に気付く。棘の無いところで持ち直そうと思ったら指が離れない。よく見ると何本かの細い管のようなものが茎から伸びて自分の皮膚の下を這っている。ギョツとして心臓が跳ね上がったその時、指の上から魔理沙の手が重ねられた。近付いてくる金の瞳に今度はドキリとした。

唇を少しとがらせて、フツと息を吹きかける。花の形がふわりと崩れて宙に溶け、細やかな光の粒と甘い香りがさらさらとドラコの顔を撫でた。

次に魔理沙は、ぼけーっと手を見つめている坊ちゃんを横目に、向かいの席で羨ましそうにしている子分たちに☆を飛ばす。二人とも同じような動きで受け取ったが、片方は何故かそれを顔の前で構えた。ここからどうなるのかと思っていると、「齧ってみな」という魔理

沙のジエスチャー。顔を見合わせ、ゆつくりと口に運ぶ。砂糖とも果物とも違う未知の甘さが口いっぱいにはじける。二人とも甘いものをもりもり食べてデカくなつた甘味通なのだが、それでも驚く味だった。

夢中になつて食べる太つた子供二人と呆けたお坊ちゃんを後目に、魔理沙はいつもの笑顔だ。この程度の手品魔術が魔法界の子供に通用するか内心不安だったが、結果は見事に大成功。もちろん、”魔法で起こされた現象”そのものとしては三人ともこれより凄いものを見たことは有るのだが、そこは表情と間の取り方の勝利。すつかり惹き込まれてしまっていた。

「良いパトロンを捕まえたかもしれないな」とほくそ笑みながら窓の外に目を移したところで、ボウと警笛が鳴り響いて汽車が滑るように走り出す。ホームの上で生徒の家族たちが手を振っている。誰かの妹らしい女の子が横を並んで走っていたが、十分に加速が進んでくると追いつけなくなつて立ち止まり、その後はやっぱり大きく手を振っていた。

やがてカーブにさしかかる。手を振る人々の姿は駅舎ごと見えなくなつて、周りの景色が次々と通り過ぎていく。その滑らかな走りとの自分の重ねて魔理沙はますます気分を良くした。マグルの世界での失敗はもうきれいに頭から抜けていた。

六話 汽車できた

汽車は順調に街を走り抜け、丘陵地帯にさしかかる。爽やかな風が吹いていることが窓を開けずとも感じられた。こんなところを全速ですつ飛んだらどんなに気分が良いだろうか。ここ数年はあの鬱陶しい森の中か、気分転換に外に出ても飛べるのは夜中だけだった。魔理沙は夜空ももちろん好きだったが、たまには空の青と草原の緑の間を縫ってみたいこともある。ホグワーツにも広い校庭があればいいのだが。

そうやって魔理沙が空想の自分を列車に並走させている間に、ドラコの調子も戻ったようだ。丁度考えていたことを訊いてくる。

「えーつと、君は箒で飛ぶのは好きかい？」

「んー、まあな」

単純な問いだが、魔理沙は少し答えを選んで曖昧に返した。またしても『こっちの常識が分からない』だ。何も考えずに返答するなら「箒持ってた方が」それっぽい「からな」と言うのだが、どうも少し教科書から読み取った範囲では「箒で飛ぶ」のが当たり前のよう。下手な答え方だと「じゃあもしかして君は箒無しで飛べるのかい!？」と騒がれそうだと思った。

「そうか。じゃあ一年生の箒持ち込み禁止には君もうんざりしただらうね。僕も飛ぶのは好きでさ。あの規則には納得できないよ」

ドラコは不満半分、嘲笑半分という感じに唇を尖らせて愚痴った。角が立っていて意地悪そうで、それでいて子供っぽい部分もある生っ白い顔にはこの表情がよく似合う。

「学校に来て初めて魔法を使いだすヤツも居るんだろ？ そんなのが好き勝手にビュンビュン飛んではしゃぎまわってたら鬱陶しいからじゃないか？」

「うーん、確かにそうだね。でもそれを言うなら、もともとそういう家の子を入学させるべきじゃないと僕は思うんだけど。ああ、そうそう。さつき言ったちっぽけな無限小物入れも、箒をこつそり持ち込むためなんだ」

と、ドラゴはポケットから筆箱のようなものを取り出した。正確には『箒入れ』だろうか。そこにドラゴが手を入れて魔理沙がよく知る箒のそれとは似つかない尖った柄を引き出す様子を、バレないように配慮しつつ全神経を鋭く向けて観察した。

「またも”無理やり”だなという感じだ。空間に亀裂が入る感じや転送による魔力の揺らぎは無く、単なる”入れ物”から出したのと変わらない。また、『世界を作る』という手法についてスネイプが驚愕していたから、それではないだろう。もしかして、”この世界の空間を引き伸ばして座標を打ち直した”のだろうか……或いは自分の思いつかないような理論か。それとも『そういうものだからそういうもの』なのだろうか。」

ドラゴがなにやら自分の箒について講釈を垂れているが魔理沙にとってそんなことはどうでもいい。できればこの小物入れの仕組みを教えて欲しかった。しかしこの子供が知っているとは思えないし、その親も製品を買っただけ。誰でも作れるものでは商売は成り立たないだろうから、この技術を学校で教えるかというところ、まあ望み薄だろう。詳しいところはこれを作った職人に訊かなければ分からないということ。

「そこまで思い至って、魔理沙の精神は落胆と共に思考の海から帰還した。」

「——それで、僕は本当はニンバス2000が良かったんだけど父が『やめておけ』って譲らなかつたんだ。どうにも来年にはニンバスのもう一つ新型が出て、その他にも続々と高速箒が出る開発期間や人員の様子らしい。2000はニンバスシリーズが単に実験期間や人員をケチるためと、あと他の箒製作会社への牽制のために前倒して売り出した試作型に過ぎないって。本物の”通”にしてみればニンバス2000に乗ってるのはむしろ恥だって言うんだ」

魔理沙はニンク2000がどうかの話はほとんど理解しようとしなかったが、どうやらこっちでは箒の質で速さが決まるらしい……つまり生身では飛ぼうとせず飛行の魔法は箒によってのみ行使されるということを知り取った。

これはちよつと厄介なことだ。魔理沙は箒無しで飛ぶ。いつも飛ぶときは箒をお尻の下に置くが、それは箒に乗って飛んでいるのではなく箒を持って飛んでいるだけに過ぎない（最近は箒が魔力を吸ったのか加速の助けになり始めたが）。言わば、コスプレだ。いつも箒に”ちゃん”と乗っている魔法使いの姿を見ている者にすれば、体重のかかり方や魔力の流れから推し測って、魔理沙が”そう”ではないと気付くのは難しいことではないだろう。ということは、今までの飛行能力とはまた別に箒乗りのセンスが有ることを祈るか、”お披露目”までにどうにかして箒で飛べるように練習するかしなければならぬ。ならばすぐに思い当たる大きな問題は二つ。『どうやって”飛ぶ箒”を手に入れるか』と『学校側から監視は無いのか』だ。前者は真横に座っている坊ちゃんに頼めばどうにかなるかもしれないが後者は全く未知数。諦めて「ちよつと勘が鈍ったかな？」なんて言って誤魔化すイメージトレーニングをする方が利口かもしれない。

「それにしたって、結局のところ今一番速い箒はニンバス2000なんだから欲しくならないワケ無いよ。『一年生はクイディッチの選手になれない』なんて馬鹿げた規則が無ければ絶対に諦めなかったさ」『クイディッチ』……確か、魔法生物の教科書かに名前が有った気がする。球として使うために『スニジェット』とかいう丸っこい鳥が乱獲されたとか何とか。あと魔法史にも同じような話が有ったと記憶している。

「じゃあ二年になったら新型箒でクイディッチするつもりなんだな」
「当たり前じゃないか。『寮の代表選手になれなかったらマルフォイ家として犯罪的だ』って、父と僕との考えは全く同じだよ」
「責任重大だな。私もドラコが選手として活躍するのを期待してるぜ」

魔理沙の言葉に気を良くしたのか少し頬に朱がさす。そして「ふふん。まあ、僕の腕なら二年に上がる前には声くらいかかっているだろうさ」「ほう？ 自身あり気だな。武勇伝でも有るのか？」という具合にドラコの飛行自慢が始まった。

意外かもしれないがドラコの自慢話はなかなか話術的に優れ、且つ

興味を惹くものだった。もつとも、それは意図した方向ではなかったが。魔理沙は（飛行技術の高さを言い表すために引き合いに出されたはずの）魔法界やマグルの道具と出来事の方に想像力を掻き立てて目を輝かせた。本題の方ははつきり言って二の次以下。自らを撃ち墜とさんと四方八方に放たれる魔力と呪いの塊や、直線距離にして5メートルも歩けば元居た場所が見えなくなるような鬱蒼とした森を相手に豪速で飛行していたというのに、今更ちよつとターンが上手く行った程度の飛行に心が動こうはずも無い。

しかし哀れなドラコはそれに気付きようも無く、弾む相槌に合わせでどどん饒舌に自らの経験を吐き出した。それによつて目の前の愛らしい少女の好意と尊敬が得られると信じて。

ちなみにクラップとゴイルは「僕が初めて箒に乗ったのは——」の辺りから揃つて眠りこけていた。彼らにとつてはドラコの飛行自慢など噛み過ぎたガムそのものだ。ベタベタと粘着質なところまでそっくりだと思う。

やがて正午になった頃、魔理沙はお腹が空いてくると同時にドラコの話への興味も失い始めた。エネルギー不足も有るが、なんとなく作り話かなりの割合になってきた気配がするから。どうもそれは凶星だったようで、ヘリコプターにぶつかりかけたという話（これが最後の実話だと踏んでいる）が終わつた辺りでだんだん語り口も淀みがちになっていった。最終的には「車内販売ですよ。何かいかが？」と、ふくよかなおばさんが戸をノックした途端に「ああ、君たちもお菓子食べるだろう？ 何が良い？ 僕がまとめて払うよ」なんて言つてドラコ自ら話を切り変えてしまった。

魔理沙も内心助かつたと思ひながらお菓子が満載された台車へ目を移す。百味（？）ビーンズ、風船ガム、蛙（？）チョコレート……その他いろいろ面白そうな菓子類は豊富に有つたが、丁度昼食の代わりになりそうなのはかぼちゃパイと大鍋ケーキくらいに見える。後者は大鍋の丸っこいミニチュアのようなかわいらしい見た目で、特に気に入った。

そういうわけで魔理沙は「じゃあ私はこの大鍋ケーキで」と言つた

のだが、ドラコの方は「それだけで良いのかい？」と不思議そうな顔をする。ならば、と言葉に甘えてかぼちゃパイも買ってもらった。そうやって魔理沙の分が終わると次は手下二人の番。コイツらときたらお言葉には全力で甘えまくるスタイルらしい。かぼちゃパイと大鍋ケーキは当然の如くそれぞれ三つずつだし、明らかに美味しくなくて持て余しそうな毒々しい色をしたキャンディやガムも次々に注文した。そりゃあ、この強欲とつるんでいたなら『大鍋ケーキ一つ』なんて遠慮も良いところだろう。

ドラコ自身も大食いじみではないが細々としたお菓子を多く買って、最終的にはカートの商品を総なめしておまけにもう一舐めしたような面白い物になる。その気前の良さに感心し、それ以上にバカだなと思った。

魔理沙がかぼちゃパイの包みを開けて一口めを頬張ろうとしたとき、デブたちはパイとケーキを平らげて蛙チョコに手を伸ばしていた。蓋が開けられた瞬間に当然のように中身が飛び出す。「蛙だもの。そりゃ飛びますよ」という具合だ。開け口からまず真正面にはねる。対処しきれなかったノロマの顔に張り付き、そこから逆方向に大きくジャンプした。

その先には二口めを齧ろうとしている魔理沙。はじめは魔法で叩き落そうと思ったが、よく考えればこの蛙はチョコレート製。「こちらに向かってくるのならそのまま食べてしまえば良い」と、さらに大きく口を開ける。蛙は空中で軌道を変えられず、吸い込まれるように魔理沙の舌の上へ……とはならなかった。魔理沙が直前で避けたのだ。つい一瞬前にクラブだかゴイルだかの脂っぽい顔に張り付いていたのを思い出したから。全く、日常には思わぬ罠が潜んでいる。

シートの背もたれに張り付いてゲゴゲゴ鳴いている蛙を摘み、投げ返してやる。ゴイルはそれを握りつぶすような不器用な形ながらしっかりとキャッチして、叩き込むように口に運んだ。代わりにチョコと同封されていたカードが足下に落ちた。ままならないものである。

魔理沙が五角形の紺色のカードに手を伸ばす横で「有名な魔法使い

のカードさ」とドラコの説明が入った。ひっくり返すといかにも幸薄
そうな男の立体映像が映っている。

「君もコレクションするつもりなら、僕も少し集めてるから今度ダ
ブったのをあげるよ」

「それは助かるな」

高名な魔法使いの顔や情報が知れるのはなかなか有益なことだし、
こういうものを集めるのも嫌いではない。くれると言うなら有り難
くいただきます。この一枚も向かいの太っちょが何も言わなければ
貰ってしまおうか。

もう一度表を返し、銀文字で書かれた説明文を読む。

《怖がりのフルバート ― 家から出ることさえ恐れた臆病者とし
て有名。最後は防衛呪文が逆流し崩れてきた屋根の下敷きになって
死亡。》

魔理沙は何も言わずゴイルにカードを返した。

ドラコと一緒に食べた百味ビーンズも魔理沙は気に入らなかった。
全くもって”何でも有り”すぎたのだ。

『味』を10種類思い浮かべてみる。肉、魚、野菜、果物、或いは何
かの薬品や血や砂の味。さて、それらの内、ビーンズで食べて美味し
いと言えるのは果たしていくつだろうか？ 正直言って、果物類くら
いなものだろう。それが全体の何割かと言えば……一割二割有るか
無いかだ。その（甘く見積もって）二割の当たりに、五割の何とも言
い難い味、それに二割のクソ不味い味と残り一割の身体が拒否反応を
起こすような化学兵器がズッシリと箱に詰まっているのが『パー
ティー・ボッツの百味ビーンズ』というお菓子だ。

まあ、単純に食べ物としてはよろしくない。じゃあ玩具としてはど
うか。魔理沙はこっちの利用法でも微妙なものだと思った。こうい
う”ドツキリ系”は普通に美味しい中に少量のハズレを入れておく
ものだろう。「いつ出るかな」なんて笑い合いつつ気分よく食べて、
たまに誰かがギャツと悲鳴を上げるから面白いのだ。コレのように
基本的に顔をしかめながら口に運んで、たまに舌打ちしつつ吐き出す
のは存在自体が罰ゲームだろう。いや、コメントに困る味が半分も占

めている時点で罰ゲームにもならない。

とは言え、百味ビーンズは人気商品である。楽しみ方というものは有るのだ。普通に美味しいと思っている稀有な人は置いておいて、代表的なもので言うと『何味が当てる』というものがある。まあ、魔理沙のように尿味、吐瀉物味、糞味の極悪三連十割コンボを喰らった後で「これが何味か考えよう」なんて思うワケは無いのだけれども。何が悪いって「これはきつと大丈夫だ。レモンと……ライチとチョコだよたぶん」などとほざいて寄越したドラコが悪い。特に上がつてもなかつた好感度が大幅下落した。

窓の外はいつの間にか暗い森になっていた。魔理沙の心情を映す魔法でもかかっているのだろうか。

そこで同じく暗い表情をした男の子がやって来た。この丸顔は、確かホームでヒキガエルを抱いていた子だ。

「あの一、ヒキガエルが逃げちゃったんだけど、見かけてない？」

ドラコは露骨に嫌な顔をした。今は大事な”お嬢様”が不機嫌になつてしまっている。ただでさえお前みたいな冴えないヤツの、しかもヒキガエルなんてブサイクなペットに構う趣味など無いのに、今回は輪をかけてそんなヒマは無いのだ、と。

そんな諸々の思いがこもった悪態が喉元まで出かかったが、それは「うええ？」なんていう間抜けな嘆詞に押し退けられることになる。

「見てないが、私も探してやるよ」

そう言つて魔理沙が帽子を被つて席を立ったのだ。

本人は軽い気分転換のつもりだが、ドラコは肝を冷やした。なにせ、帽子には荷物一式が入っている。何気ない動作だが実は荷物棚からトランクを引き出しているのと同義なのだ。ヒキガエルを探しに出たままどこか別のコンパートメントを気に入つて戻つて来ないということも十分に考えられる。思わず立ち上がった。

「じゃあ僕も行くよ」

「おう、ちやつちやつと見つけてやろうぜ」

付いて来るなど言われるかもしれないと悲観していたが、それは杞憂だったようだ。ひとまず胸をなで下ろした視線の端で、何か小太り

の男の子がもじもじしている。

「あ、あの……ありがとう」

「勘違いするなよ。お前のためにやるんじゃない」

「どういう……？」

「どうも何も、言葉通りの意味であった。」

その後、魔理沙の仕切りで小太りの子（ネビルというらしい）が前半分、魔理沙たちが後ろ半分を探すことになった。本当は三等分で分けようと思っていたのだが、ドラコがまるつきり自分に同伴するつもりのようなので別にいいやと思つて廃案にした。どうせ気分転換で見つかったら儲けものというくらいで、効率どうこうと文句をつける必要も無い。

列車の中を歩いてみると、紳士的な上級生たちも時々居たが多くは子供らしくバカ騒ぎしていた。廊下を走り回っている生徒も少なくない。デブ二人を見て薄々気が付いていたが『最高の魔法学校』であるホグワーツは、どうにも頭の作りではなく魔力で生徒を選んでいるらしい。こりやスネイプの皺も増えるわなと納得した。ある一つのコンパートメント（発車前に見た、蜘蛛を飼っている三つ編みの男の子も居た）では車内だというのに花火を炸裂させる始末だ。これは面白い奴だと思つたが、あの中にはネビルの蛙は居ないだろう。もし居たとしても、きつとそれはただの死体だ。あんな“愉快”な連中が蛙のケツに爆竹を捻じ込まないワケが無い。

一つずつコンパートメントを覗いていき、たまに話が通じそうなグループには話を聞いてみる作業が続く。

その途中で魔理沙にとっては別に嬉しくもない再会も有った。

それは一つだけやたら静かなコンパートメントだった。双子らしきそっくり瓜二つな中東系美少女と、その向かいにローブ姿のもじやもじや髪の女の子が座っている。グレンジャーだ。

コンコンとドアをノックして「よお、無事だったみたいだな」と声をかけた。その瞬間後悔した。

「メリッサ・ミストウッドね！ ええ、もちろん無事だったわ。店に入ったらすぐに杖を渡されたもの。私が持つ前からピカピカ光って

て、オリバンダーさんの話じゃブドウの杖が持ち主を見つけたとき特有の反応なんですって。両親はあなたの言ったことのせいで不安がってたけど、私にはすぐに分かったわ。これ以上ピツタリの杖は無いて。両親にも何度もそう言ったんだけど、洗脳かもしれないって余計に怯えちゃうから困ったものよ。結局、私とマクゴナガル先生とオリバンダーさんの三人で説得してその杖を買ったんだけどね。それに、あとで簡単な呪文を試してみてもちゃんと成功したわ。私の家族には魔法族がだれも居ないから、それでまたちよつとした騒ぎになっちゃったの。でも私、教科書も暗記して危なくないように気を付けていたから事故なんて無かったわ。そもそもオリバンダーさんが危険だって言うのも、あなたに合う杖が全然無かったから変なのを出すしか無かったんじゃないの？ あなたは何か呪文が使えるの？」

なんでここだけお通夜状態なのかもつとよく考えるべきだった。双子は「またか」という顔をしている。なにかする度にこの調子の演説を聞かされたのだろう。横丁で見たあの緊張した様子はどこへ行ってしまったのか。あのままの方が周りの人間もグレンジャー自身も幸せに過ごせただろうに。もしこいつが私の故郷に生まれていたら長生きできなかつただろう。喧嘩腰は結構だが自分語りが過ぎる。

呆れる（シヨックに近いかもしれない）魔理沙の横でドラコはすっかり腹を立てていた。魔法や魔法界のことをつい最近知ったばかりのくせに偉そうだ。特に、あんなに素晴らしい魔法を使うメリツサに向かつて『何か魔法が使えるの？』などと。その喧嘩、代わりに受けてやると前へでようとしたが、他でもない魔理沙が軽く手で遮った。「いや、あれから教科書は放りっぱなしでな。使えるかどうかは知らん」

大嘘を吐きつつ、さっきのグレンジャーの発言から必要なところを抜き取る。

「教科書を暗記したなんて言ってたが、本当か？」

「ええー！ 一言一句間違えないようにね。簡単じゃなかったけど、ホグワーツは最高レベルの学校でしょ？ これでも足りるか不安だわ」

「そうかもな」

グレンジャーはますます胸を張ったが、魔理沙は少し残念に思った。教科書を暗記したというのが本当だと仮定して、その記憶力には驚いたものの『一言一句覚よう』なんていう考えじゃ先は暗い。教科書なんて大概余計に難しく書いているもので、その中から要点を押さえることが大事なのだ。載っている術が使えるようになれば良いのだから、文言を覚えるなんて無駄。どうせ学校で習うという考えは別にして、早めにマスターしておこうと思っていたとしても、それなら練習を増やした方が良かっただろう。

記憶容量や計算速度は改造でなんとでもなるが、優先順位判断なんかの精神の”柔らかい”部分はなかなか変わらない(変えたらそれはもう別人だし)。思わぬ曲者の出現かと思ったが、その実『本棚さん』だったワケだ。

もう少し拗れた人物だということが後々分かるのだが、とにかく今はそういう判断。興味を急激に失い、向かいの席のほうに目を移した。

「で、そっちのお二人さんは？ 私は、もう言われたけどメリツサ・ミストウツド。こっちはドラコ・マルフォイだ」

「パーバティ・パチルとパドマ・パチルよ。私がパーバティで」

「私がパドマ」

二人は揃ってにこりと笑った。顔が整っているせいかな、はたまたグレンジャーとの比較のせいかとでも印象が良い。

「私たちは今ネビルってやつのはキガエルを探してるんだが……一抱えもあるようなデカイやつな。見てないか？」

パーバティが返事をしようと口を開きかけたが、視界の外からグレンジャーが「見てないわ。でもヒキガエルを飼うなんて珍しいわね。触っただけで悪影響が有るような毒を分泌するし、湿ってないといけないし。マクコナガル先生も最近は飼う人が少なくなっただけおっしやってたわ」と長ったらしく上書きした。対してこちらも、ドラコが「君には訊いてないね」と言おうとしたのを魔理沙が先に発言して掻き消す。

「そうか。じゃあ他を当てることにするぜ」

半歩ほどコンパートメントに踏み入れていた足を引っ込める。その途中で一旦停止。魔理沙はパチル姉妹の方だけに視線を向けた。

「よかったら一緒に探してくれるか？」

「うん！」

助かったとばかりに、パーバティはパドマを連れてコンパートメントを出た。居心地が悪そうだったから試しに誘ってみたのだが、こんなに食いつくとは。

「ありがとう。あの子、ずっとあんな調子なの。こっちが1話したら10も12も続けて喋るんだもの」

「話さなくても、身じろぎ一つに8か9は言ってくるし。それに一々『私は』『私は』って、自慢ばっかり」

「それで時々『あなたたちはどうなの？』って訊いてきて。できないとか知らないとか言ったら『それで大丈夫なの？』って嫌味言うのよ」「どうせ本を読み漁ってたんなら、諺辞典も読めば良かったのに。『沈黙は金、雄弁は銀』って言葉は知らないのかしら」

戸を閉めてしばらく歩いた辺りで、堰を切ったように文句が溢れ出した。ドラコも同調して「確かにアレは生意気だよ」とか「そのうち自分の”格”ってものを思い知るさ」なんて、ついさっきの飛行自慢（話が上手いだけ多少マシだが）を棚に上げてこき下ろしている。双方の論点は少々ずれているようだったが、反グレンジャーという点で一致していてそれなりに噛みあっていた。

一方の魔理沙はちよつと失敗したかなと思っっている。自分でこうなるように仕向けておいてなんだが、予想以上のヘイトでこのまま虐めか何かにつながりそうだ。ドンパチ華やかな喧嘩はするのも見るとも嫌いじゃないんだが……。グレンジャーは本棚さんで、それだけに基礎的な魔法は素早く且つ高精度で習得するだろうし、そのことは皆が知る事実になるはずだ。となればアイツに正面から挑もうって気概の有る奴はなかなか出ない。嫌悪の表現は無視か陰口になるだろう。学校が始まってからどうにも孤立しているようなら責任をとって話しかけようか。

そんなことを考えている間にも、新たに美少女二人を仲間に加えて調子付いたドラコ主導でヒキガエル探しは続いていて、そろそろ最後尾近くというところまで来ていた。

「なかなか見つからないわね」

「こつちには来てないとか?」

「そうかもしれないね。蛙の足で、誰にも見つからずに廊下を走り抜けるなんて無理だ」

「居なかつたら居なかつたで良いじゃねえか。学校に入る前からいろんな奴と知り合えるし」

「それもそうね」

「知り合いたくないタイプの子ども居るけどね」

「それって?」

「言わなくても分かるでしょ?」

「当ててみるかい?」

「せーの」

「グレンジャー!」

子供特有の残酷さである。”キャラ立ち”した人に、それに不満を持つ子供、そしてその不満を的確かつユーモラスに表現できる饒舌な子供が交われば”ネタ”が生まれるのは時間の問題にすらならない。魔理沙だつて「やつちやつたなあ」と思いながらも三人の揃い具合にちよつと笑ってしまった。

「さあ、まあ、そうは言っても結構な時間探してるし、次のコンパートメントで終わりにするか」

何度もやった通りにノックし、戸を開ける。

中に居たのは、眼鏡をかけたやせっぽちと、ひよろつとのつぽな赤毛の二人の男の子だった。両方とも、言つちや悪いがみすぼらしい服装だ。しかしその割にドラコが買ったのと同じか、それより多いくらいのお菓子とその包みが散らかされている。コンパートメントの中は貧乏なのか裕福なのか分からない変てこりんな空間になっていた。「デカいヒキガエルを見てないか? ネビルつてやつのが逃げたらしいんだが」

「ううん、見てないよ」

二人は揃って首を横に振った。ドラコはその短い動きの間に、眼鏡の方に目を止めた。

「君、マダム・マルキンの店でも会ったよな。その時は気が付かなかつたけど、その額……」

そう言われて、眼鏡の子はちよつとだけ嫌そう（少なくとも魔理沙にはそう見えた）に前髪を上げた。

稲妻型の傷。パチル姉妹が目を見開き、赤毛の子は得意げな表情。そしてドラコは身を乗り出した。

「君、ハリー・ポッターか！」

「うん。確かに、僕はハリー・ポッターだよ」

パーバティが小さく歓声を上げつつ自己紹介して握手を求め、もう一度傷跡を見せるよう頼んだ。スターに会ったときのお手本のような動きだ。

「すまんドラコ。ハリーポッターってのは何だ？」

有名人なのか、はたまた何かの称号なのか。魔理沙の目には、そのボサつとした黒い髪の毛の地味さも相まってどうもタダの冴えない少年に見えるのだ。それが聞こえていたらしく、赤毛が「君、ハリー・ポッターを知らないの？」と驚きの声を上げた。

「ああ、私の家は長いこと魔法界から離れて研究に没頭しててな」

魔理沙はお決まりのセリフで誤魔化した。その横でパチル姉妹が説明を始める。

「10年前、すつごく怖い魔法使いが暴れてたの。今でもみんな怖がって『名前を言っただけ怖い魔法使いが暴れてたの』って呼んでる……」

「その人に狙われたら最後、有名な魔法使いや魔女も誰も助からなかったんだけど、たった一人生き残って、しかも倒しちゃった男の子がいたらしいの。それがハリー・ポッターなのよ！」

「少なくともヨーロッパの魔法使いなら誰でも知ってると思ってただけど……」

「あいにくな」

流石に不自然かと少し焦りながらも、魔理沙は逆に堂々と言い切っ

た。その反応に、ハリーは親近感と、ある種の安心を感じた。

「でも、僕自身もそのことは全然覚えてないから。覚えてるのは緑の光だけ。だって10年も前だから、そのとき僕はまだほんの赤ん坊だったんだ。何かができるなんてこれっぽっちも思わない。君たちだってそう思うでしょ？ でも、みんな僕のことを知ってるし、僕が確かに『生き残った男の子』だって言うんだ。まだ、何か騙されてるんじゃないかって思うもの」

「ふむ……」

『英雄』も色々大変なんだなあと思いつつ、魔理沙は傷に手を伸ばした。そして、こいつは確かに”本物”だと確信した。感覚と推察が正しいければ、これは単なる”稲妻型”ではなく、荒々しい二つ巴……激しい正と負の魔力の闘ぎ合いがこの男の子の中で起こったことの証だ。

「僕の父は、例のあの人が襲ったのは魔法界にマグルを引き入れようとする連中だけだって言ってた。メリッサの家にとってはそれこそ対岸の火事だったんだろうさ」

「学校に居る間はそうもいかないけどな」

魔理沙は、赤毛の子が少しムツとしたような顔になったのに気が付いた。確かに聞きようによっては、凶悪な殺人犯だったらしい『あの人』を擁護する風な言い方だ。パトロンと英雄の間にいざこざが起こってはつまらない。文句をつけられる前にフレンドリーな態度を示しておこうじゃないか。

「ま、分からない同士仲良くしようじゃないか、ハリー。……で、いいよな」

「うん。いちいちハリー・ポッターって呼ばれちゃ窮屈でしかたないよ」

魔理沙が差し出した手を、ハリーは快く握った。『生き残った男の子 ハリー・ポッター』ではなくただの魔法界新参者のハリーとして握手を求められたのは初めてだと感じた。……もし今のハリーに読心の魔法が使えたら軽く人間不信になっていただろう。

「だろうぜ。私はメリッサ・ミストウツドだ。こっちもメリッサで良

い。特別呼びたければ、メルでもリサでも良いけどな」
「よろしく。えーと、メリッサ」

そこで丁度良く「そろそろ着くらしいぞ」という、上級生のものらしき声が聞こえてきた。それをきっかけに、魔理沙たちは自分のコンパートメントに戻ることにした。

去りがけに赤毛の方の名前を聞いたのだが、どうにもドラコはその名前……ウィーズリーという家名が気に入らないらしい。マグルに擦り寄る魔法族の代表格とかなんとか。他にも、無計画に子供を儲けたせいで本来は名家のはずなのに貧乏暮らしだとも。そういう文句はパチル姉妹と別れたところから始まり、クラブとゴイルが土足でシートに寝っ転がっているのを見つけるまで続いた。

「結局ネビルの蛙は居なかったな」

「ネビル本人も見当たらないしね。僕らの方の結果を聞きに来てな
いってことは、見つかったか諦めたんだろう」

「車両点検かなにかで出てきたらラッキーだな。ところで、なんで座らないんだ？」

魔理沙はコンパートメントの入り口の方に目を向けた。ドラコは戻って来てから、行儀の悪い手下二人に小言を言う間もずっとそこに寄りかかって立っている。

「いや、そろそろ着替えなきゃいけないと思うんだけど」

「ああ、そう言えば」と魔理沙は納得した。確かに戻って来る間に黒ローブ姿の生徒を多く見かけた。学校に着くまでに着替えるなら、確かにタイミングはここしかないだろうな。

「僕ら外に出てるから、先に着替えちゃってくれ」

「覗くなよ?」と、手下を引っ張って出ていく背中に追い打ちした。ドラコは何もないところでちよつと躓いた。

戸にかけられたカーテンがなんとなく透けているような、車輪の音に交じって衣擦れが聞こえてくるような、そんな気がする時間は意外にもそう長くは続かず。中から「もう入っていいぞー」と呼ばれたのは、戸の前でドラコがウロウロし始めて二往復もする前だった。

どんな格好をしているか……黒ローブなのは分かっているが、なん

となく緊張しながら戸を開ける。

結果、予想は大外れ。三人はハッと息を飲んだ。

「どうした？ 似合っていないか？」

似合っているのは分かっている、からかっている。そういう言い方だ。

「似合ってる。似合ってるけど……メリッサ……それは？」

『それは』ってなんだよ。黒ローブだぜ」

「……何色の、何だって？」

「だから、黒色のローブだよ。制服として指定されてるだろ？」

「それ、どう見ても白のドレスだよ」

煌びやかな魅力にノックアウトされかけたドラコだったが、さすがにフリル分八割の羽織りものを黒ローブと言い張ることは許さなかった。

到着まで五分だと告げる車内放送が響く。ホグワーツでの生活が目前に迫っていた。

七話 学校にきた

ホグワーツ特急が停車した。ホグワーツへの最寄り駅、ホグズミード。丁度夕日が沈み切り、辺りは夜の空気に包まれようとしている。その冷たさは、乗務員に急かされて列車から駆け下りたドラコたちにはありがたいものだった。

魔理沙の服装を場違いだと説明し、自分の予備のローブを与え、そしてそれぞれ着替えるのを五分と少しで行うというのはなかなか骨が折れた。おかげで男三人の方はネクタイの締め方や靴紐の様子が少しおかしいし、クラップに至ってはボタンを二つも掛け違っている。魔理沙は魔理沙でドラコに丈を合わせたローブを着ているものだから下に擦りそうなのを手で押さええている始末だ。

「イッチ年生！ イッチ年生はこっち！」

ちよつと襟を整えようとしたドラコだったが、そんな暇はないらしい。他の新入生たちは既に動き出していて、ホームの脇から続く林の小道を地響きのような野太い声に先導されながら進んでいる後姿が見えた。

「急いこう」

言われなくても駆けだしていた魔理沙はともかく、手下二人もドラコに急かされてドタドタと走る。ゴイルはやはり結びが甘かったのか、ホームの端の辺りで靴の紐が解けてすつ転んだ。「頑丈な奴だから心配することは無い」とすら考えずに全く気に留めなかったが、本人は何故かなかなか立ち上がりず蹲ったままだ。ドラコが「何やつてるんだ」と言う横で、元々先頭に居た魔理沙がとんぼ返り。ヒンヒンと似合いもしない涙声で呻いている太つちよに駆け寄った。

「手、見せてみる」

そう言いながら、ゴイルが抱え込んでいた左手を半ば引つ張り出すようにして見る。体を屈めているせいで陰になってよく見えないうが、触った感じ（ゴイルの反応も含めて）からして重度の突き指のようだ。この場合は『指の根元の脱臼』と表現した方がイメージに合うかもしれない。

不幸な左中指くんは、本体の転倒に対する反応の遅れと並外れた体重によって第三関節からボツキリと横に歪んでしまったのだ（ついでに小指と薬指も比較的軽度ながら被害に遭っている）。

「感謝しろよな」

重ね合わされた手が熱を帯び、じわじわと修復されていく。まるで虫が這っているような感覚が走るうちに痛みが引いて、魔理沙が「これでいいだろ」と離れたときにはゴイルの左手は全く元通りになっていた。

相変わらず聞き取りにくい発声で何か礼の言葉を言っているデブだが、魔理沙はあまり聞いていない。小道の方に見えていた他の新入生の後姿が無くなっていったのだ。運が悪い。もたもたされると困るからとゴイルの手当てをしたのに、温存して低級魔法で治療したせいで時間を喰って結局見失ってしまった。これでまた追いつこうと思っただけ暗視や聴覚強化やらの魔法を必要とするだろう。二度手間になってしまったわけだ。まったく、どれもこれもゴイルの手が子供のくせにやたら肉厚で予想外に治療しにくかったのが悪い。

「鬱陶しい通学路だぜ。灯りの一つも有りやしねえ」

「僕が照らそう。このくらいはできる。……ルーモス！」

ドラコが抜いた杖の先が光を放つ。魔理沙はとっさに顔を背けて目を瞑った。ドラコの発光魔法が強力だったからではなく、夜目が効くように感光度を上げたところだったからだ。「どうしたんだ？」と心配な様子のドラコに「なんでもない」と返事しながら魔法を解いて目をもとに戻す。舌打ちでもしたい気分だった。

そして肝心の道の路面も、やはりというべきかマトモに整備されておらず小石や木の根でボコボコしている。さっきまで雨が降っていたのか、水たまりも有った。こっちは森歩きに慣れている魔理沙には問題ではなかったが、ドラコの方に効いた。

「リストの『ローブの替え三着』なんておかしいと思ってたけど、今納得したよ」

「ああ。どうやら私みたいなのに貸し与えるためじゃなかったらしいな」

「この道、やたらに険しいし滑るし……」

出会って半日ですでに馴染みになった不機嫌顔で小言を漏らす。ローブは平らな地面に立って丁度ギリギリ擦らないように詠えられているため、こんなガタガタな道（しかも下り）では汚れるのなんて一瞬だ。

「これがピカピカに磨いた大理石の床だったなら滑っても有難みが有るってもんなんだがな」

「それはよく分からないけど……ほら、もう、せつかくの新しい靴がドロドロだ。マダム・マルキンめ。このことは知ってたろうに、僕にワザワザ新調するのを勧めてたんだ。ああ、ズボンの裾も。メリッサ、君、マルキンの店に行かなくて正解だったよ。『この機会に一式そろえられる方が殆どですよ』なんて言葉に乗せられて買ったセットが学校の門すら見ないうちから半壊するのは気持ちいいことじゃない」

「洗えば落ちるだろうさ。ま、洗わずに済むのが一番だけだな」

「そもそもだけど毎年通る道なんだろうし舗装すればいいのに。先導役も、ちゃんと確認しないで出発するロクデナシだ」

普通の生徒と比べて特別遅れたのは自分たちの方で自業自得とも言えるのだが、魔理沙は特にドラコの愚痴を否定しなかった。敢えて自分の責任にする意味は無いし、向こうの確認も送迎員としては甘かったと思う。（緊張しているはずの新生がそうなるとは想像しづらいが）例えばコンパートメントでうたた寝していて到着に気が付かなかったヤツなんかはもっと降車が遅くなるはずだ。

「リビアスだかルビウスだか……まあ、名前はどうでもいいや。苗字はハグリッドとかいって、野蛮な大男だつて父から聞いてるよ。ホグワーツを途中で退学になって上手く魔法も使えず、学校の森のそばに小屋を建ててそこに住んでるらしい」

魔理沙はまた話の本筋じゃない方に思考を傾けた。「学校には森も有るのか。何か珍しい研究素材は取れるだろうか」と。

「退学になったヤツを、退学にしたその学校が雇うってのはなかなか愉快な話だな」

ついでに返事しつつさらに考える。

……しかし、確かスネイプは家の森の珍種の多さに驚いていた。ということ、学校の森で目新しいものに出会える確率は低いということ。まさかスネイプが自分の職場の森も満足に探索していないなんて思わない。

「父は不愉快な男だつて言つてたけどね」

「私にとってはそうでもないことを祈るぜ。お、やっとこさ追いついたな」

他の生徒たちの後姿が見えた。期待値の小さい森のことはとりあえず置いて、さつさと距離をつめてしまおう。魔理沙たちは少し歩を速めた。今度はクラブが足を滑らせて尻もちをついた。

追いついてみると皆は驚くほど静かだった。緊張のせいか、そうでなければ転ばないようにするのに集中しているらしい。こう見ると（魔法で足下を照らしていたというのも有るが）ベラベラ喋りながら歩いていたらドラコはかなり器用だということだろう。今は光も消して、あと雰囲気にもまれたのか静かにしているが。

「みんな、もうすぐホグワーツの城が見えるぞ。この角を曲がったら、だ！」

最後尾に付いてしばらく、先頭から件の野蛮人……ハグリッドの声が響いてきた。それを聞いた生徒たちは前の方から順にザワめきだし、そしてその声は歓声に変わっていく。後ろの方の生徒も我慢できないとばかりに走って曲がり角を目指した。

狭かった道が急に開ける。散々文句を言っていたドラコも思わず息を飲んだ。魔理沙の方は表情にこそ出なかったものの、さつきまでの不運や失望が帳消しになって余りある程に感動していた。

急角度で聳える山。その上に大小様々な塔や城壁を持つ壮大な城が構え、窓から漏れる光が夜空に映える。そして、山も城も空も……全てを、眼前に広がる大きく静かな湖の水面が逆さに映し出していた。これほどの”単純な美しさ”による感動は、人生長い（そのうち不老を目指すし）と言つてもそう簡単には体験できないだろうと、魔理沙はこの光景を心に刻んだ。

「四人ずつボートに乗れい」

陰になっていたところに多数のボートが繋がれていた。魔理沙は、当たり前だが一緒に居たドラコたちと乗ることになった。デブ二人を片方に寄せると船が傾きそうだったので左右に分かれさせる。

「みんな乗ったか？ よーし、では、進めえー！」

ボートは漕ぎ手も無しに一齐に岸を離れ、星空を反射する湖面を滑り出した。

皆がだんだんと近づく巨大な城に注目している中、向かい合って座っている魔理沙にふと目を移したドラコは「んっ？」と首を傾げた。「もしかしてだけど、服、変えた」かい？」

魔理沙のローブが、なんとなく少し変わっているように思う。丈も丁度良くなっている気がするし、全体のフォルムもシャープになっている感じがする。と言うか、よく見たら袖の内側や首周りなんかから飾りがのぞいているような……。

「なんのことだ？」

”見たら分かる”ことは本人も分かっているだろうに、きれいにすつとぼける。

「……いや、もういいけどさ。そういうのができるなら先に言っといてくれたらよかったのに」

「一も二もなく『これを着ろ』って渡されたからなあ」

「やっぱり」できる”方は否定しないんだ。……まあ、できるだろうね」

そしてそれはドラコの方でも簡単に予想ができたはずのことだ。普通にやればあの複雑怪奇なひらひらドレスをあんな短時間で着られるはずがない。ハンカチを薔薇に変えるのに比べたら、シンプルな服を豪華な服に変えるくらい簡単なものだろう。当然その逆も。

「でもあんまり使いたくなかったんじゃないのかい？」

「ああ、なるだけ自重してるぜ。でもやっぱ習慣になっちゃってて。それに、こればかりは使わないと裾が長すぎて歩けたもんじやなかったしなあ。ドラコにはもう似たような魔法見せちゃってるし」

「まあ、そうだけどさ。……それにしても、フリルは絶対必要なのかい？」

「このくらいなら許容範囲だろ？」

「うん、まあ……そうだね」

微妙に腑に落ちないが、実際、黒ローブと言える範疇に収まった”
センスの良いアレンジだと言える。この飾りが有るローブと元の
ローブのどっちが良いかと訊かれたら間違いなく今の方だった。し
かたない。「メリッサは可愛らしい服が好きなんだな」と流すこと
にした。

そうやって場違いなほどどうでもいい問答をしているうちにも船
は進み対岸が近づく。山の端は崖のようになって湖に迫り、その岩肌
を水面近くまでツタが這っていた。

「頭、下げえー」

その崖下近くまで来たとき、ハグリッドが号令をかけた。魔理沙は
わけも分からずとりあえずお辞儀した後、山の上の城壁を窺った。だ
れか”お偉いさん”でも出迎えにきているのかと思ったが、そんな姿
は見えない。代わりに、ツタの暖簾に隠れるように開いた天井の低い
洞窟に船団が入っていくのが見えた。頭を下げろと言うのは、そのま
ま頭の位置を低くしろという意味だったのだ。『頭を下げる』イコー
ル『お辞儀』というのは、お辞儀文化の中で幼少を過ぎた者特有の
ミスであった。

先の船に続いて魔理沙たちのボートも暗い洞窟を進んで行く。城
の真下（たぶん）を少し通り過ぎた辺りで船着き場に停まり、生徒た
ちは岩と小石の岸に降り立った。その辺りでボートの一隻からゲロ
ゲロと蛙の鳴き声が。ハグリッドがボートを調べに行き、ヒキガエル
を片手に乗つけて戻った。

「どいつかヒキガエルをなくしたー言うちよったのが居ったと思うが
……」

「トレバーー」

「おお、おまえさんだったか。今度はちゃんと持つとれよ」

そのトレバーとかいうらしい不遜なヒキガエルを、ネビルは大喜び
で受け取った。

その後また一旦外……山の反対側に出て、今度は岩がゴロゴロ転

がっている坂道を上った。いい加減、魔理沙も舗装しろよと思っていたところで、ドラコが思い出したように口を開いた。

「あの蛙、今度はちゃんと持つてるとして、いつまでああやって抱えてるつもりなんだろう?」

「さあな。でも、このまま入学式や新入生歓迎会みたいな催しがあったりしないことを祈る」

やっと整備された石段に着いた。その先には巨大な檜の木の扉。

「へえ? 僕は面白いショーだと思っただけ?」

「私は笑いが堪えられるか気が気じゃないぜ」

「なるほどね」

皆が緊張した面持ちで開門を待つ中、二人だけニヤついていた。

「みんな、いるか? おまえさん、ヒキガエルはなくしてないな?」

ハグリットが子供の頭ほどもある握り拳で扉を三回叩く。その重厚な見た目と裏腹なスムーズさで扉が開いて、現れたのは今のドラコたちとは正反対の真面目そうな表情をした魔女……マクゴナガルだ。その雰囲気、場の緊張感が更に高まった。トレバーがゲコツと鳴いた。魔理沙はむせた。

「マクゴナガル教授、イッチ年生の皆さんです」

「ご苦労様、ハグリット。ここからは私が預かりましょう」

マクゴナガルが扉を更に大きく開き、生徒たちを石畳の玄関ホールへと招き入れた。とんでもなく高い位置にある天井に向かって、バカバカしいほど巨大な壁が延びる。正面には階段が続き、右手側からは先に着いていた上級生たちのものらしい騒めきが聞こえる。

「ほらメリッサ、ピカピカの大晶石だよ。有難みがあるねえ?」

半笑いでそう言った瞬間、魔理沙がビターンと派手な音を立てて盛大にこけた。何人かの生徒が驚いて振り返った。が、その時にはもう何事も無かったかのように立ち上がっていて、音の正体は真横に居たドラコにしか分からなかった。手下二人は真後ろにいたにも関わらず何が起こったか理解してなかった。

「……オーケイ。もうからかったりしないよ」

「そうか? せっかくノってやったのに、残念だぜ」

そんな、控えめに言ってアホなことをやっているうちに、ホールの脇にある空き部屋に着いた。その部屋は新一年生たちを全て入れるには窮屈な広さで、生徒たちは自然と寄り添いあうような格好になった。皆の不安げな表情も相まって、魔理沙は昔何かの本で読んだ処刑用のガス室を思い出した。全く失礼な話である。

「皆さん、ホグワーツ入学おめでとうございます」

少し高くなった演壇のようなところに立ち、マクゴナガルが挨拶を始めた。

「新入生の歓迎会がまもなく始まりますが、大広間の席につく前に、皆さんが入る寮を決めなくてはなりません。寮の組分けはとても大事な儀式です。ホグワーツにいる間、寮生が学校での皆さんの家族のようなものです。教室では寮生と一緒に勉強し、寝るのも寮、そして自由時間の多くは寮の談話室で過ごすことになるでしょう」

そうはならないだろうな、と魔理沙は思った。おとなしく寮に収まっただけの自信がある。

「寮は四つあります。グリフィンドル、ハッフルパフ、レイブンクロー、スリザリンです。それぞれ輝かしい歴史があって、偉大な魔法使いを輩出してきました。ホグワーツにいる間、皆さんの良い行いは寮の得点になりますし、反対に規則に違反した時は減点されます。学年末には、最高得点の寮に大変名誉ある寮杯が与えられます。どの寮に入るにしても、皆さん一人一人が寮にとって誇りとなるよう望みます」

寮杯。魔理沙にとっては忌々しいが、規則を守らせるには良い制度だ。規則破りが自分だけの問題ではなくなるし、寮杯が欲しい、或いは他の寮に対抗心を燃やした生徒たちが自発的に悪ガキを矯正しようとする。まずはこの仕組みを突破するのが（魔理沙的に）充実した学校生活のカギになりそうだ。

「まもなく全校列席の前で組分けの儀式が始まります。待っている間、できるだけ身なりを整えておきなさい」

クラブとゴイルは慌ててネクタイを締めなおした。意外なことに、時間さえ十分に有れば正しく結べるらしい。でもクラブのボタ

ンは相変わらずだった。

「学校側の準備が出来たら戻ってきますから、静かに待っていてください」

マクゴナガルは去り際にネビルの蛙と、ついでに服が左によれているのに目をやって、しかし何も言わずに出て行った。魔理沙の服には特にリアクションは無かった。確かに新入生のほとんどがマダム・マルキンの店の入学セットを着て来るが、自前のちよつと違うローブを着て来る者もそれなりに居る。……初めの方のローブ（ドレス）だったら絶対に許さなかつただろうが。

その後少しの間は皆静かにしていたが「いったいどうやって寮を決めるんだろう？」と前の方の誰かが言ったのを発端に、あちこちからひそひそと不安の声が聞こえ始めた。何か呪文を暗唱してるヤツも居るようだ。

『『大事な儀式』って言うからには、適当に人数合わせて放り込むだけじゃないんだろうが……』

「とりあえずマヌケはハツフルパフだろうね」

「知ってるのか？」

「方法は知らないけど、寮の特徴は聞いている。スリザリンは由緒正しい魔法族の子供が多くて寮杯も一番多く取ってるそうだ。僕の父と母もスリザリンだよ。逆にグリフィンボールは迷惑なやからが多くてハツフルパフと最低得点を争うのもしょっちゅうだってね」

「でも、私のお母さんはグリフィンボールは勇敢で、反対にスリザリンは卑怯な手で規則違反を誤魔化してるって言ってたわ」

ドラコお得意の 親の受け売りに真っ向から逆のことを言う声。その方に目をやれば、見知った双子が近づいて来るところだった。

「よう、パーバティにパドマ。暫くぶりだな」

「ハーン、メリッサ。ちなみにそのあとお父さんが『レイブンクロー生にとつちやどつちともバカだね』って言ってちよつとした喧嘩になつてたわ」

『『レイブンクローは根暗なくせに偉そうなこと言うな』ってね』

「馬鹿と間抜けと根暗と卑怯か。ロクなのが無えな！」

「スリザリンは寮杯が多くて絶対優秀って言ってるじゃないか……」

美少女三人が姦しく笑いあう横でお坊ちやまは唇を尖らせた。

突然、その頭上に奇妙なモノが現れた。人の形をしているが、髪も肌も服も全部まとめて荒い石英結晶のような半透明の白色で、しかもふわふわ浮遊しながら壁をすり抜けている。ゴーストというやつだ。それが十何人も現れ、そして反対側の壁に消えて行く。気付いた者から視線が釘づけになる新入生とは反対に、向こうは何か議論している様子でこっちには見向きもしない。話しかけてきたのは最後の二人だけだった。

「——全く、修道士さんはお優しいですなあ。もう私はピーブスには愛想が尽きて尽きて尽き果てましたよ。……おっと、おや、君たち、ここで何してるんだい？ 宴会がある大広間は向こうですよ？」

ひだ襟服にタイト姿のゴーストが部屋の真ん中辺りの生徒たちに向かって問いかけた。驚きと戸惑いのせいでなかなか返事がない。隣の修道士のような服装の太ったゴーストが微笑みかけた。

「新入生じゃな。これから組分けされるところか？」

何人かが黙って頷いた。

「そうかそうか。入学おめでとう。ハツフルパフで会えると良いな。儂はその卒業生じゃからの」

「じゃあ間抜けな死に方したんだろうな」と、魔理沙がパチル姉妹に耳打ちした。

「フフ、でも、これでハツフルパフに組分けされたら相当恥ずかしいわよ？」

「身を以て間抜けの証明をすることになるな」

本気じゃないが、もう魔理沙とパチル姉妹の間では『ハツフルパフは間抜け』ということになっていた。創設者であるヘルガ・ハツフルパフはブチ切れていいと思う。

「さあ、行きますよ」

厳しい声と共にマクゴナガルが戻って来た。扉にもたれかかっていたクラツプは大きくよろけたが、そのことには全くリアクション無しに指示が続く。

「組分け式がまもなく始まります。さあ、一列になって。ついてきてください」

もともと後ろの方だった魔理沙たちは自然と先頭近くになった。振り返るとネビルがポカンとした顔のままヒキガエルを抱えて、しかも列に入るタイミングを逃して最後尾につく様子が見えた。

もしあれと同じ寮になったら卒業するまでに腹筋が六つに割れてそうだ。笑いでヒクつく顔を帽子の鏝で隠しながら、魔理沙はそう思った。

八話 組分け帽子

マクゴナガルに続き、再びホールを横切る。向かう先はあの玄関にも引けをとらない程巨大な、大広間の扉。先頭のマクゴナガルが近付くと、ひとりでに開いて中の賑わいが溢れ出した。

四つの長テーブルが真つすぐに伸び、上級生たちが着席して「今年はどうな子が入って来たんだろう」とこちらを見ている。その顔を見返しながら視線を遠くに移していくと、今度は教師や職員たちの席が目に入る。ニコニコと穏和な笑顔を浮かべる白鬚の老人（こいつが校長、ダンブルドアだろう）を中心に、小人やらゴーストやら大男やら……見た目だけでも個性的な面々が顔を揃えていた。スネイプも向かって左端の方……気弱そうな顔をしたターバン男の横に、いつもよりは多少マシな仏頂面で座っている。

そして頭上には無数の蠟燭とゴーストたちが浮かんで赤と青の光を揺らし、その更に上……普通なら天井が見えるはずの位置では星空が輝いていた。

マクゴナガルはその真ん中を通って上座まで新入生を連れて歩く。上級生もゴーストもみんな通り過ぎたところから振り返ったので、その視線が外れることはなかった。教師席がある壇の前で横一列に並び直したとき、魔理沙は誰とも目が合わない方向を探すのに苦労した。

「本当の星に見えるように魔法がかけられているのよ。『ホグワーツの歴史』に書いてあったわ」

列の、魔理沙が居る所とは逆の端の方からハイマイオニーの蘊蓄が聞こえてきた。どうにも興奮で声の音量調節を間違えているらしい。ドラコが「そんなことくらい僕も知ってたけどね」と呟く横で、魔理沙は「天井に星空を映すのと天井をぶち抜いて防風雨の魔法をかけるのとどっちが効率的だろうか」と算用をはじめた。

その目の前を何か汚い物が通り過ぎる。とんがり帽子だ。つぎはぎだらけ皺だらけのそれを、マクゴナガルはあろうことか一年生の目の前に用意したスツールに置いた。つまり、大広間に居る全員の眼

前、この場の”中心”だ。自分があの帽子だったらあまりのみすぼらしさと恥ずかしさに舌を嚙んで自害するだろうと考える魔理沙をよそに、当の帽子は堂々と（胸なんて無いが）胸を張っている感じがする。それどころか、破れ目の一つを口のように動かし、皸枯れているようにも張りがあるようにもとれる声で高らかに歌い始めた。

曰く、「私は頭脳を持つ帽子」

曰く、「グリフィンドールには騎士道を尊び勇氣ある者が集う」

曰く、「ハッフルパフは優しく誠実」

曰く、「レイブンクローは知性に優れる」

曰く、「スリザリンは狡猾で手段を選ばない」

そして、「君の頭に隠れたものを 組分け帽子はお見通し」

上級生たちが帽子の歌に拍手を送り、新入生たちは難しいテストが無いらしいことを喜んだ。この場で暗い顔をしているのは二人、ハリーと魔理沙だけだ。

ハリーは今まで（かなり極端な）マグルの伯母一家の下でゴミクズのような扱いを受けて育ってきたためにかなりマイナス思考だ。テストが無ければその分「入学案内は間違いでした」と言われるのが早まる（テストに受かるといふ考えはほぼ無い）ような気がしたし、頭を覗く帽子なんて被ったらそれこそ「記憶を辿ってみるとあなたはただ同姓同名だけで、英雄『ハリー・ポッター』とは人違いです」と、ここ最近の不思議な出来事の”タネあかし”をされそうだ。そうではなくても、自分が勇敢だったり狡猾だったりするとは思えないし、特別優しい感じもしない上にここまで無知を晒しまくっている。もし自分が本物の『ハリー・ポッター』だとしても、その経歴が『生き残ったけどホグワーツには一日も残れなかった男の子』に変わるだけかもしれない……頭の中は悲観でいっぱいだった。

魔理沙の方は寮に入れるか否かの心配は微塵もしていないが、頭を覗かれるのはマズいと焦っていた。魔法の隠蔽もなにも、精神を読まれてしまえば全部オジャンだ。帽子が登場したときの上級生たちの反応を見る限り、これは恒例行事のようだが……魅魔はこのことを知っていたのだろうか？ 魔法の認識の違いを指摘し、伏せた方が良

いと提案した張本人であるスネイプは？ 今までの入学生で、知られたくない秘密を持つ者は居なかったのか？ この帽子が秘密をばらしたり、第三者によつて情報が抜き出されたりしなければ問題は無いのだが……。後ろを振り返りスネイプの表情をうかがうも、こちらを見さえしていなかった。

「アボット・ハンナ！」

そう考えているうちに儀式は始まる。ABC順の先頭であるおさげ髪の少女が名前を呼ばれ、もつれ気味な速足で前へ出た。緊張からか、はたまた元からののか、ピンク色に染まった頬がなんとなく印象に残る顔だ。そしてこれまた緊張からか、椅子に座る前に帽子を被った。その後思い出したように腰かける。尻が座面に触れるか触れないかのタイミングで帽子が叫んだ。

「ハッフルパフ!!」

マクゴナガルに促され、ハンナは右（新入生目線では左）から二つ目の机へ向かった。生徒たちと太った修道士のゴーストが拍手で迎える。帽子の歌の通り、ハッフルパフのテーブルには純朴そうな雰囲気気の生徒が多かった。続く「ボーンズ・スーザン」もハッフルパフ、「ブート・テリー」はレイブンクロー。組分け帽子は（かかる時間に多少の幅はあるものの）テキパキと新入生を振り分けていく。

その様子を見て、Bの段が終わるころには魔理沙の気分も幾分かマシになっていた。オリバンダーの老人のように職人氣質みたいなものを感じるのだ。それに自分の魔法はまだ未熟だし、盗まれたところでさして損でもないかもしれないという開き直りもある。あえて危機感を持つとすれば、こつちでの読心術という技の位置付けだろうか。”こういう”アイテムを使うなどの準備や高度な技術が必要なものなのか、瞬間移動のように”割とよくある”ことなのか。魔理沙のよく知る魔法では、相手を操って記憶や思考を暴露させる方法はメジャー（？）だったが、ダイレクトに精神を覗くという話は耳に入っ
てこなかった。そういう意味では空間系魔法と同様に興味深くもある。読心術を学んで、ここで読まれた分を読み返してやろうという悪戯心というか反骨心のようなもの湧き始め、「そう言えばネビルは

どうなったか」と蛙を抱く丸顔の少年の姿を横目に見てニタつく余裕も戻った。

一方、ハリーの表情は曇りっぱなしだ。むしろ酷くなっているかもしれない。というのも、自分が突っ立っている前で他の子がどんどん組を決定させていくのを見ると、マグルの学校でグループ決めのときにことごとくハブられていたのを思い出すのだ。ただのABC順だと分かっているものの、染みついたイメージというのはなかなか頑固なもの。”あの”一家から離れる喜びで忘れていたが、そもそも『学校』自体が苦手だった（むしろ得意なものなんて無いかもしれない）。

それはさておき、いつの間にかドラコの手下二人がスリザリンに放り込まれ、「フィネガン・シエーマス」が長考の末グリフィンドールに入れられたその次。「グレンジジャー・ハーマイオニー」と魔理沙の知る名が呼ばれた。今までの生徒とは違う様子で、サツと出て来てグイッと被る。いかにも待ちきれないというふうだ。そして「アイツはどの寮だろう?」と思う間もなくグリフィンドール宣言。ガリ勉だからレイブンクローだろうと思っただが、グリフィンドールと言われてみれば、確かにそれっぽいとも思える。パチル家の母親の言葉を真に受けるワケではないが、ぎつとテーブルを見た感じレイブンクロー生は根暗（寡黙）な印象で、列車で体験したグレンジジャーの強烈な自己主張とは相反する。逆説的に考えれば、グレンジジャーのガリ勉と熱弁は承認欲求によるものでは? ……これは”使える”かもしれない。

どっかから受信した濃いスリザリン思考に、組分け帽子は「スリフルパフ!」と、ありえない言い間違いをした。

そしていよいよ順番は「ロングボトム・ネビル」へと廻る。案の定、胸にヒキガエルを抱えて……いや、たった今それを失った。列から椅子までの短い間に転んでしまい、トレバーはここぞとばかりに跳ね逃げる。クスクスと笑いが起きる中、一瞬は蛙を追おうとするも今は組分けが先と思いい直した様子で帽子を手に取った。本日二人目の立ち組分けである。魔理沙もドラコもハリーさえも……見ていた皆（ハツフルパフ生も）がああ鈍くさはハツフルパフだろうと思っただが、何

故かしーんとしたまま宣言が上がらない。もしかしてどの寮にも入れずにお引き取り願われる実例（自分の未来の姿）を見せられることになるのかとハリーが気を揉みはじめたころになって、ようやく帽子が「グリフィンドール！」と叫んだ。意外な判定へのざわつきはすぐに爆笑に変わる。ネビルは帽子を脱がないままテーブルへ向かったのだ。なんとか途中で思い出したらしく次の一人であるマクドウガル・モラグに渡したものの、その顔が赤く照り上がるのを防ぐことは不可能だった。グリフィンドールの寮旗の色にそっくりだ。

「ああ、アレは確かにグリフィンドール生だよ」

そう耳打ちしたときにはもうドラコの番。余裕綽々といった態度で椅子へと向かう。魔理沙との雑談で緊張は解れきっていたし、自信も有る。我ながら頭もなかなか良いし、魔法も使える方だし箒も上手い。何より聖28族と呼ばれる真正銘の純血魔族であり、しかも特に栄えているマルフォイ家の人間だ。自分はスリザリンに違いない。「スリザリンー」

そう。このように頭に触れるか触れないかという最速のタイミングで組分けされるのも当然ということだ。手に取った瞬間にはスリザリンの『s』まで出ていた。

望む結果を手に入れたマルフォイはすまし顔で手下たちの待つテーブルについた。さて、次は……

「ミストウツド・メリッサー！」

さっきのマルフォイほどではないが落ち着いた足取りで組分け帽子のもとへ向かう。どの寮になるだろうか。

マクゴナガルは名前を読み上げながら、「あの意地悪さはスリザリンに違いない」と思っていた。同じ理由でハーマイオニーも。マルフォイも理由は真逆だがスリザリンだと予想した。しかしそのスリザリンの寮監（担任のようなもの）であるスネイプはグリフィンドールと予想。パチル姉妹もグリフィンドール。ハリーは具体的にどことは思わなかったが、何となく同じ寮になれたら良いと思った。

さあ、では、帽子の判断やいかに。

そんな一部の注目をよそに、魔理沙はゆっくりとした動作で自前の

可愛らしい帽子を脱いで、代わりに臭そうな組分け帽子を頭に寄せた。

「読心の魔法をかけるくらいなら、ついでに劣化防止の魔法もかけたらよかったのにな」という心の声に、地下から湧き出るような低い声が反響した。

「劣化防止ではなく修復が必要だったろう。私はあの時代からこの姿だったからね」

「おう、もう読まれてるのか。プライバシーも何も有ったもんじゃないな」

「そちらから語り掛けてきたように感じたが」

「試しに思ってみただけだぜ。試す必要もなかったらしいが、な」

「……そうかね。しかし、そんなに警戒せずとも良い。私の本懐は考えを読むことではなく、考え方を読むことなのだ。つまり、未来を向いて行くべき寮を決める」

「本懐、ねえ……結局、過去やらも読めることは読めるんだな」

「参考にする」

「それに、本懐の方もそつちはそつちで厄介な能力だが……まあ、いい。それで、私の未来は？」

「今から見るところだ。フォーム、さつきと打って変わって難しい……」

機転は効く。魔法の才能も申し分無い。筋力は女の子らしくひ弱だが知覚とバランス感覚で群を抜きに抜いているし、自分の身体に手を加えるのも厭わない。そして知能は高く、立ち回りは上手く、一方で思い切りも良い。……或いはかなり気まぐれとも言えるが。能力の面で言えば、優秀なグリフィンドール生であり、また、レイブンクロー生でスリザリン生だ。

ならばその信念はどうか。となると、今度は三つのうちどこにも該当しない。ある一つの価値観に没頭することは無く、知識を求めるが知識そのものに喜びを感じはせず、同じく力を欲してはいるが……「なにがなんでも」というほど切迫していない。快活だが正義を軽んじ、勤勉だが不真面目で、悪戯だが親切だ。善悪や効率の判断基準が

独特……いや、正確には根底的に善と悪というものの存在を”信じて”いない節があるからして、既存の枠組みに納めにくいという問題も見えてくる。無意識の善意（それと悪意）というものは一応備えているが、ふと思案が入ればそれが簡単に覆ってしまう。深層意識は複雑怪奇（もしくは極端に薄弱）すぎて既存四寮に収める指標にはならない。

表面的な性格を考えても……勇氣も知識も狡猾さもどれもこれも非凡だが、一つだけ突出しているというものが無い。というより、やはりグリフィンドールの要素とレイブンクローの要素、そしてスリザリンの要素が繋がって絡み合っている。狡猾さが勇氣を助け、知識を得るために勇敢であり、その優れた知性が狡猾さを産み出す。逆回りも然り。この回廊を以て自身を高め何を為そうというのか？

そうして探っていくと、しかし、やはり先には何も見えない。或いは、今どの寮に入るかで決まるとも言える。なればこそ、この組分けという仕事にやりがいを感じつつも、一方で、どこかの寮に決めるのが惜しい気もする。『組分け帽子』の名に反するが。

様々な可能性が浮かんでは他の可能性に掻き消される。創設者四人の知恵を与えられて生まれた組分け帽子だが、それ故に複数人で取り合いをしている気分になってきた。

「なー、まだかよ？」

そんな苦悩もつゆ知らず、当の魔理沙は不満の声を上げた。あまりに長すぎる。観衆もいよいよ訝し気にコソコソ話を始めた。この帽子、まさか丁度私の番でぶっ壊れたんじゃないだろうな。

「君はどこに行きたいかね？」

「私が決めていいのか」

「（いいや。答えを聞いて、私が判断する）」

「（なんだそれ。……でも、まあ、そうだなあ、まずスリザリンは無しかな）」

「（ほう……？ 君は手段を選ばず狡猾であることに抵抗が無い方のはずだが。それに、”おともだち”もスリザリンだ）」

「（単純にあのテーブルには人相が悪い奴が多すぎる。それに、だ。）」

歌い”文句も毛色が違つたし、見た感じも……スリザリンって他の三つから嫌われてるだろ。も一つおまけに”手段を選ばない”そいつは得するが、周りは色々と迷惑らしいぜ)」

「(そうかね？ スリザリンは強大な魔法使いを多く輩出してきたのだが。『例のあの人』も能力で言えば間違いなく史上でも屈指であった。……若いうちに”そういう”手合いを色々と見ておくのも勉強ではないかね?)」

「(知ってるぜ、それ。百虫蠱毒だろ？ 共喰いし合つて生き残つたのが最強つてな)」

「(むしろ寮内での腹の探り合いならレイブンクローの方が熾烈だろう。スリザリンは外に敵が多いからか、或いは血縁者が多いからか、内の結束は固い。対してレイブンクローは勉学への執着が強いからな)」

「(じゃあレイブンクローも無しだな。……それとスリザリンの孤立は割とサラツと認めるんだな)」

「(認めるところは認めよう。そして、学内で敵ができたとしてもそれをものともせずのし上がるのがスリザリン生の強みだ。しかし、ふーむ、レイブンクローも無しかね。『確かに偏屈そうな顔が並んでるぜ』か。研究者気質の愉快的な生徒も居るのだがなあ……)」

魔理沙は「そういうのもういいからさっさと決めてくれ」と思った。それが出来たらとつくにやっているのだ。帽子はまたも「フーム」と唸った。

「(正直さ、面白そうな奴らにはこつちから出向いていくつもりだからこの際”寝心地”が良さそうなハツフルパフでも良いんだが)」

「(フーム……)」

ハツフルパフに入ったメリツサをシミュレートしてみる。……ああ、ダメだ。メリツサの甘え上手乗せ上手とハツフルパフの優しさ従順さがガツチリ噛み合つてミストウッド王国が出来あがる様がありありと見える。これはイカン。

「(……グリフィンドールはどうだね?)」

「(正義と騎士道だろ？ 私もそれ自体は別に構わないんだが、それを

特に”売り”にして『他とは違う』なんて言ってるようじゃ健全な状態にはないと思うぜ。この予想と私が聞いた前評判を合わせれば……たぶん、正義感の押しつけが酷いんだろう。主義に合わないことに一々喰ってかかって、それで自分を曲げないから騒ぎが多いし、正しいことをしていると信じているから反省も無い。……なるほど、グレンジャーは承認欲求よりこっちかもしれんな……」

「ふむ。自分のやることにいちいち文句を付けられてはたまったものじゃない、と。フォーム……」

「そのフンフン言うのやめてくれ。いい加減夢にでも出そうだ」

魔理沙はもう相当にうんざりしていた。長いのもそうだが、頭に響く法螺貝のような唸り声で脳が沸騰しそうだ。実際には念話で、音(波)は出ていないのだからそんなことは無からうが。それでも精神的にくるものは有る。

そもそも察を性格で分けるなよ。同じようなのを纏めちゃったら煮詰まって極端なヤツになっちゃうだろ。

とうるか散々歴史ある儀式だのなんだの言ってた組分けがこのグダリようだ。いや、単純に私に合わないだけかもしれないが、でも、まあ、つまり、こっちの世界に私は合わないということだ。

「なー、もうサイコロでいいだろ」

「いや、少し待っておくれ。ウーム……」

「だからそのフンフン言うのやめろ！」

「(今のは『ウーム』だ)」

「(朽ち果てるオンボロ糞帽子)」

ここで帽子を地面に叩き捨てなかつた魔理沙はえらい。

「分かった。そうだ。もう既に形骸化したものだが……」

組分け帽子は魔力の強弱ではなく系統を見始めた。杖と呪文が普及して魔力の調整が半自動化されているために、魔術師それぞれが持って生まれた系統……四大元素は錬金術師や一部の強力で研究熱心な魔法使いにしか縁の無いものとなっている。しかし(若しくは「つまり」、ホグワーツの四人の創始者たちもそれぞれ得意な系統を持っていたし、それはそのまま四寮にも当てはまる。グリフィンドー

ルは炎のライオン。ハツフルパフは土の穴熊。レイブンクローは風の鷲。スリザリンは水の蛇。

さて、この娘は。……少しの土と……水！ 組分け帽子の中のスリザリンな部分がガッツポーズ。そして蛇語は持ち合わせていないが蛇に縁も有る。

ともかく、拮抗が崩れた。

「スリザリン!!」

今度は念話と実音のダブルで魔理沙の脳が強烈に揺さぶられた。左耳でシンバル、右耳でトランペット、真後ろでティンパニを同時に全力で鳴らされたような衝撃と言えば分かりやすいか。もはや打撃だ。

「だからうるせえんだよこのファツキン痴呆帽子がッ」

そういうわけでこんどこそ組分け帽子を脱ぎ棄てた。なにが「スリザリン!!」だ。散々もたもたフンフンしやがって。

魔理沙はその可憐な容姿に似つかわしくない荒々しい足取りでスリザリンのテーブルについた。憤怒と疲労と呪詛が溶け出したようなため息に、誰も（スリザリンに決まったら真っ先に祝福してやろうと決めていたドラコさえも）話しかけなかった。流星は空気の読めるスリザリンである。

一方の帽子は叩きつけられたからと言って特に気分を害したりしてはいない。この長い Hogwatts の歴史の中で、例えば本人の気に食わない寮に入れたりすれば、その怒りをぶつけられたことはそれなりに有った。いや、それにしてもメリッサの捨てっぷりは見事だった。そう、自分が普通の三角帽子だった頃の持ち主であるゴドリック・グリフィンドールを思い出す。彼は頭に血が上ると（熱を逃がすためなのか）よく帽子を脱ぎ捨てた。丁度いまの投擲のように強烈なスナツプを効かせて。

それに、確かに信じ難いほどの長丁場だった。複数の寮で迷うこと……特に、優れたグリフィンドール生は優れたスリザリン生の資質を持ち合わせることが多い（「一本道を突き通すか横道も厭わないか」以外はほぼ同じ）ため、その二つで迷うのは良くあることなのだ。

……それでもここまで迷った例を探そうと思えば700年は記憶を遡ることになるだろう。頭も汗腺も無いが額の汗を拭きたい気分だ。普通、迷ったときはだいたい血統でさっさとケリがつくのだ。スリザリンは純血魔族を保存する意図で血の濃い魔族を優先して入れるし、逆に純血主義に極めて批判的な家の生まれならスリザリンには入れない。

……はて、そう言えばミストウッド家とはどんな家だろうか？ 或いは彼女はどんな環境で育ったのか？ 先ほどの組分けは”参考に”材料を殆ど探っていない。そのことを嫌がっている様子だったから、そりゃあ避けるべきだが、しかしあそこまで煮詰めればやむなし……そちらにも手（手なんてry）を出すのが正常な手順だ。それが思いつかないほど混乱していた……？ フーム、これは、私もまだまだということだろうか。1000年もこの仕事をこなしてきて、それでも反省の機会はこうして現れるのだからホグワーツは素晴らしい。

まるでナメクジが這うような動きで椅子の上の定位置に戻りながら、組分け帽子は決意を新たにした。魔理沙は「あんな気持ち悪いものを頭に乗せていたのか」と余計に機嫌を損ねた（向かいに座っている人相極悪な男爵のゴーストには特に何も思わなかった）。

多少のアクシデントはあったものの、その後は帽子も調子を取り戻して組分けを進めている。「ミストウッド」の次の「ムーン」がハッフルパフ、その次、Nの段に入って「ノット」がスリザリン。Oが飛んでPの「パーキンソン」もスリザリンと進んで次にパチル姉妹。パドマはレイブンクロー、パーバティはグリフィンドールへと分けられた。続く「パークス」が済めばいよいよ本日のメイン。

「ポッター・ハリー！」

名前が呼ばれた瞬間、英雄が現れたことへの感嘆や本物かどうか訝しむ声なんかで相当の騒ぎになった。みんなハリーの顔をよく見ようと首を伸ばしている。上座から遠い席の生徒の中には立ち上がる者も居たほどだ。しかし、いざ帽子を被ると今度は逆にシンと静まり返る。帽子の宣言を聞き漏らすまいと固唾を飲んだ。『ハリー・ポッ

ター』への注目度はこんなにも高いのかと魔理沙は目を丸くした。

当の本人はそんなもの気にもならない。口から心臓が飛び出てるままバウンドで逃走しそうだ。もしメリツサ並みの時間がかかるようなら途中で吐くかもしれない。そしてそういうマイナス思考が更にお腹を痛くした。

「ブーム……」と、鼓膜が揺れないのに声がする。慣れない感覚はハリーを余計に委縮させた。

「(難しい。これまた難しい。一年にこう何度も悩むことになるうとは。はてさて、どうしたものか……勇氣に満ちている——)」

「勇氣に満ちてる？ 僕が？」

組分け帽子の言うことは嬉しいが、それが正しいとは思えない。そんなこと今まで言われたことが無いし、現にこうして縮み上がっているのだ。それでも、組分け帽子は自信満々という様子だ。

「(そうだとも。勇氣に満ちている。君の心の奥底ではね。そして、頭も悪くない。『いい成績だったことは無い』だって？ いやいや、どうやら君はこれまでは学べる環境に無かったようだし、学ぶ意欲も無かったじゃないか。もとの生活では『数遊びなんかよりベーコンエッグの上手な焼き方の方が10倍は役に立つ』からね。しかしこれから君は学ぶに十分な時間と環境を与えられる。自分の脳みそがそう捨てたものじゃないことに気が付くのに10日もかからんだろう。……多少めんどくさがるの気があるようだから、目の覚めるような点数が答案に記されることはないかもしれないけれど。いいかね？ ……ふむ、そして臨機の才も申し分ない。必要とあらば多少のルールも破る。そして『自分の力を知りたい、試したい』という欲求もムクムクと高まっている)」

そして蛇語と(一部マグル出身者が含まれるもの) 由緒あるポッター家という家系。そう見ればスリザリンだが……両親ともグリフィンドールの反純血主義で、その他の縁もグリフィンドール寄り。そして本人もかなりの一本気だ。今の悲観癖だって「こう思ったらこうだ！」という気質が裏目に働いているからだろう。典型的『スリフィンドール生』だ。

「グリフィンドールとスリザリン、君はどっちが良いかね？」

ハリーは広間の寮端の机を交互に見た。やっぱり、どうにもグリフィンドールの方が感じが良さそうだ。

「それはスリザリン生が歳の割に落ち着いた表情をしているからではないかね？ 利口で狡猾だからといって、その矛先が君に向きさえしなれば彼らは理想的な味方になるとは思えんか？」

確かに、言われてみればそうである。ドラコ・マルフォイも気取って嫌な感じだったけど、気取る分だけお金持ちで物知りなようだった。それに、フレンドリーでもあのメリツサつて子のようにスリザリンに行くことだってあるらしい。組分け帽子が歌った『真の友』とはそういうことなんだろうか。見た目に騙されず付き合ってみてから判断するという……でも、付き合ってみてやっぱりダメだったとしたら取返しがつかないし。

それに、そうだ。

「やっぱりスリザリンはダメだ。ヴォルデモートとその仲間の出身寮だって聞いた」

「ほう？ 皆そう言うが、さらに私はいつも言うが、彼は確かに強大であった。君も恐らく強大になれる。問題は君自身がその力をどう使うかではないかね？ それに出身者で言うならば、スリザリンはマーリンの寮でもある。『どこかで見たことがある』と？ そうとも。入学案内の差出人、 Hogwーツ校長アルバス・ダンブルドアの経歴である『マーリン勲章』のマーリンだ。ピンと来ないかね。そうさな……ダンブルドアを近代で最高の魔法使いと呼ぶ者が多いが、マーリンを史上最高の魔法使いと呼ぶ声の方が多いと言えばそれが分かるかね？ そもそも、君は、彼と同じ” Hogwーツ生になろうとしているのだよ？”

「（僕をスリザリンに入れたいの？）」

「君の内に秘める素質はスリザリンのものと言える。そして、その心の在り方やここまで築いた人間関係を重視するならばグリフィンドールへの道も広い。しかし……そうかね。スリザリンは嫌か。いや、申し訳なく思う必要は無い。確かにスリザリンは悪名高い。君が

『狡猾』という言葉嫌い、『正義』という言葉に惹かれたならば、確かに君はグリフィンドールの誇りを以て正義を為すだろう」

組分け帽子は確認するように一拍おいた。ハリーは心の中でそれに頷いて答えた。

「グリフィンドール!!」

帽子を脱ぎ、ハリーは重い足取りでグリフィンドールの席に向かった。これまで命令ばかり受けて、魔法界にだって「それまでのどんな生活よりマシだろうから」という理由で飛びついた少年が、人生において初めて何かを選択した（しかもこの先7年とそれ以上を大きく左右する）という責任感とか重圧というものが一步一步を重く感じさせたのだ。しかし、この重さは心地良いものだった。もしかすると、本来『歩く』という行為はこういう感覚を伴うものなのかもしれない。

グリフィンドールから上がる歓声の中、ハリーは監督生（寮生の幹部のような存在）のパーシー・ウィーズリーと固く握手を交わした。

反対にスリザリンのテーブルのムードは一気に落ちることになる。ハリー・ポッターが来なかつたのもそうだが、グリフィンドールがそれを自慢するのが分かりきっているからだ。と言うか、もう既に「見たかスリザリン！ポッターはグリフィンドールだ！」なんて下品な煽り文句が聞こえてきている。

「あーあ、こりゃ特大の火種だな」

魔理沙はやっぱりハツフルパフが良かったと思った。グリフィンドールが調子乗りなのもスリザリンが目の敵にされているのも予想通り過ぎる。さつきとはまた別のため息に「ほんとよね。トロールに棍棒よ。ことある毎にポッターとあの人のことだからかかってくるに違いないわ」と、上級生の魔女が応えた。

「私、ジエマ・ファレーイ。スリザリンの監督生よ。よろしくね。ホントはもう少し早めに自己紹介したかったんだけど、その……間が悪かったみたいだったから」

「いや、気を使わせて悪かったな。よろしく。えーと、ジエマ先輩」

「あー、えっと、僕からも、おめでとう。スリザリンに選ばれて良かったよメリッサ」

ドラコも先を越されたと思つて口を挟んだ。しかし――

「吾輩からも祝福の言葉を送つておくとしよう」

ゴースト男爵の祝福とは程遠いおどろおどろしい声のせいで次の言葉が出せなかった。

組分けはやがて終わりに差し掛かり、ハリーと同じコンパートメントにいた赤毛の少年「ウィーズリー・ロナルド」がグリフィンドール、「ザビニ・ブレーズ」がスリザリンに決まって終了となった。マクゴナガルが椅子と帽子を片付け、それが終わると校長であるアルバス・ダンブルドアの出番となる。腕を大きく広げ、新生へへの歓迎の意思をそのまま顔に出すようにニッコリと笑つて演説を始めた。

「おめでとう！　ホグワーツの新生、おめでとう！　歓迎の宴の前に、二言、三言、言わせていただきたい。では、いきますぞ。それ！　『わっしょい！』『こらしょい！』『どつこらしょい！』『以上！』」

ハリーと魔理沙がそのユーモアセンスに（悪い意味で）脱帽している間にダンブルドアは再び席につき、出席者たちは拍手喝采し、テーブルに並べられていた大皿に料理が湧き出た。

あの校長よりネビルの方が優れたコメディアンだろうとかそういうことは置いておいて、たつた今から魔理沙たちは正式にホグワーツの一年生。歓迎会の始まりである。

九話 烏賊寮スリザリン

ローストビーフにチキン、ポークチョップやラム、ソーセージとベーコン、ステーキ、それといくつかのじやが芋料理に主食のヨークシャーピング。付け合わせとして豆やニンジンなんかの茹で野菜と、グレービーやケチャップをはじめとしたソース類。飲み物は葡萄の……（魔理沙にとっては残念ながら）ジュースだ。さつきまで空っぽだった皿の上は、見るだけでよだれが溢れるような魅力的な料理で溢れかえった。いや、目隠しをしてもその匂いで食欲を刺激されまくるに違いない。

クラツブとゴイルは、それはもう普段の鈍臭さが嘘のように（スリザリンに相応しい）俊敏な動きで取り皿へ料理を確保し、流し込むように口へ運んでいく。この二人には劣るが他の生徒も一斉に食べ始めた。それでも料理は一向に減る気配を見せず、ホグワーツ魔法魔術学校の偉大さを見せつけるがごとく次々と湧き出し続けている。

魔理沙はまずラムチョップに手をつけた。イギリス料理らしくシンプルな味付けだったが、だからこそ、その微妙な塩加減や上品なハーブの香り……そしてなによりラム本来の濃厚な肉汁の風味が躍った。

「汽車でもそうだったけど、君って小食なんだな」

そうやって肉の感触を確かめるようにゆっくりと咀嚼しているのにドラコが気付いた。皆が奮ってよく食べよく飲んでいる中では不思議な様相だったのだ。魔理沙自身も基本的に豪快（といってもこの昼からの付き合いでの印象だが）なだけに余計に。一方で、その小さく少女然とした容姿には相応なしぐさであるのだから……やっぱり、二倍変だ。”変なのが変”に感じている面もある。

「んあ？ 何がだ？」

「手、止まってるじゃないか」

「いや、シンプルな料理だなと思ってな」

「そうかい？」

ドラコにしたなら、その完成度はともかく一般的な”ご馳走”だ。む

しろソースなんかはかなり充実している方に思う。

「ミストウツドさんの家ではこういう料理はなかったんですの？」

「……確かに、イギリス料理の粗雑さに見切りをつけて外国の料理を愛好する方も多いと聞きますけれど」

「あー、うん、見切りをつけた結果だな。意味は真逆だろうけど」

同じく今年の新入生、ダフネ・グリーングラスの問いに、魔理沙は苦々しい笑顔で答えた。確かに単純な料理に“見切りをつけた”のだが、その理由は「不味いから」ではなく「作れないから」である。この数年、周りに有ったのは森の瘴気をたつぷり吸って育った食材ばかり。味噌っぽいナニカやら醤油っぽいナニカやら……つまり薬液（開き直り）に漬けて込んで毒素や魔力、そして何より味を調えないと食べられたものじゃなかった。そんな材料を相手にしてきた者にとつては、むしろこの部類の料理はある意味憧れだ。何度か免疫力を信じて森で狩った獣の（何故か蛍光反応を示す）肉にチャレンジしてみたり、地元の村からダイナーを失敬してみたりしたこともあったが、やはりこの味には程遠かった。

「もし飽きるのが心配なら、頼めば違う料理を出してもらえるようになるわよ。ほら、あっちの男子……」

ジェマの視線の先で、かなり大柄の上級生が周りの生徒と談笑しながらぞんざいな手つきでローストビーフを切り分けて次々口に運んでいる。

「今は特別な宴会の席だからみんなと同じものを食べてるけど、あいつ……マークス・プリントなんかしょっちゅうイタリア料理を食べて身体から魚介類とバジルの臭いをさせてるわ。タコ足なんかにも平気で齧りつくから困ったものよ」

「タコの何がいけないんだ？」

「メリッサは気にならないの？　ぬめぬめうねうねしてブチブチ吸盤がいつぱいついてて気持ち悪いじゃない！　うえー、思い出して気持ち悪くなっちゃった。イカはかわいいけどタコとききたらまったく……」

「私はタコもイカもダメですわ」

ダフネにとってはどちらも気味の悪いモンスターである。「デビルフィッシュ」と言うが、タコやイカに比べたら悪魔の方がまだ人に近く優しい気な見た目をしているというものだ。

「えー……もしかしてドラコもタコが怖かったりするのか」

「僕は平気さー！」

「ふーん……あーあ、久しぶりにタコの煮つけが食べたくなってきたな。出してもらえるように頼むかな」

魔理沙は魔法の道に足を踏み入れる以前の記憶を反芻した。

故郷の幻想郷に海は無く、タコに限らず海産物は貴重だった。実家は大店で裕福だったが、それだからこそ、何かの催しもの際には財力を見せつけるように魚介料理が振る舞われ、見た目にインパクト抜群なタコの姿煮は宴の花形だったのだ。魔理沙は丸くてプリプリした頭（本当は腹らしい）が大好きだったのだが、それは暗黙のうちにお客さんに譲らされることが多くていつも悔しい思いをしていたのを今でもはつきりと思い出す。

「見るのも苦手な子が多いみたいだしやめた方が良くないかなー！」

「美味しいのにな、タコ。……ところで、食べないのか？」

魔理沙は真ん前の席に座るゴーストに声をかけた。コイツときたら（なんせ肌から服から色が全部白銀なせいで判別し難いが）血糊だらけの服装で仏頂面の無口なばかりかモノも喰わない。あのスネイクですら食事には活発に口を動かすし、あまつさえ意外とよく喋っているというのだ。宴会の席で、しかもこの私の目の前に陣取っていて、それなのに腕を組んだまま置物になっているなんてなんとも癪に障る。

「食す必要が無い」

「じゃあ嗜好品として食べればいいだろ」

「……それにしてもこのような料理は我々には不適切だ」

「逆に言えば霊向きの料理が有るのか。初耳だな」

師匠の悪霊も平気で魔理沙と同じものを食べていた記憶が有る。まさか、あちらとこちらでは幽霊も違うというのか。……違うんだろ

うなあ。

「じゃあそのゴースト料理を持って来ればいいだろ。その辺にフラフラ浮いてたり手持無沙汰にじーっと座ってるんじゃないやなくて霊用の席を設けてさ」

「となれば貴様らはやれ気色悪いだの臭いだのと騒ぐだろう。死せる者には死せるモノ……我々に相応しく、また我々が愛好するは死んだ料理。つまり腐敗した食物なのだから」

「そりやアご配慮有り難う存じます」

聞かなくていいことを訊いてしまったことに気付いた魔理沙に、『血みどろ男爵』は初めて表情を変えて意地の悪そうな笑い声を出した。

「蛆が湧いておれば一流ぞ」

その後 魔理沙が二つ目のラムチョップを平らげ、口の中をすつきりさせるためのハツカ飴を噛み砕いている辺りで食べ物が消え去った。食後酒が欲しいところだが、どうなのだろうか。世の中には「未成年の飲酒禁止」とかいう意味不明な規則があると聞く。もしかかも”そう”で、宴会はこのままおひらきなのだろうか。酔っぱらいの喧嘩や素面じゃとうてい笑えないような下品な芸も無しに宴会と言えるのか。

と、一年生らしからぬ心配をする魔理沙の目の前で、再び大皿が満杯になった。

今度はデザート。びつくりするほど色鮮やかに多種多様なアイスクリームの山を筆頭に、これまた両手で数え切れない種類数の菓子パイン、ドーナツ、ゼリー、カスタードプディング、ライスプディング、エクレア、それに特大のトライフル。そして立ちこめる紅茶の香り。

「これは、ものすごいな」

糖分の津波、溢れる色彩……まさか菓子に圧迫感を覚える日が来るとは思ひもなかった。

「それでしようか？」

茶色面積90%だったメインとのギャップのせいで目を白黒させている魔理沙の隣で、ダフネはこともなげにドーナツを齧った。たっ

ぷり詰まったブラックベリージャムが今にもこぼれそうだ。

「それでしようか、つて……」

「ま、イギリス人はお菓子とお茶の方に情熱を向けるものだし。……だいたいカルチャーショック受けてるみたいだけど、メリッサって出身どこのなの？ タコ云々からするとやっぱイタリア？」

「んや、長いこと引きこもって魔法の研究してた家だな。アイルランドにある最近の領地はだいたい700年目らしい」

ジェマの問いに、魔理沙はまたしても例の返答。しかも慣れてきたこともあつていかにも名家に聞こえるように言葉を選ぶという小細工も付け加えた。

それに反応したのはダフネ。驚きと納得が半々といった様子で目を見開いた。ジャムはこぼれなかった。

「ドラコさんと一緒にいらしたからどういう方かと思つてましたら、そういうことでしたのね」

「ああ。メリッサの魔法は凄いや」

(なぜか)ドラコが得意になつて応え、それを見てダフネは紅茶片手にクスクス笑つた。

「……二人は知り合いだったのか？」

「父のパーティーでちよつとね」

「と言うよりドラコさんなら既に上級生の皆さんにもお知り合いが多いのでは？ マルフオイ家のパーティーといつたらもう殆ど魔法族旧家の社交界みたいなものですよ」

「まあ、主催者一家として父について挨拶してまわったりはそれなりにあるからね」

「ほー、たいしたもんだ」

「それほどでもないさ」

魔理沙は感嘆と尊敬を惜しみなく詰め込んだ”ふうの”笑顔でドラコをおだてた。いやはや、擦り寄つた先は思いもよらぬ大樹だったようで。幸先が良すぎて逆に不安になるほどだ。物語や何やでも『一番の大金持ち』といつたら噛ませ犬の定番だし。

「もしかしたらミストウッド家もそのうち招待することになるかもし

れない」

「光栄だがウチの偏屈が動くかねえ」

ドラコとダフネ、それと魔理沙の（架空の）家族の話につられてか、他の生徒たちの間でも次々に家族の話題が上がり始めた。パーキンソンにザビニにブルストロードに……今年の一年生だけでも、やはり言うべきか、前評判の通りに名家の出身らしい（つまりマルフォイ家と知り合いだという）のが多い。

「こう見るとスリザリンは貴族寮みたいなもんなのか」

「だから僕は初めからそう言ってたじゃないか。スリザリンが一番いいんだって。それを君は他の三つといっしょくたにして笑ってさ」

「貴族寮かどうかはさておき、スリザリン生が才能に溢れてて優秀なのは確かよ。だって、サラザール・スリザリンがそういう生徒を望んだんだもの。ほかの創始者より特に拘ってね。寮杯だって去年で6年連続よ」

「今年も諸君らの奮闘に期待している」

「期待してるようには聞こえないんだがな」

血みどろ男爵による底冷えするような声での激励からしばらくして、ついにお菓子も消えた。そして閉宴の挨拶のためにダンブルドアが再び立ち上がった。

「エヘン——全員よく食べ、よく飲んだことじやろうな。まだまだ満足していないというものは挙手！」

広間はシーンとして手が挙がる気配も無かった。魔理沙はフルーツたつぷりのトライフルをたらふく食べたし、クラッブとゴイルもシャツのボタンが閉まらなくなるどころか閉めようと試みるのがばからしくなるほど腹を膨らませて涅槃顔だ。

「よーしよし、ではまた二言、三言。新学期を迎えるにあたりお知らせがある。一年生に注意しておくが、校内にある森に入ってはならん。これは何人かの上級生へも言わねばならんことじゃがの」

ダンブルドアはグリフィンドールの方に視線を送った。どうやら話に聞いたグリフィンドールの規則破り癖は学校側も承知のことらしい。

「二つ目に、今学期は二週目にクイティツチの予選がある。寮のチームに参加したい人はマダム・フーチに連絡することじゃ」

白い短髪の魔女が立ち上がって一礼する。同じ金目ということもあってか、魔理沙は一瞬自分と目が合ったような気がした。

「最後に。とても痛い死に方をしてみたい人でない限り、今年いっばいは本棟四階右側の廊下に入らないように」

この一言には少しのどよめきが起こった。言い回しに笑う者やどういうことかと困惑する者など。こういうことは珍しいようでジエマも表情を曇らせる。魔理沙はというとこれまたいろいろと勘ぐっていた。

「今年いっばいは」と言うということは、その事象がある程度把握しているということ。脅しのため大きに言っている（ついでに魔法を以てすれば人間は簡単に壊れる）ことを加味しても、宴の席で「死」という単語を出すことから透ける重大性。或いは何らかの機密が（今年）廊下の先にあつて、「とても痛い死に方」というのは“それ”自体が危険なのではなく”ペナルティー”や防御のしかけなのかもしれない。

この一瞬でひどく興味を惹かれたが、残念ながら魔理沙はそれなりの魔法使いであるものの、“魔法界”では初心者である。簡単に手出しできそうにないというのも同時に思い至った。“今年いっばい”中に、（直接的にか間接的にかは問わず）チャンスがあればラッキーくらいに構えるのが賢明だろう。その通りに過ごしてられるかは自分でも自信が無いが。

「では、寮に入って寝る前に校歌を歌おうのう」

ダンブルドアは数秒前に物騒なことを言った同じ口で、今度は底抜けに晴れやかに合唱の音頭をとった。ひよいと振った杖の先からリボンが高く長く延び、空中に金の文字で歌詞を描いた。

「皆、自分の好きなメロディーで。では、さん、し、はい！」

ふざけた歌詞だと思って読んでいたらメロディーもおふざけの極みである。ダンブルドアが歌おうと言いだしたときに周りの職員がなにやら苦笑いしたように思ったが、気のせいではなかったようだ。

ジエマはむりやりグレナディアーズのメロディーで歌い上げ、ダフネは花のワルツに歌詞を落とし込もうと腐心したが周りにつられて音程がしっちゃかめっちゃかになった。魔理沙はちよつとした悪戯心で、途中で眠ってしまいそうなほどゆっくりとした声明を用いたのだが、そのせいで同じくとびきり遅い葬送行進曲で歌っていた双子のウィーズリー兄弟（列車で爆竹を鳴らしていたヤツ）と最後まで残ることになった。さながら国際葬式合戦だったが、ダンブルドアは嬉しそうに拍手をして「音楽とは何にも勝る魔法じゃ」などと感涙する。ドラコはあまりのバカらしさに終始閉口していた。

「さあ、諸君。これにて今年の始業の宴は終わった。そして代わりに就寝時間が差し迫っておる。一年生は監督生に続いてベッドへ駆け足！ それ以外は各々自由にベッドへ駆け足！」

監督生は一察に何人か居る（見たところ男女それぞれ三人ずつ）ようで、ジエマ以外にも横両側と後ろについて一年生の誘導にあたるつもりらしい。だが、誘導というより監視にも見える。大広間から出て、やかましく動き回る絵画たちを無視して、その先から降りた地下牢らしき区画をも通り過ぎ、更にどんどん下へ下へ暗い道へと進んでいるこの状況にあつては。……そんなつもりは無いのだろうか。……

「まだ歩くのか……」

「雰囲気は面白いんだが、まあ面倒だな」

「なんだかワクワクしますわね」

「僕は膝がガクガクしそうですよ」

目に入る壁面も灰色の石材から削った岩の洞窟へ、そしてだんだんと荒く凸凹としたものになっていき、やがて湿気からテラテラとおぼろげな灯りを反射する光沢を持ちはじめ。その間絶え間なく十字路や分かれ道を経由してきた（しかも魔法で偽装された隠し通路もいくつか見かけた）ものだから、ちよつと気の弱い生徒……それこそネビルなんかスリザリン生になったら教室との行き帰りだけで泣き出して遭難していただろう。たとえ気弱でなくとも無駄に時間と体力を喰うというデメリットが有るが。

「さて、ここが入り口よ」

この地下空間にいくつも有るだろう岩の袋小路、その一つの壁を前にしてジエマが立ち止まった。

「いわゆる隠し扉というものよ。ちなみに、見て分かる通り広大な地下迷路の中のただの岩壁だから、場所を忘れたら悲しい結末が待っているわ。……ま、栄えあるスリザリンに選ばれた貴方たちなら、そんなことになる前にちゃんと道を覚えてくれると思ってるけどね」

ジエマの言う通り、隠し扉は見た目に全く普通の岩壁である。しかも、恐らくこの場では最も魔力（とその痕跡）に対し敏感だろう魔理沙のアンテナにも殆ど引つかからないほど巧妙だった。

「開く方法は合言葉よ。二週間ごとに変わって、この中の談話室の掲示板にアナウンスが張り出されるわ。そして、今日から二週間の合言葉が『無慈悲な鉄槌』」

武骨な岩の塊が驚くほどスムーズに音も無く滑り退き、スリザリン寮への道を開いた。場所を特定すればあとは合言葉だけ。しかし、単純であるからこそその秘匿性である。どうやら魔法的な仕組みが作用しているのは『合言葉の感知』から『作動』までだけであり、扉の芸術的なまでに滑らかな駆動は物理的工芸の賜物であるようだ。

「さ、入って。突っ立ってないで」

入り口をくぐるとまず目に入ったのは壮大な彫刻が施された大理石の暖炉。そしてその両脇に開く大きな窓で、向こう側には水底の深い青の世界が広がっている。天井と壁は外の廊下と似た荒削りの岩だが、並べられたソファや机は荘厳な装飾を備え、全体の雰囲気は湖底に隠れた古代遺跡さながらだ（ホグワーツの歴史を鑑みれば遺跡そのものとも言えるが）。

ただ、一つ文句をつけるなら天井からつり下がっているランプが投げかける光が緑がかっていることだろう。顔色がこれ以上ないほど悪く見える。

「右突き当りの扉の先が女子寮よ。女子浴室もその奥にあるわ。左が男子ね。異性の領域に忍び込んだり、招き入れたりしないように。特に男子が女子寮に入ったら大変なことになるのよ」

「不公平な話だよなあ」

監督生の一人が顎をなでながら呟く。その指の間から傷跡がのぞいた。

「それと、入り口前の両サイドにあるのが掲示板——あ！ ほら見て、うちのマスコットも歓迎に来てくれたわ！」

ジエマが件の窓を指さし、その先を見た一年生たちはどよめいた。

いつの間にやって来たのか、談話室の横幅とほとんど同じ大きさにも見えるほど巨大なイカがすぐ近くに揺れていたのだ。魔理沙たちにはイカの視線を読んだ経験は無いが、こちらを覗き込んでいるようだということはずぐに分かった。

「けっこう人懐っこいみたいで、たまにああしてじーっとこつちを見てるの。かわいいでしょ」

「たぶん僕らのこと狙ってるんだと思うけど？」

ドラコはいつもの三割増しで顔をしかめ、イカ嫌いのダフネは震えながら魔理沙にしがみついた。

「この部屋イカれてますわ」

「意外と余裕あるんだな」

思い思いに談話室を眺めてまわったあと、男女分かれてそれぞれ寝室へ案内された。一年生たちは二人部屋に割り振られ、その扉には既に札が掛かり中に荷物も運びこまれていた。誰かが気を利かせたのかこれまでに仲良くなつた組で分けられたようで、ダフネと魔理沙は同室だった。ダフネは喜んでいたが、魔理沙の方は色々と作業やら実験やら自由にしたいたいということもあって、本当は個室だったら良かったのにと内心少しだけがっかりした。……それはさすがに贅沢かと我慢することにしたけれど。

それにしても、ベッドを前にすると一日で溜まった疲れをどっと思い出すもの。魔理沙は（帽子の中の）荷解きも風呂も明日の朝にまわすことに決めて、すぐに眠り込んでしまった。壁のタペストリーや銀細工のランタンはもちろん自分が眠る布団に施された銀糸の刺繍の美しささえ意識に入らなかつたほどだ。一方、ダフネが眠ったのは談話室と同じく湖底に開いていた窓に分厚い蓋を取り付ける作業を済ましてからのことだった。

十話 初めの授業

「あふ……おはようございます、メリッサさん」

「おう、おはよう」

次の日。ホグワーツで迎える初めての朝である。

軽く柔らかな羽根布団を身体から押し退けるのに苦戦しているダフネとは対照的に魔理沙はだいぶ前から起きていたようで、僅かに湿った横髪を編みながら返事をした。

「もうシャワー済ませたんですね」

布団を巻き込みながら身体を回して枕もとの目覚まし時計を見ると、まだだいぶ早い時間だったらしい。ダフネは起き上がるのを後回しにしてしばらくベッドでもたもたしていることにした。

「ああ、私はシャワーってか風呂だがな。そっちはもう昨日の夜に行ったのか？」

細い四つ編みの先をリボンで留めて、鏡の前で少し揺らしてみる。これといった基準が有るワケではないが、魔理沙的にとりあえず納得のいくセットができた。

「いえ、まだ」

「そうか。……結構良い風呂だったぜ。相変わらず灯りが緑なのが欠点だけどな」

そう言えば自分もこれからシャワーを浴びなければならぬ。髪を整える時間なんかも考えると案外余裕は無いのかとダフネの頭に血がめぐり出し、何度かの寝返りの後、やっと布団から這い出す決心をさせた。

「それはそうと、一限目の授業って何でしたかしら？」

タオルや代えの服、『驚異的に髪に優しい魔法ドライヤー』なんかを用意しながら、割と切実な疑問を口にした。思い返すと、授業関連の連絡は聞いた覚えが無い。時間の方は親から聞きかじった話と、あと常識から推し測れるものなのだが。

「メリッサさん……？」

返事が無いのを不思議に思い振り返ると姿も無かった。それもそ

のはず、魔理沙はとうの昔に「じゃ、探検に行つて来る」なんて言い残して出て行つてしまつていたのだ。

次に魔理沙とダフネが顔を合わせたのは8時頃、大広間でのことだった。ダフネが同じくスリザリン新入生であるミリセントとパンジーの二人と一緒に朝食をとつていたところにやたら上機嫌で現れたのだ。

「全くおもしろおかしいお城だな。設計者の顔が見てみたいもんだ。……確かレイブンクローだったか」

魔理沙は三人の正面にドツカと座り、今しがた発見してきた仕掛け扉や通路のことをスラスラと話し始めた。ドアノブではなく蝶番の方を押さないと開かない扉やら真ん中に差し掛かった辺りで折れ曲がつて結局上の階に行けない階段なんかはまだ序の口で、少しずつ天井が降りて来る部屋や後ろから水流が迫ってくる地下道やらにも出くわしたという。

「地下から隠し通路に入つて6階の男子トイレに出たときはさすがに面食らつたぜ。しかもそこがきつたねえのなんのつて」

「食事中よ」

それまで黙って聞いていたパンジーが割つて入つた。そもそもざつくばらんに過ぎる口調が気になつてはいたのだが、朝食時にトイレの話が出たところで我慢ならなくなつたのだ。

「ああ……悪い。ちよつと興奮してた」

「あなた、昨日ドラコと一緒に居た子よね」

「メリッサ・ミストウッドだ。そつちはパンジー・パーキンソンとミリセント・ブラストロード……だったか？」

「ブルストロード」

「こりや失礼、ブルストロードな、覚えた。何はともあれよろしく」

テーブル越しに握手を交わす。特別小柄な魔理沙と特別大柄なミリセントの手はまるで子供と大人のようだった。

「……にしても、これじゃ教室に行くのも一苦労だな。実際、私は件の6階からこの大広間に来るのに難儀したし。親切な肖像画が道を教えてくれたが」

「先輩方もそうおっしやっついていて、役に立つ通路や階段のシカケを教えてくださいましたわ。メリッサさんは早くから出かけてらっしゃったからその場にいませんでしたけれど」

微妙に棘のある声色。朝置いて行かれたのをちよつとだけ根に持っていた。

「掲示板見てるときにね」

「げー、私もちよつと待ってりやよかったな」

「メモしてますから大丈夫ですわ」

「助かる」

と、そこへ声をかける者があった。

「おはよう。ここ、いいかい？」

「ようドラコ。どこに座るのもお前の自由だ」

だいたいどういう反応をするかは予想していたらしく、返事を聞くか聞かないかのうちに魔理沙の隣に腰かけ、二人の手下がそれに続いた。ドラコは大皿からブラックプディングばかり取って食べ始めた。

「一時間目は『妖精の呪文』らしいね。みんなはどの程度できる？」

「モノを飛ばしたり呼んだりの魔法だな。ま、できないってことはないんじゃないか？」

「そう言えば、私が初めて使った魔法って浮遊なの。ちよつとお母さんとケンカしたときに周りの食器とかふっ飛ばしちやっつて」

「じゃあいきなり好成绩かもな」

「ちゃんと狙ったところに飛ばせるかどうかが問題だろうけどね」

「でも月曜の一時間目が妖精の呪文なのは幸運ですわね。この時間ですと教室に向かうのに丁度いいところへ階段が降りてくるみたいですよし」

ダフネはメモに書いてあることをそのまま言ったのだが、我ながら「階段が降りてくる」なんて妙な言葉だと思った。階段”を”降りるのが普通だろうに。しかしそこを気に留めたのはダフネだけのように、みんな「へえ、便利だなあ」という反応。一人、魔理沙は「時間で変わるのかよ……調べ直しかなあ」とかなんとかブツブツ言っていたが。

と、大広間が俄かに騒々しくなった。何かと入って入り口の方へ眼を移すと赤毛ののっぽ……の隣にくしゃくしゃ髪眼鏡。ハリー・ポッターだ。視線や人だかりに少し顔をしかめながらどうにか周りに人が少ない席を見つけ出すものの、すぐに生徒たちが寄って来てチラチラと顔を窺ってはヒソヒソと何やら言い出す。周りは魔法界随一の英雄に興味深々だが本人の眉間には皺が寄っていた。その上、この城が愉快さと引き換えにやたらと複雑であることをハリーも今しがた思い知らされてきたところ。授業でうまくやれるか以前に教室に無事到着できるかどうかという新たな心配事は、観衆にサービスのスマイルを返さない理由として十分だろう。

「私がああの立場ならすぐにも学校をやめるだろうな。落ち着いて本も読めやしないだろうぜ」

「取り巻きを作って上手くやりそうだと思うけど」

「どうせ何日かしたら落ち着くわよ。これから授業もあることだし、実力相応の人気になると思うわ」

「これで全然ダメだったらピエロだね」

「彼、ちよつとボサツとした感じだものね」

パンジーがフンと鼻を鳴らした。

「賭けでもするか？」

「私は好成績にお昼の一品賭けますわ」

「ビュッフエスタイルのこの城の食事で一品賭けるも何も、な」

結局、朝食の終わりと共に賭けの話は流れ、『妖精の呪文』の授業が行われる教室に着いた頃には誰もその事を覚えていなかった。突然湧いて出たゴーストに驚いたミリセントの右ストレートの風切り音のインパクトに比べれば、成立しなかった賭け事の話なんて芥同然だろうから。

インパクトと言えば教授であるフィリウス・フリットウィックもなかなかのものだった。新入生歓迎会の際に見かけた小人。教壇の机に背が届かずに、足下に本を積み上げたその上に立ってやっと頭がのぞく程度だ。ドラコが言うには半小鬼らしいが、グリーンゴツツの小鬼100%の小鬼よりも小さい印象すら受けるほどだった。

「この科目では『妖精の呪文』……単純な浮遊から家事の助けになるもの、軽いイタズラの類まで……つまり”おとぎ話の”妖精が使うような、イメージが簡単に親しみやすい魔法を学んでいきます。魔法魔術学校に入って最初の授業としてはこれ以上無いでしょうな」

フリットウィックはニコニコとした顔で話した。声も聞き取りやすいし、いかにも授業をやり慣れているベテラン教授といった感じだ。

「皆さんも杖を買ったときなどに体験したものでしょうし、この中には既に教科書の内容をいくらか使えるという人もいるとは思いますが……『できる』と『極める』は異なる」

そう言うと共に無造作に杖を振るう。瞬間、教室中の椅子と机がそこに座っている生徒たちもろとも全て浮き上がった。その小さな見た目とは裏腹の強力な魔法にみんな目を見開いて呆気にとられる中、フリットウィックとしては狙い通りという感じ。スリザリン生というものは、その能力の代わりに、これくらいやって実力を見せておかないとすぐに教授らを舐めてかかるから苦手だ。自分があまり罰則や減点を行わないスタイルであるせいで損をしている部分もあるかもしれないが。

「では、記念すべき、皆さんが学ぶ初めての呪文は『フリペンド』……モノをはじく魔法ですな」

フリットウィックは皆を床に降ろすと木のキューブを配り、早速呪文の説明に取り掛かった。

とは言え呪文そのものは極めて単純。対象に向かって「どけ」と思い、そのように杖先から魔力を出すだけだ。発音も難しいところはないし、杖の振りも思い通りにやれば良い。授業時間は基本的に『魔力を出す』こと自体の練習と、モノを”はじく”この呪文が、後に習うモノを”動かす”呪文に比べて如何に簡単かの説明に費やされた。

魔理沙は魔力の扱いに慣れているだけあって、それこそ一瞬で『フリペンド』を習得した。

狐につままれた気分だった。説明されたそのままに、とりあえず「どけ」と思って杖を振ったらキューブがその場からどいた。「どの方

向からどの程度の外力を加えれば対象は動き、そのためにはどんな質のどれくらい魔力をどの程度変換すれば良いか」なんて思考は一切無し。無論、今までモノを動かす魔法を使うたびに心の中でそんな長つたらしい文言を確認していたワケではないが、魔理沙の魔法の根源にあるものはそういう理論だ。

モノを吹き飛ばすというのは、パンジーの例のように、魔力の目覚めとしてありふれたものだ。魔理沙自身も似たようなものだったと記憶している。しかし、その原因には双方で異なる説明が為された。

魔理沙の理論では「身体から無制御の魔力が放出された結果、その一部が物理力に変換されて物体を動かす現象」と捉えていた。しかし、フリットウィックは「怒りや悲しみなどの感情の昂ぶりによって周囲の物体や状況を”拒絶する”つまり”どけと思う”ことにより『フリペンド』に似た現象が起こる」と言った。どちらかが間違っているというわけでもなく（実際、どちらの魔法でもモノは動く）片方の場合、もう片方の場合、或いは両方の併発というケースがあるのだろう。

根底にある『魔力』はどうやら同じものらしいが、その使い方が大きく異なるということ、自分でやってみて改めて実感した。ホグワーツへ通う意義に、もはや疑問など無かった。確実に「新しいことを学べる」だろう。

「次は魔法史だね」

「ジエマさんが『覚悟しといた方がいいわよ』なんて言っただけだわよ」

なりたての一年生とはいえ学生は多忙だ。魔理沙がちよつとしたシヨックに整理をつけているうちにも次の教室へ。仕掛け通路のレクチャーを受けたスリザリン生たちは殆ど時間前に到着していたが、合同で授業を受けるハッフルパフ生には道に迷ったらしく息を切らせてギリギリで入ってくる者も多かった。

そうして時計の針が授業開始時間を指してしばらくすると黒板からニュツと顔が生えてきた。ゴースト教師のカスバート・ビンズである。大胆な壁抜けで現れた彼は、続けざまに自分がゴーストになった

いきさつを語った。なんでも、教員室での居眠りから覚めてクラスに急いだ際に身体を置き去りにしてしまつたらしい。ちなみに、ここが授業のハイライトである。

あとはひたすら退屈であつた。なにせ真面目で知られるハツフルパフ生ですら居眠りが多発するほどだ。しよぼくれた声の一本調子でひたすら年号や人名を読み上げる様はまるで催眠術。授業を聞いていたら意識を持っていかれると察知し、独自に教科書を纏めることに集中した魔理沙でさえ耳から自然に流れ込んでくる声のせい何度か瞼が落ちたほどで、次からは魔法で耳をふさぐことに決めた。

「あの幽霊教師はさつきとクビにした方がいいよ」

昼食はフィッシュアンドチップスとサンドイッチだつた。ドラコはポテトをマッシュピースに沈没させながらいつものように文句を並べた。

「はは、ドラコの言葉通りにコトが運んだら二年に上がる前には教師が総入れ替えになつてそうだ。……お、このビネガー良いな」

「でも、確かにアレは酷いですわ……うちのしもべ妖精の方がまだ面白く話せそうですもの」

「ダフネがそんな風に言うとは意外だ」

「私も寝てしまつて……この調子ではテストが不安なんですの」

「くく、居眠りした生徒の方が先生に文句を言うのか」

「あう……そう言われると……」

「ダフネだけが寝てたならそうだけど、この場合みんな寝てるからね。むこうが悪いよ」

「冷静な返しだな。あと、ソースこぼしてるぞ」

魔理沙が指さした襟元にはべつたりとマッシュピースの緑色が張り付いていた。

「え？ おっと、こういう時はなんだつたかな……確か、ステューピファ——」

「きつと『スコージファイ』ですわ」

「そう、それ。掃除の呪文。——スコージファイ！」

咳払いの後もう一度唱えるも効果なし。ドラコの服は汚れたまま

だ。

「ダメみたいですわね」

「こうか？ ……スコージファイ」

気まずそうに黙るドラコに代わり魔理沙が杖を一振り。一瞬の沈黙が過ぎ、今度は宙に溶けるように汚れが端から消えていき、カッターシャツの襟はもとの白い輝きを取り戻した。

「まあ！ メリッサさん、この呪文ももう使えますのね」

「いや、はは、ちよつともたついたけどな」

白々しい愛想笑いから分かる通り、実は魔理沙も『スコージファイ』には失敗している。本当は元々使える方の魔法でマツシーピースを微粒子に分解したに過ぎない。『スコージファイ』は『清め』の呪文であり、“汚れが”落ちることより対象がきれいになることが意識の中心にあるべきなのだ。魔理沙はドラコの『掃除の呪文』という言葉聞いて、“シャツの本来の姿”より“襟元のマツシーピースが消える”ことをイメージしながら呪文を唱えたために成功しなかった。

ごまかしついでにアンチョビサンドを間食用にいくつか帽子の中に隠し、昼食時間もそろそろ終わり。次の『闇の魔術に対する防衛術』の教室へ急ぐ。

この教科は一年生たち（特に男子）が特に期待を寄せている教科だ。なぜなら、それはもちろんことさら戦闘技術を学ぶからである。とりわけグリフィンドール生は闇の魔法使いを倒す魔法戦士に憧れているし、逆に、ちよつと（もしくはどっぷり）闇の魔術に傾倒している生徒でも、『まず敵を知る』ということで闇の魔術や生物そのものについても教えてくれるらしいこの科目は注目すべきものなのだ。

しかしそういう生徒たちは残念ながらかなり落胆することになった。なんとというか……教授であるクイリナス・クイレルが既に闇の魔術に屈してそうなレベルでおどおどしているのだ。目はしよつちゅう泳ぐし、何でもない言葉に詰まる。ルーマニアで吸血鬼に出会って以来この調子らしく教室の至る所に魔除け（特にニンニク）が吊るされ、本人からも強烈な臭いが漂っていたし、トレードマークのターバンにもよく見ると妙な染みがたくさんあった。このターバンは厄介

なゾンビを退治した褒美にアフリカのどっかの国の王子がくれた品だというのがクイレル本人の言だが、ドラコはこれも嘘に違いないと断じていた。

「でもまあ、当然っちゃ当然だな」

「闇の魔術から身を守るためにはまず怪しい人や店に関わらないようにする」なんて、まるで生活指導のような話を聞きながら、ふいに魔理沙が呟いた。

「何がですか？」

「いや、自分も妖怪の類なのに魔除けまみれで生活してりや様子が変になるのも当然だろうって。ニンニクって吸血鬼除けとして有名だが、そもそも臭いのキツイものは大抵何にでも効くからなあ。香水だつてもともと魔除けだけ」

「……え、クイレル先生って魔法生物ですか？」

「いや、魔力が明らかに普通の人間の雰囲気じゃないし。今日だけで半小鬼、ゴーストときてるんだからさほど驚くことでもないだろう」

「そう言われるとそうですね。でも、それならいったいクイレル先生はどういう種類の……」

「実はもう吸血鬼に噛まれてて眷属になってるとか？ 私が吸血鬼に会ったことないから分かんないが。……あー、でも、会ってても分からんかもな。吸血鬼ってやたら種類やら階級が豊富だし」

しかし、それにつけてもこのクイレルという教授から教科書の内容よりタメになる話は聞けそうにない。時間割だと、この『闇の魔術に対する防衛術』と『魔法史』の二大暇な授業はそれなりの割合を占めていたはずだ。教科書の独自読解もこれから一年かかる作業とは到底言えないし、何かヒマを有効活用する手立てを考える必要がある。「でしたらやはり図書館の本ですわね」

魔理沙の愚痴に、ダフネが当然な答えを返した。席に座ったままできる暇つぶしと言えばやはり読書が代表だろう。

「君たち、今日の授業が終わったばかりだっていうのに本の話かい？」
「しよぼくれゴーストとへっぴり闇祓いの与太話を聞くよりは楽しいだろうと思つてな。……ああ、そう言えば夜中に歩いちゃいけない

とかいうクソみたいな規則も有ったな」

そう考えると本の調達は最優先課題のように思えた。本を讀んでいさえすれば暇も潰れ、知識を獲得でき、そしていかにも真面目な生徒らしく見えるに違いない。

「そうかい、ま、僕は寮でチェスでもしてるよ。行くぞ、ゴイル、クラツブ」

「ああ、また夕食時に」

そういうわけでやって来た図書館（その道のりではダフネのメモが大いに役立つ）だが、まさに、圧倒されるような蔵書数だった。比喩ではなく本棚の森であった。対して利用者が少ないもんだから余計に異様な静寂を感じさせる。授業初日から図書館に行こう等と思う生徒が稀有なため、閑散としているのは当たり前なのだが。

「何が良いかな」

まず、今持っている教科書の上級版のようなものは確定として……こっちの常識が欠如しているのを補うために小説なんかも良いかもしれない。或いは魔法界の慣用句辞典なども手に入れば御の字だ。

「なあ、何か面白い小説知ってるか？」

「でしたら、ギルデなんちゃらかいいう方の本が人気らしいですわ」

「G、I、L、D、E……だよな？」

「さあ？ おそらくはそうだと思いますけれど」

「自分は興味無いのに勧めたのか……」

「私は、お母さまが『低俗な輩が書いた軽薄な文章だ』っておっしゃって読ませてくれませんでしたの。でも、世間で流行っているということは相応の価値があるものと思ひまして」

「なるほどな……ってか著者名アルファベット以前に小説の棚はどこだ」

「それなら一言、司書のマダム・ピンスに訊けば良いと思うわ。自分たちであーだこーだ騒ぐんじやなくてね」

本棚の間から現れたのはおなじみの栗毛、ハーマイオニーだ。

『図書館では静かに』って常識よ？』

「おお、やっぱお前も来てたか」

「……私に何か用なの？」

「いや？ 全然」

魔理沙の「なんでそんな風に思ったんだ？」とでも言いたげな表情にハーマイオニーは少しムツとした。

「強いて言えば……そうだな、調子はどうか？」

「おあいにくさま、あなたに心配されるまでもなく上手くやってるわ。変身術もちゃんと成功させてマクゴナガル先生から寮杯の点をいただいたもの。マッチ棒を銀の針に変えたんだけど、はじめて……特に入学してから一日目に入った授業で私ほど銀色で尖ったまつすぐな針にできたのはここ数年居ないそうよ。……何笑ってるの？ そこ
の——」

「ダフネ・グリーングラスですわ。ふふ、『図書館では静かに』はどこへ行ったのかと思ひまして」

言われてハーマイオニーの顔がカツと赤くなった。何かやり返すセリフを探したが、自己弁護の屁理屈さえ浮かばなかった。

「もともとそんな常識無かつたんだろ。それでさっきの話に戻るが、数年居なかつた出来とはすごいじゃないか。何かコツとか有るのか？」

「あなたには教えないわ」

そう言つたきり、ハーマイオニーは本を抱えてさっさと行つてしまった。

「さっきの方、お知り合いですの？」

「ちよつとした縁があつてな。さて、それじゃ司書さんのところに行くか」

「その必要はありません。もうここに居ますからね」

振り返るとすぐそこに立っていたのは司書のイルマ・ピンスその人。コンドルを思わせる顔に何処からどう見ても明らかに神経質そうな表情が浮かんでいた。

「それで、結局、何を借りたんだい？」

図書館でくつちやべつていたことについて散々マダム・ピンスから

説教を喰らい、ついでに蔵書を汚したり期限までに返さなかった場合は本に施されたあらゆる呪いが牙を剥くから覚悟するようにと釘を刺され、その後目ぼしい本を探したらそれだけでもう夕食の時間になってしまった。

「古い魔法の本と日常に使える便利な魔法の本をいくつかと、なんとなく初級の占い学本、それに一般教養本と魔術言語学と瞬間移動魔法関連。あと、ロックハートとかいう作家の小説がちよっと読んでみたら面白かったから有るだけ借りた」

しかしながらガミガミおばさんに時間を取られたとは言え目的はしっかり達成できたし……ついでに盗難防止魔法の現物資料が大量に手に入ったと思えば大成果だ。

「貸し出し制限とか無いのかい?」

「ああ、教授の許可証が無いと閲覧できない棚とか有ったな」

「そうじゃなくて、本の数さ」

「ふふ、上限キツチリですわ」

「よくやるよ……」

「そんな大げさな話でもないだろ」

文字と挿絵にしか情報が記録されてないし、かかっている魔法もマダム・ピンスの保護呪文くらいだ。読むことに関しては全く苦労しないだろうというのが魔理沙の考え。ドラコが問題にしたのはそういうことじゃないが。

「それに、上限キツチリ借りてったやつは私だけじゃないらしいしな」

マダム・ピンスは一年の女子だと言っていたから、十中八九ハーマイオニーだろう。

「メリッサが好きでやってるんなら止めやしないけど、”本の虫”にならないように気をつけなよ」

「分かってるとも。たまに本の間でカピカピのペラッペラになってるアレな」

「……もうそれでいいよ」

夕食のローストラムを食べ終わると魔理沙が今朝見つけた近道から寮に帰った。これはダフネのメモには無かったものだ。そのこと

を知った上級生たちは大いに喜んで、この道も来年からはスリザリンの新入りに受け継がれていくことになるだろうと帽子の上から魔理沙の頭を撫でた。

掲示板で明日のあれこれを確認した後、その帽子から借りてきたばかりの本を取り出し暖炉の前の長椅子に座ったのだが……その本が原因でまた上級生に話しかけられてしまう。魔理沙は今しがた開いたところの『グールお化けとのクールな散策』を膝の上に置いてロックハートファンらしいその女子生徒の話を聞くハメになった。ロックハートがどんなに素晴らしい男性かという演説に、魔理沙はロックハートの文章構成の巧みさを相槌代わりに話して暗に「聞き手のことを考えて話せ」と伝えたが、それが意味のある行為だったかは微妙なところだろう。

「ちよつと災難でしたわね」

「まあな。そつちもドラコにしつこくチェスを挑まれて大変だったみたいじゃないか」

女子生徒は自分が満足するまで喋ったら「それじゃお休み。読み終わったら感想聞かせてね」などと言って自室へ引っ込んで行った。ちなみに魔理沙がこの生徒に感想を聞かせることは無かった。それどころか話しかけることすら今後一切無かった。

「あら、気付いてらしたの？」

「視野の広さが売りって自負してるんでね。も一つ言うとアレの戯言を聞きながらも一冊読み終わった」

やれやれと大げさなため息をつく魔理沙の代わりに表紙のロックハートがキザっぽい笑みを投げかけていた。

十一話 初めの一週間

「まったく、これじゃあ香りが台無しだな」

冷たく薄暗く薬品の刺激臭漂う地下牢に似つかわしくない華美なティーカップを傾けながら、魔理沙は冗談っぽく愚痴をこぼした。対するスネイプはやはりいつも通りの、皆さんご存知の、あの仏頂面だ。「そう邪険にしなくてもいいだろ。一応気を使って茶も茶器も茶菓子もこつちで用意したんだからな」

魔理沙は琥珀色の液面に視線を落とした。使い古されたカンテラの淡い光が反射している。

「この部屋にはそれらのものが不必要だから置いていなかったのだが、その論点に関してはお考えなかつたのかね？」

抗議の念を込めてジロリと目を向けたスネイプに、魔理沙はフツと鼻を鳴らした。

「そりや部屋に茶は不要だろうぜ。でも、私は茶を飲む人間だ。ついでにお前——」

『お前』？』

「——スネイプ 先生 もさすがに茶無しじゃ」アフタヌーンティー”を楽しめないだろ。……ちえツ、締まらねえな」

「急に押しかけて来ておいて恰好をつけようとするのが間違いだというもの」

「けっ……こんなときだけうれしそうな顔しやがって」

「そんな幼稚な精神はしていないが」

スネイプは口角を下げなおしながら続けた。

「それで、何の用だね？」

「見ての通り茶話だが。含んだ意味は無しでな」

さも当たり前のように言い放つ魔理沙の態度は、目を細めて訝しむスネイプとは対照的だ。

「将来有望なスリザリン生とスリザリン最良で有名なスネイプ先生が仲良くお茶するのに何の問題が有る？」

「何を勘違いしているのか知らないが、君は将来を心配されている部

類の生徒だ」

「ほう？ そりゃ初耳だ。驚いたな……授業もプライベートもかなり上手くやってるつもりだったんだが」

座学がメインの教科は言わずもがな。妖精の呪文は初回の勢いそのままに寮内最優秀を突っ走っているし、変身術も、既知の魔法を混ぜるというちよっとしたズルをしつつもどうかこうにか課題を成功させ3点手に入れた（もちろんその日の夜にはトリック無しでマツチを針にできるよう自主練した）。そして特筆すべきは天文学で、あとは呼び名さえこちらの流儀に合わせればもう言うことが無いというレベル。教授であるシニストラが明日からでも自分の後継になれると太鼓判を押ししたほどだ。

友人関係で言えばダフネとドラコにデブ二人はいつものメンバー。それとたまにミリセントとパンジーなんかのスリザリン一年生たちとも気軽に談笑できる。ジエマをはじめとした何人かの上級生たちとも気安い関係になっていく点を考慮すれば新入生全体で見ても屈指のコミュニケーション能力を発揮していると言ってもいいはずだ。「確かに一年生にしては上手くやっている。しかしそれ故に注視される。何か企んでいるのではないか、とな」

「メリッサの将来が心配」というより「メリッサの”せいで”将来が心配」と言った方が正しいだろう。闇の魔法使いが往々にして優秀な学生だったというのも割と知られた話である。魔理沙はどう見たって御しやすいタイプの生徒ではないために、神経質な教授らはその金色の視線の先を頻繁に気にしている。特にマクゴナガルは言葉にこそ出さないが正に「悪の卵を見つけた」などと考えているようだった。「それと、質問を受けた際に、その問いかけの言葉のうちに出た文言の定義について確認を取るのも不自然だろう。”何も知らない”一年生としては。薬草学の授業があやうく哲学の授業になるところだったそうではないか」

「いや、出題者と回答者の間に意識の齟齬があるのはマズいだろ」

スネイプは心の中で首をかしげた。自分は普段から適当に冗談を並べてはぐらかしてばかりの割にこういうときだけマトモなことを

言うものだ。

「……はあ、不器用な方が可愛いってのはどこも同じか」

そういう問題ではないと分かって言ってるのは、スネイプの洞察力が優れていることを差し引いても明白だった。全く、本当に学術以外ではこの通りである。

「……でも、大部分はスリザリンだからっていう色眼鏡のせいだとも思うけどな。スリザリンの嫌われっぷりと言ったらとんでもないぜ。ついこの昼頃にもレイブンクロー生に追い回された。この刺繍を見た瞬間豹変したぞ」

魔理沙はローブ左胸の蛇の刺繍をいじくった。授業初日の夜に配られたスリザリンの寮章で、布の上に置いて杖でつくだけで縫い付けられるというものだ。

「……どういふことか、少し聞かねばなるまい」

「どうもこうも。インチキクイズ出して来るドアの部屋に居たらレイブンクロー生が何人か来て『スリザリン生だ!!』つつつて」

呑気に語る魔理沙の態度に思わず天を仰いだ。天を仰いだと言っても見えるのは湿っぽい地下牢の灰色の天井だけだが。

「その扉というのはもしや西塔最上、鷲のドアノッカーがついている扉かね？」

「なんだ知ってたのか。アレ、ひでえよな。さっき言った『出題者と回答者の間の齟齬』の最たる例だぜ。『一とは何か』って聞いてきたんだが……そんで、向こうが欲しがってた答えは『全』なんだが……なあ？　どういう意図の質問なのか、哲学なのか数学なのかはたまた別の何かなのか、そもそも『一』じゃなくて『イチ』って音の別の言葉なのか。確認しようにも相手は九官鳥みたいに『一とは何か』としか言いやがらねえ。私が数字の一の概念について懇切丁寧に説明した時間を返してほしいぜ。他にも散々言ったしな。そんで最後に半ばやけくそ……いや、言いたくなかったから残していたんだが……ともかく、『全』が答えときた。『一は全全は一』確かに有名な言葉且つ概念だ。でもその解釈は様々だし、それぞれの解釈についてまず『一』とは何か『全』とは何かという仮定が有る。法則と神、素粒子と世界、自

我と仏、始まりと終わり……例を挙げればきりが無い。そういうわけで、『一は全は一』というのは思想がたどり着く先として興味深い一つではあるが、『一とは何か』という説明不足で合言葉的な、融通のきかない問いの答えとして扱うには不適切過ぎると私は思うんだ。本質を見失つてるといえるか」

「ああ、さよう。あの扉の問いが厄介だという話は有名だ」

スネイプはキュウリサンドを口に入れたままフゴフゴと言った。だんだんとヒートアップしていた魔理沙に冷や水をかけるような、これでもかという程の生返事だ。

「……さすがにおざなりすぎないか？」

「話の要点はそこではないのでな。問題は、その部屋が何の部屋かということだ」

「ああ、中はけっこう凝った部屋だったな。青シルクのタペストリーとか。でも見晴らしの良い高所の部屋のくせに天井に星空を描いてあるのはナンセンスだと思うぜ。奥に通路も見えたけど、そこでレイブンクロー生が来て調べられなかった。何か重要な隠し部屋か？」

「レイブンクロー談話室だ」

「……ほーん」

魔理沙はちよつと気の抜けた返事をした。ああ、そういうわけであいつらは私を見た瞬間血相変えて杖を抜いたんだな。端的に言えば空き巣だもんな。色々と納得だ。鷹に青の装飾も、思えばレイブンクローの象徴だし。その面から考えれば、扉のクイズも（問題に納得いかないとはいえ）英知を宝とするレイブンクローらしいシカケだ。

「これ、もしかしてけっこうヤバイやつか？」

「君にとっての『ヤバイ』の基準が分からんが、あえて吾輩の尺度で答えるなら、けっこうヤバイやつであろうな」

レイブンクロー談話室が問題さえ解ければ誰にでも入れられるようになっていって、だからって他寮生が侵入したという例はなかなか聞けるものではない。そこに”なに”にするか分かったもんじやない”スリザリン生だ。今頃レイブンクローの監督生たちはどこかに罌が仕掛けられていないかと大騒ぎしているだろう。

『スリザリン生』という認識だけで、身元の方は判明してない可能性は……」

「君は二番目か三番目には有名な一年生だ。『うるせえんだよこのファツキン痴呆帽子』の子」

「うげえ」

「そう言えばそんなことあった」という意味と「モノマネ似てねえ」という二つの意味が込められた「うげえ」である。

「そうでなくとも目立つ人間だということはさすがに自覚しているだろう」

もつと正確に言えばいわゆる目立ちたがりだろうとスネイプは見ている。派手な服装に異様に軽いフットワーク、隙あらばジョーク……。スコーンを割る手つきにだって妙な含みを持たせて気取っているようだ。

「あー、何かあつたらよろしく頼むぜ」

「もちろんだとも。君がスムーズにホグワーツから撤収できるよう、喜んで力添えしようではないか」

「私に対して冷たすぎないか?」

「これでもスリザリン生ということで堪えてやっているというものだ」

『ミストウッド、君の無礼な態度で、一点減点』ってか?」

魔理沙は眉を寄せて口をへの字に曲げ、昼前の授業でスネイプがハリーに言ったようにモノマネした。スネイプはしまったと思った。突然イヤなところに話が跳んだものだ。

「スネイプ先生は有名人だからって祭り上げるタイプじゃないだろうとは思ってたが、だからってまさかその逆に振り切ってるとはなあ」

いずれ弄られるだろうとは思っていた。ハリー・ポッターを質問攻めにしてグレンジャーを無視したとき、スリザリン生たちがその二人を笑いものにしてている中、ミストウッドはこちらを向いてちやうど今のようになタニタと笑っていたのだ。

「……グリフィンドールはポッターを取ったことで調子付いている。今後の問題を防ぐためにも、ポッターには特に厳しくして折っておく

べきだという考えだ」

「教師が生徒を折っちゃダメだろ」

魔理沙は紅茶を吹き出しそうになったあと、ケタケタと笑い声をあげた。

「言葉の綾だ。ところで、その授業でのことだが。ミストウッド、どうして手を抜いた？」

「露骨すぎる話題転換なうえに身に覚えが無いときた。どうしたもんかねえ」

ハリーの話題はどうにもよほど突いて欲しくないところらしい。

「授業中盤、おできを治す簡単な塗り薬を調合しただろう。あのとき、君の実力ならばもつと効率良く作れたはずだ」

「教科書と先生の説明の通りに作ったつもりなんだが」

「確かに、君は指導された工程を全くの淀み無く、狂い無く実行した」
「ああ。我ながらタイムロス無く鮮やかな手並みだったな」

同じくハーマイオニーも完璧に指示をこなしていたのだが、魔理沙の鍋の方を盗み見てはその進行の差に嫌な汗をかいていた。定規とにらめっこしながらイラクサを刻むのとフリーハンドの鼻歌交じりで等間隔にナイフを滑らせるのでは差が出るのは当然である。

グリフィンドール生たちが今にも「ミストウッドの手際は素晴らしい。スリザリンに10点」とスネイプの声がかかるのではないかとビクビクしていたほどの腕前だった。だが、だからこそ、スネイプは一点もやらなかったし、こうして疑問を持つに至ったのだ。

「しかし講義で扱ったのはそもそも薬匙の使い方もままならんような初心者向けの遠回りで慎重すぎる方法だ。材料の分量、刻み方、投入順序、どれをとっても他に上手いやり方が有る」

「私も初心者なんだけどな。さすがに薬匙の使い方は心得てるが」

応えながら、魔理沙はまた一つスコーンを手にとった。

「杖魔法云々はともかく、これまで会話した二、三度、どう見ても魔法薬の分野にはかなり詳しい様子だったと記憶している」

「詳しくないんだなくこれが」

「知らなかったのか？」とでも言うように人差し指を揺らした後、魔理

沙はググーつとノビをし、数秒かけて短くて上手い説明を探した。

「例えば、だ。マグルがおできの治療薬を作るとき、蛇の牙やらナメクジやらなんかは使わないよな」

「抗生物質だとかなんとか酸だとかの名が耳に入ることはあるな」

「そ。同じ地球の資源を与えられ、片や魔法使いは魔力と組み合わせることで魔法薬学を作り、片やマグルは分析に分析を重ねることで化学や非魔法の薬学を発展させたワケだ」

「同じように、今度は資源と魔力を前にして、我々是我々の魔法薬学を産み出し、君らは君らの魔法薬学に至った、と?」

「そういうことだな。だから道具や手際はいつちよまえだけど、蓋を開けてみればこっちじや魔法薬学素人つてワケだ。ビーカーやら試験管はマグルも使うし、たぶんマグルの薬師を連れて来ても私と同じような状況になると思うぜ。素材を活性化させる分の魔力さえなんとかすれば、の話だけど。……にしてもいちいち『あっち』『こっち』言うのめんどくさいな。私の方のを『魔化学』つて呼ぶことにするぜ」

そこまで言つて、魔理沙は口にスコーンのかけらを放り込んでグイツと紅茶を飲み干した。

「あえて自分の方に『化学』と入れたのは何故かね?」

「別に、なんとなくだが。敢えて理由をつけるとすれば魔法薬学と化学だったら化学の方に近いからかな」

スネイプはちよと妙な顔をして魔理沙を見やった。当人は時計に目を移して、それには気付いていないようだった。

「さて、ちょうど菓子も切れたし、おいとましますか」

「……そうするがいい。夕食の時間も近づいている」

帽子をバフツと被せてテーブルの上を片付けて、魔理沙は地下牢を後にする。背中に投げかけられた「夕食ではレイブンクローの机から距離を取った方がよからう」というアドバイスには苦笑いを返した。

いくつかの階段と廊下を抜け、やっとこさ地上階に出てきたちょうどその時。城にいくつかある出入り口のうち、森の方へと続く扉から入ってくる二つの人影が見えた。黒髪眼鏡と赤髪のつぽ、ハリーとロンド。

「よー、ハリーにロニー。どっか行ってたのか？」

「やあ、メリッサ」

「うん、ああ」

ロンはモゴモゴと返事した。相手がスリザリンということもあるし、それに『ロニー』という愛称で呼ばれたのがむず痒かった。ロンがまだ小さいときの 家族（特に母親）からの呼び名だったからだ。今でも双子の兄がロンをからかうときに偶に使うけれど。

「僕はハグリットのところでお茶してた帰りだよ。そっちは？ 地下から出てきたとこみたいだけど……」

「奇遇だな。私もお茶してたとこだ」

「地下牢で？」

「流石にそれはないよ。僕、兄さんたちから聞いたことがある。スリザリンの談話室はどうやら地下に有るらしいって。そっちだろ？」

「うんや、地下牢の、スネイプんとこだ」

「スネイプ!？」

ハリーはあまりの驚きで思わず跳び上がりそうになった。本当に少し跳び上がったかもしれない。メリッサとスネイプのアフタヌーンティーというのが全く想像できない。この活発そうな女の子と、あの見た目も性格も真つ黒で意地悪でイヤミったらしい中年男性が同じテーブルで紅茶を？

「嘘？ それホントに言ってるの？」

「こんな嘘言つてどうすんだよ」

「度胸自慢にはなると思うよ。そりやあもう……」

あの、どこから小言を投げつけてくるかわからない男を前にして呑気に紅茶なんて飲んでいられる自信は、少なくともロンには無い。メリッサはスリザリン生だから理不尽に減点することはないだろうけど、だからってニコニコしながら会話に相槌をうってくれるワケでもないはずだ。

「二人ともアイツを死神か何かと勘違いしてないか？ からかうと面白いだぜ？」

「ヒエ〜ッ」

今度は確かに跳び上がった。

「君とクイレルを混ぜたらちようど良いくらいになりそうだ」

「流石にアレを相殺できるほど肝が据わってる自負は無いな。それに、スネイプにはハリーも言い返してたじゃないか『ハーマイオニーが分かっていると違います』って」

「そのせいで一点減点されたけどね」

ハリーは肩をすぼめた。

「それでなんだけど、僕のことでは何か言ってなかったかい？」

「残念ながら期待してるような情報は出てないな」

「じゃあ、今度それとなく探ってみてくれないかな」

「いや訊いてみたことは訊いてみたんだ。でも『グリフィンドールはハリー・ポッターを取ったと調子付いているからその牽制だ』ってな。それが本当だとは思わないが、向こうはこの言い訳で押し切ってくるだろうぜ。真意を探るにはハリーの話は一切出さずにハリーを目の敵にしてる理由を引き出すことになる。これ、かなり難しくくないか？」

「そうだね……」と、ハリーはため息をついた。スネイプはどう見たっ
て自分を憎んでいるようだった。でも、あのハグリットでさえ「そんなワケない」と頑なに何かを隠そうとしている様子だ。身に覚えのない称賛の的にされるのに慣れてきたら今度は身に覚えのない敵意をぶつけられるハメになるとは。

「ま、分かるまでは『有名人はつらいな』とでも思ったりやいいさ。『あ見えて有名人に嫉妬しちゃうタイプなんだ』ってな」

「そんな理由で点数引かれちゃあ、それはそれで腹が立つけどね」

「それも気にすることないんじゃないか？ グリフィンドール生にとつて、英雄がスネイプに踏んづけられて頭下げてるのとたかだか一点二点引かれるのとどっちが嫌だと思う？ 好きなだけ言い返していいだろ」

その方が見てるこっちが面白い。授業の後にスネイプにインタビューして二倍面白い。

「英雄の自覚なんて無いんだけどな」

「無いなら無いでいいのさ。」ただのハリー」が、散々迷惑かけてくれた”ハリー・ポッター”を好きにだけ利用してやれ」

「ま、私の見立てじゃお前は本物だがな」と、魔理沙は心の中で付け足した。

「そう言つてグリフィンドールの点数を下げさせるつもりじゃないでしょうね？」

その時後ろからハーマイオニーが（いつも彼女がそうするように）会話に割り込んできた。ロンは露骨に顔を顰めた。少しお調子者な方の性格であるために、ハーマイオニーの説教がましい態度は人一倍苦手なのだ。

「おできの薬のできで負けたからって悔しいのは分かるけど、流石に言いがかりが——」

「ばれちまつたか」

「なッ……」

「そんな雨の日に捨てられた犬みたいな顔すんなって。冗談だよ。じゃな」

ニシシと笑いながら軽く手を振って、そのまま大広間へ行ってしまった。

「あの子、気を付けた方が良いわよ」

「そりゃスリザリンだから油断できないけど、少なくともスネイプや他のスリザリン生よりはかなり付き合やすいよ」

「ついでに君よりもね」という言葉はさすがに飲み込んだ。ムキにさせたら面倒だ。ハーマイオニーも「油断しきつてたように見えるけど」というセリフは省略して返した。

「そのスネイプ先生ととっても仲良しよ、あの子。ダイアゴン横丁にも二人で居たわ。これを聞いてどう思うかはそっちの勝手だけどね」

ロンは口の中で呻いた。何か言い返したいが、事実メリッサについてよく知らない。それに、ハーマイオニーに何か言い返したいがためだけにスリザリン生を弁護するのもよく分からない。仮にその理由をひねり出したとしても「何？ あの子のこと好きなの？」とでも言われたら……。

一方ハーマイオニーはロンの次の言葉が出てこないらしいことに満足して話を切り上げた。

「私たちも早く行きましょう。夕食が始まっちゃうわ」

” 私たち” ねえ……」

癪だが、ワザワザ別れるために大回りするのも子供っぽすぎる。ロンはせめてもの抵抗でハーマイオニーから少し後を歩き始めた。

二人に遅れないようについて歩きながら、ハリーはまた別のことを考えていた。「ハリーがハリー・ポッターを利用する」……その詳しい意味は完全には分からないけれど、何か惹きつけられる響きだ。

十二話 初めの一月の最後の夜の決闘の前の昼から夕方

慣れ親しんだ環境というものは、なんだかんだと不満を言ってもやはり懐かしいものである。引越して一週程度の間は新しい環境に興奮していても、二週三週とたてば、恋しいとまでは行かずともふと前の家の玄関が脳裏に浮かぶことだろう。よっぽど劣悪な環境だったならこの例に漏れるかもしれないが、少なくとも魔理沙はそれなりに以前の暮らしを気に入っていた。ならば、遠く我が家の森を懐かしんで深い緑に誘われるのも致し方ない――

「――そういうわけで多めに見てくれないか」

魔理沙は一通り言い訳を並べ、同意を促すように目の前に鎮座するヒゲモジヤの大男と目を合わせた。

「ホームシックでどうにもならんかったつちゅーんなら、もうちーとばかりし心細そうにしてもええと思うんだが」

しかしハグリットはそれには応じず、探るように見返した。

まるでいつもの散歩コースを歩くような気軽な足取りで森に入ろうとしているところに声をかけたのが数分前。「いや、これにはよんどころない事情が有ってだな……」なんて言い出したから小屋に招いて話を聞いてみたが、失敗だったと後悔した。メリッサの口から出てきた言い訳はどう見ても嘘だし、おまけに初めからここに來ることが目的だったかのような順応っぷりを見せられた。ボアハウンドのフアングが番犬らしからぬ人懐っこさなのはいつものことだが、そのよだれを一滴も服に垂らさせることなくあしらう客人は稀だ。

「美味そうなハムだな。何の肉だ？」

そんな大男の懐疑の表情など気にもならないと言う風に、魔法で淡く光らせた杖先でフアングを戯らしながら、魔理沙は部屋を見回した。天井に吊るされた雉や兎、干し肉に香草の類、それと使い込まれた焚き火台（正式には暖炉なのだろうが、ただの暖炉と言うにはかなり巨大だった）を見ると、もう火に炙られた肉からあぶらが滴って

ジユウツという音を立てる光景を想像せずにはいられない。一気に腹が空いてくる気がする。ベッドも暖かそうだし、他にも年季の入った雑貨類……欲しいものが欲しい時に手元に有る部屋という印象だ。ドラコはバカにしていたが、案外良い生活をしているのかもしれない。「やっぱり住むなら木造の暖色でまとめられた部屋がいいよなあ」と、魔理沙はスリザリン寮の寒々しさに嘆息した。

「——ともかく、もう勝手に森に入ろうとするんじゃないぞ。今回は未遂つちゅーこともあるし、見逃してやるから」

数十分後。ハグリットはいつの間にか始まっていた家具談義を切り上げ、魔理沙を帰らせた。まったく、余計な話をし過ぎた。ああいう手合いは、ウィーズリーの双子もそうだが、友達感覚で規則もなにも”なあなあ”にしてくるから困る。そして自分がそういうのに流されやすいから余計に厄介だ。何度教師連中から「ハグリットはすぐ生徒の口車に乗せられる」とお小言を貰ったことだろうか。ともかく、あのメリツサという生徒は、面白いのは面白いが仕事のことを考えると相性が悪い。あまり顔を合わせたくない相手だった。

そんなハグリットの願望とは裏腹に、魔理沙と対面する機会はちよくちよくあった。「罰則の一つに森でハグリットの手伝いをするつてのが有るつて聞いたんだが」という不穏な問いには「退学チキンレースで上手く行きやあそんな仕置きもあるかもしれん」とだけ答えた。そんな九月の終わりごろ。

《飛行訓練は今週末曜日に始まります。スリザリンとグリフィンドールとの合同授業です》

いよいよ飛行訓練の連絡が掲示板に張り付けられた。寮や食堂ではクイディッチや箒の銘柄の話が飛び交い、ドラコの自慢話がリピート再生されていた。同じようにリピート再生されていたのはハーマイオニーの蘊蓄で、クイディッチの本で見た飛行のコツを壊れた蛇口のように垂れ流した。ネビルは拝むように聞き入っていたが、果たして効果が有るかどうか。注意を聞いたうえで、その注意で取り上げもしなかった初歩に躓くのがネビル。スネイプですら「あまりにも突拍

子もないミスをするために、出来が悪い生徒だとか腹が立つとかと言うより恐ろしさが前に来る」と愚痴っていた。一度も箒に触れさせなかったというネビルの婆さんの判断は正しいだろうという意見は魔理沙とハリーで共通のものだ。まして上級生が言うには備品の箒はそれぞれに酷いクセがあるという。意地悪とかではなくネビルの安全のために、飛行訓練は見学させておくべきだろう。

また、同じく魔法の箒に乗ったことが無いと言う生徒が、意外なことにスリザリンにも居た。なんと生粋の魔法族で魔法文化にどっぷり浸かって育ったはずのダフネだ（それを言うならネビルもそうなのだが）。

「ネビルみたいに鈍臭いようにや見えないけど、なんでまた？」

「お父様が東方から取り寄せた絨毯にすっかり夢中になっていらして。まあ、優美で肌触りが良くてしかも寝ていても飛べる絨毯の方がずっと優れているというのは私も思っていることですよ。お母さまはじめは反対なさっていたけれど、すぐに箒の『ほ』の字も言わなくなりましたもの」

「なんてことだ！」

横で聞いていたドラコが嘆いた。

「箒で飛ぶ素晴らしさが分からないなんて！ 箒の方が速いし、ターンもスピンも自由自在だ。それに、ヨーロツパの魔法使いはずーっと昔から箒に乗るものだよ。まさかグリーングラス家はイギリス魔法族の誇りを無くしてしまったのかい？」

魔理沙があつと思つた時にはダフネの目尻がつり上がっていた。基本温厚だから目立たないが、ダフネも相当家柄にこだわるタチらしい。一月の間ルームメイトとして過ごして分かったことだ。ダフネがマグル生まれにも寛容なのは「わざわざ歯牙にかけるのがバカらしい」と評価しているからしかなかった。そんなダフネが「魔法族の誇りを無くした」なんて言われれば、それが逆鱗となる可能性は十分に有るはずだ。

「競技者でもないかぎりそれほど際立った速度も機動性も必要有りませんわ。それに、誇り云々とおっしゃるならば、箒こそマグルをつけ

上がらせる魔法隠蔽文化の象徴のようなものではありませんか。魔法使いたちが箒に魔法をかけるようになった理由は、よりにもよってマグルなんかの目を恐れたからですよ」

「それはいくつかある理由のたった一つさ。絨毯よりハンディーだし、場合によっては巨大な杖を内蔵していたことも有る。……それに、思い出した！ イギリスでは空飛ぶ絨毯は法律で禁止されてる！」

ドラコは勝ち誇り、ダフネは一瞬イタズラが見つかった子供のような表情になったが、またすぐに語勢を強く反論した。

「その法が、箒製作会社らの利権を守るためだけの悪法だと言うのです。たしか《絨毯はマグルの製品と定義されるため、使用目的で魔法をかけた魔法がかけられたものを所持することを禁ずる》でしたかしら。これが向こうの魔法族に周知されれば外交問題にもなりかねませんわよ。そもそも、貴族は法を振じり潰すものでしょう。貴方もご存知ないワケではありませんよね？」

なんかサラツととんでもない発言が有ったようだが、どっこい魔理沙に魔法界のしきたりは分からない。しかし確実に言えるのは、現にダフネが「空飛ぶ絨毯が違法だ」ということを忘れて口を滑らせる程度には好き勝手やれているらしいということ。ますますもって貴族というのは便利な肩書だ。

「……メリッサ、君も箒好きだったよね。何か言ってやってくれ」

「私はここで空飛ぶ靴を提案してみるぜ」

「靴は左右の性能を合わせるのが難しいからって流行らなかつたみたいよ。ちなみに私は箒派ね」

パンジーが通り過ぎざまに言った。どうせならもう少し靴の話題を広げる方の言葉で論点をずらして欲しかったが、次の授業のためにそんな暇も無いらしい。というか、自分たちもその授業……件の飛行訓練に行かなければならない。

「……ああ、まあ、私も箒の方に馴染みが有るが、絨毯も良いもんだろ。それは人それぞれ、もつと言うと意見が対立して口論になるのも結構だが、魔法族の誇りどうこうを持ちだしたのは明らかかなミスだと思う

ぞ、ドラコ」

ドラコは一瞬「僕が謝らなきゃならないのかい？」と不満げな顔をした後、なんとか思い直して頭を下げた。ダフネの方は……「家に文句をつけられたから怒ったんだろうしそれを謝れば良からう」という魔理沙の予想は半分ハズレで純粋にまだまだ絨毯の優位性を説きたい心情も有ったのだが、理由はどうあれ謝罪されて尚引きずるのは幼稚だとも思い、(結果的に)絨毯と比べて箒をけなすことを止めた。

そんなめんどくさい小競り合いとは反対に。外に出てみると爽やかな青空が広がり、秋の気配を感じさせる風がそよそよと髪を揺らした。ドラコは箒日和だと喜んだ。嘘か本当か、少しくらい風が有る方が空中で複雑な動きをしても方向感覚を失いにくいのだという。

授業で使われる箒は、傾斜のある校舎近くを避けて少し歩いたところの平坦な芝生に並べられていた。なんてことはない、魔理沙にはよくある箒にしか見えなかったが、ドラコは『箒日和』もどこへやら、露骨なため息を吐いた。

「そうだった、ホグワーツの備品は『シユータイング・スター』の、しかもおんぼろなんだ」

何がそんなに憎いのか、心からの侮蔑の滲む視線を向ける。

魔理沙も箒に関する本でその名は見たことがあった。元々の性能からして、今売り出されてるどの競技用箒と比べても目劣りすると。しかも製造から時間が経てば最高速度も最高高度も極端に落ちる。10年もすれば19世紀の家庭用箒にも劣るなんて話もある程だ。競技用箒の最高速度が100km/hを超えたのも定点旋回機能を得たのも20世紀になつてからだというから、競技用ですらない19世紀の箒と比較されるということがどれほどの悪評かは言うまでもない。そして、とどめにこの箒を作っていた会社は20年も前に倒産しているという。ここに並んでいる箒たちはどうあがいても20年以上前の製品なのだ。

「(愁傷さまだな」

「誤作動で事故でも起きたらどうするつもりなのでしょうか……」

箒のポンコツ具合は多少知識のある者には一目で分かるようで、あ

とからやって来たグリフィンドル生たちも顔をしかめていた。もつとも、箒の質が良からうがスリザリンとの合同授業というだけで顔に皺が寄る生徒も少なくはないが。

そうして最後に、道に迷っていたらしいネビルを連れてマダム・フーチがやってきた。新入生歓迎会で見かけた、白髪金目の魔女だ。「ボヤボヤしてないで、箒のそばに並びなさい」

マダム・フーチは「さあ早く」と急かした。元々せっかちなのは顔に出ているが、今はどうやらネビルのせいで授業開始時刻が遅れ気味なのを気にして余計に急いているようだ。

「さあ、皆さん、それぞれ箒一本手元にありますね。不足はありませんか？ では、右手を箒の上に突き出して」

皆の心の準備ができていない内に、マダム・フーチは次々と指示を出した。グリフィンドルの後ろ半分は自分の箒の右側に立っていたために並び直す必要があった。

「箒の上に手を出せましたね？ では、『上がれ！』と言いなさい」
バヒユンツと鋭い風切り音がした。驚いて皆が見上げた先には、高速回転しながら上空にすっ飛んでいく一本の箒があった。いつぞやの杖のように魔理沙の箒が逃走したのだ。

「インカーセラスー」

しかし、マダム・フーチが「何をやっているんです！」と大股で近付いてくるころには魔理沙も対策を講じていた。長い杖の先から、これまた長い長いロープが噴水のように飛び出して箒を捉える。しかしこれではただロープごと持っていかれるだけなので、元々使える魔法……魔物理（今名付けた）で箒を抑え込んだ。

「全く、私は『上がれと言うように』としか言っていないですよ？」

「おかしなイタズラを仕掛けたと思ってるんなら勘違いも甚だしいぜ。私も『上がれ』としか言っていないぞ。悪いのはコイツだ」

箒は釣り上げられた大魚よろしく魔理沙の両腕から逃れようと暴れている。

「かしなさい」と、マダム・フーチが取り上げた。すると箒は幾分か大人しくなった。

「ふむ、新しい使い手に対して箒の調子がおかしくなるといのはま
ま有ることです。少ししたら落ち着くでしょう。が、この後の授業
中、どうしてもダメなようなら言いなさい」

そうして最後に「流石に箒の買い替えを校長に本気で進言する時期
かもしれませんねえ」と呟くのが聞こえた。そのせいかは分からない
が、魔理沙の手に戻っても箒は意気消沈したかのように静かだった。

魔理沙がアクシデントに見舞われているうちにだいたい生徒が
箒を手持っていた。何人かは『上がれ』を諦めて自分で拾い上げて
いたけれども、まあ、些事だろう。ともかくマダム・フーチは次に箒
の跨り方握り方の話を始めた。

箒の重心より少し穂の側に尻を据えた方が良いとかあまり真つ
すぐ上から掴むように持つと引き上げ動作や前傾姿勢が取りにくい
ため避けるようにだとかの指示を一通り済ませ、次にマダム・フーチ
は生徒の列を縫うように歩き回りながら細かいアドバイスをした。
これが相当に時間を喰う。魔理沙がもしかして今日の授業では足が
地面に着きっぱなしなのかと心配したほどだ。箒に疎い生徒はやっ
ぱり修正箇所が山盛りだし、逆に箒好きな生徒は妙なクセが有った。
「ウィーズリー、右手と左手が開き過ぎです」

「え、でもトロイはこうやって……」
「彼のように片手だけで20回連続懸垂できるならそれで構いません
よ」

ウィーズリー家が嫌いだと常々言っていたドラコはこれ見よがし
にクスクス笑った。しかしそれが癪に障ったのはロンだけではな
かったらしい。マダム・フーチがすぐ目の前に来た。

「他の人を嗤うのですから当然よくできるのでしょね、マルフォイ。
そう言えば、私が説明しているときもよく聞いていないようでした
が。ま、見せてもらいましょう」

ドラコは自信満々だった。このいけ好かない女教師はなんとかし
て揚げ足を取ろうとしているんだろうが、この僕が今更箒の持ち方な
んかで躓くはずがない、と。

「マルフォイ、利き手は？」

「? ……右ですけど」

「なら今の持ち方ではロールに問題が出ますね。後々スプリットSとインメルマンターンが出来ずに悩むことになるでしょう。手の角度はむしろ今と左右逆の方が良い」

実際ドラコはロールに苦手意識があり、何も言えなかった。今度はロンが大喜びしている。

マダム・フーチはさらにすぐ隣に居た魔理沙に声をかけた。

「ミストウツド、箒は大丈夫ですか?」

「ああ、嘘みたいに静かだぜ。良かった良かった。まったく、股の下で震えられちゃたまったもんじゃやないからな」

「そうでしょうね。あと、貴女はもう少し前に座った方が良いでしょう」
「おう分かった」

その後もマダム・フーチは次々に生徒たちの姿勢を直していき、結局初めからちゃんとできていたのはハリーただ一人だった。

「さあ、私が笛を吹いたら、地面を強く蹴ってください。箒はぐらつかないように押さえ、二メートルぐらい浮上して、それから少し前屈みになってすぐに降りてきてください。笛を吹いたらですよ。一、二の――」

いつか起こるだろうと思っていたことがやはり起こった。何を思ったか、マダム・フーチの口が笛に触れる前にネビルは天高く飛び上がったのだ。「こら、戻って来なさい!」とマダム・フーチが怒鳴るものの、既にネビルはパニック状態。箒はグラグラと揺れ、本人も手足を滅茶苦茶に振り回し、やがて、投げ出された。

浮遊魔法をかけようと構えた魔理沙の横を、何かが高速で通り抜けた。ハリーがネビルの落下点に突っ込んで行く。地面まであと一メートルも無いかというところでキャッチ。グリンツと一回二回大きくロールし、そのまま滑るように着地した。

「大丈夫ですか!? ポッター、ロングボトム!」

マダム・フーチが杖をしまいながら駆け寄った。ハリーは大丈夫なワケが無いと主張するように「ネビルが!」と叫んだ。ネビルはいつもの子豚のような血色の良さからは想像もできない青白い顔色で、お

まげに白目をむいている。

「気絶しているだけのようです。大方、遠心力に耐えられなかったのでしょう」

マダム・フーチは脈を取って言った。

「医務室に行きましょう。ポッター、あなたもです。自分の体重以上のものを受け止めるのは想像以上に負担がかかるものです」

最後に、他の生徒に”大人しく”待機するようお願いし、ネビルを抱えて校舎の方へ。ハリーはその後ろをついて行った。

その背中を見送って、振り向くとドラコがネビルの顔マネをしていた。魔理沙は思わず嘔き出した。

「見たかい？ あの人間抜けの顔を。まったく、僕も医務室に行くべきかもしれないよ。あと1月は思い出し笑いで苦しみそうだ」

「そんだけ危険って分かってるならなんで顔マネした」

他のスリザリン生たちも好き勝手にこき下ろし始めた。魔理沙は帽子の端を下げて顔を隠すも笑いは背中に現れて、全く隠しきれない。

「そういうのはちよつと悪趣味だと思っわ、メリッサ」と、仮にも寮の仲間を（こともあろうかスリザリンに）笑いものにされて不機嫌なグリフィンボール生の群れからパーバティが歩み出た。

「ハリーが助けてなかったら死んじやってたかもしれないのよ？」

「初筈で落下死したらそれこそ蛙チョコのカードにされそうなものだけど」

パンジーが即座に言い返した。

「ああ、そう言やあのカードは人死にも容赦なくネタにしてくるな」

魔理沙は《怖がりのフルバート》を思い出して苦笑いした。無論、真面目に取り合っていない様子を見てパーバティの機嫌は一層悪くなる。怒らせた肩から今にもビンタが飛んできそうさ。

「まあ待って。あの時、フーチが杖を抜いてたろ。ハリーが出なきゃそっちで対処してただろうさ。私も浮遊魔法をかけるところだったし。も一つ言うと、グレンジャー、お前も何かしようとしてたろ」

グレンジャーはそっぽを向いて何も言わず、魔理沙は「嫌われたも

んだな」と内心ため息をついた。

ちなみに、マダム・フーチもハーマイオニーも、杖は抜いたものの咄嗟のことで判断が追いついておらず、ハリーが飛んでいなければやはり魔理沙が最後の砦だった。またもや半分ハズレである。ハーマイオニーは本当は出来なかったことを評価されてきまりが悪かったのだ。

「……それは分かったけど、でも、同じ寮の仲間が笑われて良い気はしないわ」

「すっかりグリフィンドール寮生だな、パーバティ。それと言つとくが、私はスリザリン生が”ああ”なつても笑うぞ」

「……どうして僕の方を見るんだい？」

「いや、あれだけ大口叩いて大失敗してたら大笑いできたろうなと思つて」

「僕は全然笑えないけどね」

結局、マダム・フーチが戻つて来たころには授業時間は終わりがけで、ちよつと浮く練習をしただけで一回目の飛行訓練は終わってしまった。しかも魔理沙の箒はパワー切れなのかフラフラと頼りなく……あまり有意義な授業だとは言えないというのが率直な感想だった。

「マダム・ポンフリーは良い人だけど、でもちよつと大げさ過ぎる」

その日の夕食時、グレイビーソースとハーブの香りを掻き消す強烈な湿布薬の臭いをプンプン漂わせながらハリーは愚痴をこぼした。

「まあ当人は平気な疲労に限って後を引くもんだ。怪我の予防だと思つて、湿布くらい我慢しとけつて」

「なんでスリザリン生が”こつち”に居るんですかねえ？」

「おいおい汽車からの仲だろマイブラザー・ロニー。寮が分かれたからつてそう睨まなくたっていいじゃないか」

ロンの呟きに、魔理沙は気味が悪いほど爽やかな笑顔で返した。「汽車からの仲つてたつた一か月前の二言三言じゃないか」とは言わせない威圧感だ。「それに今日のMVPにちよつと話しかけに来ただ

けだろ？ 我が物顔でどっさり席を占領してメインディシユのフライドチキンを横取りしたワケじゃないんだぜ」と、魔理沙はハリーとロンの椅子を半分ずつ使って座り、皿からスコッチエッグを一つ取りながら続けた。

MVPというのはもちろんハリーのことだ。一年生離れした飛行能力で友人を救ったとしてグリフィンドールに15点も入った。今は静かなものだが、加点とその理由の情報が広まれば、ハリーの元々の話題性も手伝ってちよつとしたお祭り騒ぎになりそうだ。

「ハリー、ハリーは居るかい？」

と、丁度噂を聞きつけた上級生が一人やって来た。

「ああ、ここに居たかハリー。ん？ スリザリン生がなんでグリフィンドールの机に？」

「大した理由じゃないから気にすんなって」

「ああ、まあ、そうだな。大したことじゃない。それよりも何よりも、ハリー、素晴らしい飛行技術を持つてるらしいじゃないか」

「ええつと……う？」

「ああ、僕はオリバー・ウッド。グリフィンドールクイッツチームのキーパーでキャプテンだ。それで、聞いたところによると、君は自分より太った生徒が落下するのを、その落下軌道に対して垂直に突っ込んで、且つ高度を下げずロールだけで勢いを殺してキャッチしたらしいね？ しかも初めての飛行訓練の授業中に」

握手した手を離さないまま話しまくるオリバーに、ハリーは曖昧な領きを返した。あの時はどう動くかなんて殆ど意識していなかったから、垂直がどうたらとか高度がなんとらとか言われてもピンと来ない。そう言われればそんなことをしたような気がするというだけだ。

しかし、そんなハリーをよそにオリバーは大興奮している。

「そうかそうか、素晴らしい。瞬発力にバランス感覚、箒のコントロール、瞬間的な筋力、どれもバッチリってワケだ！ どのポジションもイケるけど……やっぱリシーカーだな」

「もしかしてハリーをクイッツチームに入れる腹積もりか？」

「そうだともし！ こんな逸材を一年も放っておけない。才能つてもの

は常に相応のポジションとセットであるべきだ」

「でも一年生はチームに入れない規則なんじゃ……シーカーはウチの兄さんたちのイタズラみたいに隠せやしないでしょ」

「マクゴナガル先生に頼もう。寮監の先生が協力してくだされれば、多少の規則は曲がるのさ。いつもはつまらない小事でスリザリンがやってることだが、今回はグリフィンボールが派手にやってやる」

「マクゴナガル先生が規則を曲げるかなあ……」

あの厳格そうな……実際厳格なところを何度も見せた先生が、規則を曲げるとはハリーには到底思えない。「ダメです」という声が今にも聞こえてきそうさ。

「マクゴナガル先生も規則を守る機械じゃない。あれでけっこう融通が利く。特に、クイディッチに関しては相当情熱的なんだ。機嫌のいい時を見計らっていけば、きつと通る。早ければ来週月曜にも練習に呼ぶかもしれないから予定は開けていてくれよ」

そう言っただけは意気揚々と去っていった。ハリーはまだ了承していないのだが、断られるかもしれないなんて全く思っていないらしい。

「で、どうするんだ？」

「どうするもなにも参加するしかないよハリー。こんなチャンス……もしマクゴナガル先生が許したら最年少選手だ」

「うん、僕もそうしようかと思ってる。飛ぶのとは相性良いみたいだし」

魔理沙がシーカーってのは花形であると同時に真っ先にボールをぶつけられるポジションらしいと忠告しておこうかと思っただけ、また別の影が近付いてきた。魔理沙の方に用が有る人物だ。

「メリッサ、なんでこんなところに居るんだい？」

ドラコ……今度は「大した理由じゃないから気にすんな」じゃ済まない相手。しかし、魔理沙がでまかせを練る前にロンが答えた。

「今はハリーと話したいみたいだ。スリザリン生よりね」

余計なことを。

「メリッサ、ハリー・ポッターに興味があるのは分かるけど、その隣の

赤ネズミがいない時に話しかけた方が良いと思うよ。貧乏が移る」

「お金持ちでお優しいパパとママを持った”お坊ちやま”が言うことは立派ですねー。クツションまみれでたっぷり甘やかされて育ったからさすが上品ですこと。……だからいつも女の子のあとをついて回って、ついでにその後ろを二人のお友達に守ってもらわないと落ち着かないんだ」

「僕は僕一人でも実力があるけど？ それは授業の成績で証明済みだ。上から数えた方がだいぶ早い。でも、君はさして成績が良くないようだし……立派にハリー・ポッターの腰巾着やつてる。ウィーズリー、ハリー・ポッターが結果を残して、君がその隣に見切れてても、君のことを覚えてる奴なんて一人も居ないぞ」

「そんな、スリザリンみたいな卑怯な気持ちでハリーの友達やつてるワケじゃないよ」

「口じゃなんとでも言えるさ」

「なら決闘でもするか？」

つまらんことになったとでも言いたげだった魔理沙の瞳が一転輝いた。

「君みたいな卑怯者じゃあ受けちゃくれないのは分かってるけど」

「当然受けようじゃないか。今夜にだっていい。介添人は……」

ドラコは一瞬魔理沙の方を見たが、何やら思い直したように視線を逸らした。

「そうだな、クラブだ。そっちは？」

「ハリー、頼むよ」

「ええ……？」

「ウィーズリー、言っとくけど君が倒れるまで介添人は手出しできないからね？ ハリー・ポッターを連れて来てもその助けが受けられるワケじゃない」

「当たり前だ」

「時間は、誰にも見つからない真夜中。トロフィー室にしよう。スリザリンの上級生の話じゃ、その時間、トロフィー室の辺りはフィルチが来ないらしい」

声を落として時間と場所を指定した後、ドラコは魔理沙を連れてスリザリンの席に帰っていった。

ハリーは心底困惑した。何か突然自分をダシに喧嘩されたあげくカイズエニンとかいう初めて聞く役割に任命された。友達を馬鹿にされて、ドラコに腹が立ってもいるのだが……。

「ロン、カイズエニンって何？」

少なくともクイディッチチームのシーカーほど素敵な役じゃないのは確かだ。

「僕が死んだら君が代わりに戦うのさ」

予想以上にロクでもなかった。

十三話 初めの一月の最後の方の夜の決闘は無かった

「なんだよ、つつつつまんねーの！」

デイナーが終わって、談話室。

夜中の決闘の本当の計画を聞き、魔理沙は思いつきり不満を吐いた。

ドラコが指定した”真夜中のトロフィー室”……ここにフィルチが来ないらしいというのは真つ赤な嘘である。本来はその逆。フィルチとその飼い猫のミス・ノリスの巡回ルートで、まさに真夜中に当たるのがトロフィー室付近なのだ。

「全然つまらなくないさ。飛行訓練で上がったハリー・ポッターの評判が次の日に突然落ちるのも見ものだし、もしかしたらあの赤毛を追い出せるかもしれないんだよ」

夜間徘徊が他の非行につながりやすいためか、その罰則は重いものになりやすい。数十点単位の減点から、悪ければ退校まで。ドラコ自身も上級生たちから夜出歩くならよく注意するように言われている。それを、ロンに挑発されたときにふと思いつ出したのだ。

「私は評判もウィーズリーもどうでも良くて、魔法使いの決闘を見てみたかったんだがなあ。それに、アイツらがお前に嵌められたことに気付いたら、今度はお前が不名誉を被るんじゃないか？ 決闘から逃げたことになるんだし」

それに直接やり合えば、方向性はどうあれスッキリした関係になるものだ。そういう意味でも、魔理沙はドラコとロンの決闘に賛成だったのだが……。

「待ってください先生！ 僕たちマルフォイに決闘を申し込まれて来たんです！ マルフォイも悪いんです！」って？ 僕はこう言うさ『確かに言い合いのはずみでそんなことも言いました。でも、まさか、本当に夜中に出歩くバカがいるなんて！』

ドラコは心底嬉しそうに独り芝居をした。ドラコの中では、もう

ウィーズリーは破滅したもののようだ。

「そりゃ教授や管理人に見つかったらそうだろうが、私が気にしてるのは無事、何事も無く寮に帰って来れたときの話だ」

「それは無いと思うよ。夜の城を好きに歩けるのはスリザリン生だけだ」

ドラコは完全に高を括っていた。

まず、城の管理人であるフィルチは隠し通路にメチャクチャ詳しくて殆ど神出鬼没だ。おまけにその飼猫のミセス・ノリス。猫だから小さくて気付きにくいし、足音も気配も殆ど無い。そのくせ変に頭が良くて校則違反を見つけたらフィルチに知らせるといふ。そして、夜中と言えど何かの用事が有れば教授たちだって廊下を歩き来する。極めつけに、ポルターガイストのピーブズは本当の神出鬼没だった。壁を抜けるし行動が読めないし最悪なことに人を困らせるのが大好きなもので、生徒の隠し事……この場合なら夜間徘徊を見つけたらフィルチに言いつけるに違いない(普段はフィルチも教授もおかまになしに悪戯をしているくせに)。

フィルチと猫の対処は過去の膨大なデータから行動範囲を予測できるスリザリン生でないと難しい。夜出歩いている教授というのはだいたいスネイプである。そして、やりたい放題のピーブズが言うことを訊く稀有な存在が、スリザリン寮のゴーストである血みどろ男爵なのだ(ゴーストと言えば、当然夜中には他のゴーストも徘徊しているが、ほとんどは校則なんかには興味が無く考慮に入らない)。そういうワケで、夜中出歩くのは基本的にスリザリン生だけだった。

「やれやれ。兎を獲る前から兎シチューによだれを垂らしてやがる」
「いやに向こうの肩を持つじゃないか。……もしかして何かしたのかい?」

ドラコは苛立ちと不安に目を細めた。メリッサは“こつち側”のはずなのに、さつきから反対のことばかり言う。

しかし、当の本人はそんな疑念など軽く一笑に付した。

「あつはつは、それは無い無い。私なんかさつきまで観戦する気満々だったんだぜ? ……ただな、世の中にはたまくに”持つてる”ヤツ

が居るもんなんだよ」

ドラコはまだ不機嫌だ。「僕は、持ってない」とでも？」というセリフが喉まで出かかった。しかし口を開く前に「どっちにしる明日になったら分かることだ」と肩を叩かれて、その話は終わりになってしまった。

翌朝、朝食の席。

グリフィンボールのテーブルには今までと変わらずハリーとロンの姿が有った。一つ違うところを挙げるとすれば、いつものように朝の眠気にボーっとしながら目玉焼きをつつくのではなく何か興奮した様子で話し合っているところだろうか。

「何話してんだろうな？ 送還の段取りじゃなさそうだが」

二人の上機嫌に綻んだ口角を見れば、少なくとも何か良いことがあったことは明白だ。そして反対に、ドラコはギツと歯噛みした。メリッサの言葉でケチが付いていたとはいえ、ベッドから這い出たときはまるでクリスマス朝のような気分だったのに。

「君の言った通り、僕が卑怯だって言いふらす口実ができて嬉しいんだろう」

大きく一つため息をついた後、ドラコはまさに苦虫を噛み潰して呑み込んだような表情を魔理沙に向けて、負けを認めた。

「どうしたんですの？」

「ドラコがちよっとハマやらかしたのさ」

「いや、計画は素晴らしかったはずだ。もしかして、ハリー・ポッターが英雄だからって先生がもみ消したんじゃない……」

「さあどうでしょうねえ。ただ、個人的には、勝てる決闘を放り出したのは下策だったと思うぜ。ま、悔いても仕方ないだろ。どう取り返すか考えようじゃないか」

そして今日は金曜日。魔法薬学の授業の前、ハリーたちと話す機会が訪れた。魔理沙が無理に話しかけに行っただけという方が正しいかもしれないが。

「よう、二人とも。昨日は大丈夫だったか？」

「ああ、おかげさまでね」

ロンが皮肉っぽく、しかし勝ち誇ったように答えた。魔理沙もグルで嵌めたと思っっているのだ。しかし、魔理沙は敢えて、何の心当たりも無く皮肉に気付いてすらいないという様子で話し続けた。

「そりや良かった。何かルートが違ったらしくてさ、ドラコのやつが見つかりそうになって途中で帰ってきたって言うもんでな」

「ふーん」

全く信じていないのは何も言わずとも分かる（実際嘘だし）。その上「マルフォイの坊ちゃん」は決闘に来ないばかりか言い訳まで女の子にしてもらうんだねえ！」と、少し離れたところに居るドラコが聞こえるように大声で罵った。逃げた後ろめたさが有ると言ったって、これに我慢できるほどドラコの堪忍袋の緒は強くない。ツカツカという足音と共に、煽り合いに参戦することとなった。

事前に想定した（非常にシンプルな）シナリオ通りだ。魔理沙はまた口喧嘩して、また決闘の約束をし直せばいいと考えた。

「フン、初めから結果が分かっている無価値な決闘だったからね。フィルチの動きがおかしいと分かったときに、ワザワザ危ない橋を渡るのはバカだと思っ直したのさ」

「フィルチなんて逃げ切れればなんにも問題にならないね。僕たちはそうした」

ロンはドラコを見下して胸を張った。

「アイツに見つかって追い回されたのか？」

「見つかりそうになったけど、顔が見られる前になんとか逃げたんだよ。それより、本当にマルフォイが僕らを嵌めようとしたんじゃないの？」

「私はその時間寝てたからな。当事者に訊くしかないさ」

ハリーは、魔理沙がワザとはぐらかしているように感じた。ドラコの味方をしているからなのか面倒な話に関わりたくないからなのかは分からないが、さっさと”次の話”に移りたがっているようだった。

「どつちにしろ、君は僕らか、そうじやなきやフィルチに怖気づいたんだ」

「誰が怖気づくもんか！」

「實際来なかったしねえ」

「言い合ってないで今日やり直そうぜ。昼頃校庭でも。下手に夜中にするから悪いんだ。誰かに見つかったら、『呪文の練習です』とでも言やあ良い」

魔理沙はニツと笑った。

「ドラコもロニーも、自信が有るなら断る理由なんか無いよな？」

ドラコは二つ返事でYes。なんだかまた嵌められている気がしないでもないが、こう言われてはロンも受けるしかない。「もちろんさ」と息巻いた。

「あなたたち、あんなことがあったのにまだ決闘なんて下らないことをするつもりなの？」

「下らないと思ってるんなら関わってくるなよ。優等生ちゃん」

「マグルの社会じゃ盗み聞きは下品だとも教えないのかい？」

再決闘については多少考えた様子のロンだったが、この声には反射的に反抗するようになっていっているらしい。ドラコもすかさず追い打ちをかけた。

肩を怒らせながら文句をつけてきたハーマイオニー。今はあまりに相手がバカすぎて言葉も無いという様子だ。あの憤怒に満ちた鼻息は、軽く100℃を超えているんじゃないだろうか。

「あなたたちが退学にでもなれば関わらずに済むのよ」

一言、的確な捨て台詞を絞り出すように吐き捨てて、ハーマイオニーは地下牢へと足早に去っていった。嵐のような奴だと思う一方で、魔理沙には、ハーマイオニーと他のグリフィンドール生の関係が日に日に悪くなるように見えた。

しかし、それはともかく、気になるフレーズが有った。

『『あんなこと』って、何だ？』

「さあ？ あいつは真正正銘の校則を守る機械だから。どんなことでも『あんなこと』だよ。いつまでもネチネチネチネチ……」

「ほーん……」

ロンの文句の陰でハリーが一瞬何かを話したそうにしたのを、魔理沙は見逃さなかった。

その日の昼食後、校庭……昨日飛行訓練を行った場所辺りに四人の姿があった。

何としてでも倒してやるという意気込みのロン。少し緊張している気もするが全体的には余裕たっぷりな表情のドラコ。呑気に面白がっている魔理沙。そしてとりあえずロンが勝てばいいなあと思っているハリー。

「作法は知ってるよな？ ウィーズリー」

「頭を下げ、杖を構えて、一、二、三だろ」

「カウントは私がやるぞー」

向き合って、まず一礼。杖を持った手を身体の前に曲げて恭しく頭を下げたドラコに対し、腰は折ったものの顔は下げずに、撫でつけられた金髪を睨みつけていたロン。そして互いに杖を剣のように構える。ロンの杖の端から飛び出した芯が風に揺れた。残念ながらロンに勝ち目は無さそうだとハリーは思った。ドラコのように財産の大小で差別して、ましてそれを頻繁に口にするのは良くないことだと知っているけれど、それでも“これ”を見ると確かに差が有る。それはロン本人も今になって感じているようだ。

「いち、にー、——」

「ああ、探しましたよミスター・ポッター！」

邪魔が入った。魔理沙は嘆息したが、ロンとハリーにとっては助け舟だ。

「あなたたち、何をやっているんです？」

「呪文の練習です」

マクゴナガルはいかにも胡散臭そうに魔理沙を一瞥し、窘めるように言った。

「呪文を試すときは、まず杖の先に人が居ないか確かめることです。互いに杖を向けてする練習がありますか。あるとすれば決闘の訓練

くらいでしょう。一年生がするものではありませんけれどね」

もつとも、この四人が決闘するつもりらしいということはハーマイオニーから聞いて知っていた。四人がここに居るだろうという情報も、ハーマイオニーからのものだ。……メリッサ・ミストウツドの差し金で、ハリー・ポッターとドラコ・マルフォイが争おうとしている、と。

マクゴナガルは次にドラコを睨みつけた。無言の催促を受けて、ドラコも渋々杖を下げた。それを確認して、マクゴナガルはハリーに向き直る。一変して機嫌が良さそうな表情だ。

「ミスター・ポッター。ウツドから聞きました。素晴らしい飛行技術を持っているそうですね。そこなのですが、貴方がチームに相応しいか、これからテストをしようと思うのです」

「一年生はチームに入れないはずです！」

ドラコが噛みついた。

「無論、規則ではそうなっています。一方で、寮監が承認し、校長に話を通せば規則を曲げられるのは大前提の決まりです。だからこそ、私立ち合いの下でテストをするのです。規則を曲げてまでチームに入れる程の腕があるかどうか」

マクゴナガルは涼しい顔できっぱり言い切った。

「さて、では、競技場に行きましょう。ウツドが待っています」

ハリーが半ば引つ張られるように連れて行かれて、またも決闘は流れになった。ロンも魔理沙も、仕方が無いのでテストの見物に行くことにした。「まさか君も行くつもりかい？」と、ドラコが魔理沙の袖を掴んだが「逆に、ドラコは見に行かないのか？」と返事すると黙ってついてきた。

クイディッチ競技場は、まるで城壁のように高くそびえる観客席に囲まれた楕円形の広場だ。両端にゴールである輪と、それを支える柱が三本ずつ立っている。空中の競技だけあって、地面に引かれた線はサッカーやバスケットボールなんかと比べれば大雑把な上に少ないもので、芝生も禿げたり枯れたり、他の植物に侵食されている部分が目についた。

その真ん中あたりに、ウッドは待ち構えていた。箒を二本と、何か大きな箱を持っている。「待ちかねましたよ」と、ウッドはマクゴナガルとハリーに駆け寄った。

「さあ、まずは慣らし飛行だ」

「やあハリー、よく来たね」なんて挨拶も無いうちから、ウッドは箒を押し付けた。しかし、ハリーも飛ぶ気は十分だったから、何のためらいも無くそれに跨った。やっぱり『カイゾエニン』なんかより箒で飛ぶほうが何倍も楽しくて有意義だ。

ハリーは、ネビルを助けたときよりもさらに速く滑らかに飛んだ。備品のオンボロじゃここまでの飛行はできないだろう。「クリーンスイープだ。ウチの兄さんも使ってる」とロンが言った。「ま、クイデイツチをするための最低限の箒だね」とドラコが付け加えた。アレが、いわゆる現代の競技用箒なのだろう。柄も握りやすそうなカタチになっているが、特に穂の部分がちょうどドラコの頭のように整えられて滑らかなのが目についた。「あれじゃ掃き掃除はできそうにないな」と、魔理沙は少し笑ってしまった。

「素晴らしい！ 天性のものがあると思えません！」

ハリーがいくつかのターンや宙返りをこなして地上に降りてきたときには、もうマクゴナガルもウッドも大喜びだった。

「でもちよつと窮屈そうですね。良い箒を買わないと。クリーンスイープでも、この5号じゃなくて7号。欲を言えば、ニンバス2000なら最高の飛行が見られるはずだ」

ウッドはハリーの頭をなでたり肩をさすったりしながら言った。マクゴナガルに言外にねだっているようにも見える。「それで、テストって言うのは？」とハリーが言うまで二人でお祭り騒ぎだった。

「おほん。では、テストに入りましょう」

もう必要ないものだったが、一応、形としてテストは行われる。今度はウッドとハリーが二人で飛び上がった。

「今からこれを投げる」と、ウッドはゴルフボールが詰まった袋を見せた。

「30個中、20個取れたら次のテストだ」

この条件もやはり不要だった。ウツドが下に投げようが上に投げようが強く投げようがゆっくり投げようが、ハリーは全ての球を完璧にキャッチしたのだ。マクゴナガルは授業中とは別人のようにはしやぎまわっていた(地面すれすれのダイビングキャッチのときなどは目も口もついでに鼻の穴も全開だった)し、ロンは友人として誇らしい気分だった。

これにはマルフォイも感心してしまっていた。場合によっては自分にもテストを受けさせろと主張するつもりだったが、今コイツと比べられては恥をかくことになるかと悟ったのだ。メチャクチャ悔しいことに変わりはないが。

「次のテストはこれ」

ウツドは箱を開けながら言った。

「この『ブラッジャー』を放す。五分間逃げきつてくれたら、合格だ。第三テストの予定だった曲乗りは慣らし飛行で見たしね」

ハリーは、ウツドの手元で、黒光りする球が拘束具をガタガタ揺らして暴れているのを見た。

「それ、何なの?」

「ブラッジャー。クイディッチの球の一つで、『暴れ玉』さ。一番近くに居る選手に突進する。『ビーター』が、この球の餌食にならないように味方を守る役目なんだけど……ま、テストだから。君がこれに追い回されるのは今回だけと思ってくれ。ウチのビーターは腕がいいからね」

ウツドはロンにウィンクした。ロンの兄、双子のフレッド&ジョージ・ウィーズリーがグリフィンドールのビーターなのだ。

「当たったらどうなるの?」

「不合格になる。たぶん死にはしない。さ、十五メートルほど上で待機してくれ」

ハリーが空中に止まったのを確認すると、ウツドはできるだけ腕を伸ばしてブラッジャーの留め金を外し、そして一目散にその場から離れた。

実際のブラッジャーの動きを見ると、『暴れ玉』と言うよりは『殺人

球』だ。単に暴れているんじゃない、的確に人を狙って飛んでいる。全速で逃げても、身体を振じて避けてもしつこく突っ込んで来る。……逆に言えば、それだけ厳しくてもハリーは避けきっているということだ。

そうして五分後、ブラッジャーがウツドに押さえつけられると同時に、ハリーのクイディッチチーム入りが決定した。

「即戦力とはこのことだー！」

ウツドはまたハリーをグチャグチャに撫でた。

「百年ぶりの一年生クイディッチプレイヤーです。あなたのお父様がどんなにお喜びになることか」

「父さんが……？」

「そうです。あなたのお父様も素晴らしい選手でした。シーカーでも、チェイサーでもビーターでもなんでもできました」

「まあ君には絶対シーカーになってもらうけどね」

最終的に、その日はドラコにとってかなり屈辱的な日だったと言わざるを得ない。ウィーズリーにたつぷり嫌味を言われ、結局その後決闘で汚名返上できなかった。それに、先輩たちにグリフィンドールクイディッチチームがハリー・ポッターを新しいシーカーとして迎え入れたこと、しかもハリーがかなり優秀であることを報告しなければならなかったのも気分が悪い。何よりメリッサが端々で”向こう寄り”に聞こえる発言をしたのが嫌だ。本人は今も何食わぬ顔で隣に居るが……。

「そう気を落とすなってドラコ」と、魔理沙は『身近でタチの悪い毒、呪い』の文章に目を落としたまま言った。

「ロニーのやつ、カウントの間相当ブルってたぜ。呪文をぶつけ合いはしなかったが、実力の違いは伝わったんだ。こっちが煽らない限り、向こうも大口叩いてはこないだろうさ」

「ハリー・ポッター”様”に、その隣のウィーズリー。嫌でも目に入る」

「一々気にすることじゃない」

ページをめくる動作のついでみたいに、静かに短く言った。

「一体、君はどっちの味方なんだい？」

「じゃあなんでお前たちは敵なんだ？」

今度はちゃんと向き直った。血統の因縁だかなんだか知らないが、そんな他所事のために今ホグワーツで一番ホットな人間に喧嘩を売るのは誰にとっても不利益にしかない。

「私は両方の友達のもりなんだがな」

しかし、反対にドラコは拗ねたように顔を逸らしてしまった。無理もない。11歳の少年に、急に大人の対応を求めたってそうそうできるはずがない。嫌いなものは嫌いで、文句が言いたいものだ。魔理沙が涼しい顔でいられるのだって、結局のところ「私は嫌な思いしてないから」というだけの話。

魔法学校に来て一月目の終わり、魔理沙の生活にちよつとした面倒の種が生まれたのだった。

十四話 臭い

決闘騒動から一週間ほどたった。

魔理沙の予想した通り、ドラコとロンの仲はひとまず小康を保っていた。四羽立てのフクロウ便がハリーにニンバス2000を届けても、ロンはドラコに見せびらかしたり皮肉を言ったりしなかったし、反対に、ドラコも箒のこととやかく言うことは無かった。マクゴナガルが大喜びでハリーをクイディッチチーム入りさせ規則を曲げる気であるのを自分の目で見たから、当然、その新選手が箒を持ったところで文句のつけようが無い(ようになってい)ことは分かっていたのだ。ドラコはまたも苦々しい思いをしたが……しかたない。これに関して何を言ったって「ハリーの箒捌きは素晴らしい」という話に帰結してしまつて余計に具合が悪くなるに決まつている。

週に三回のクイディッチはハリーにとって一番の楽しみである反面、一番の悩みでもあつた。(噂されるのにはいい加減慣れたものの)時間も体力も気が付いたら吹っ飛んで行つてしまつているし、授業中も飛ぶことばかり考えてしまう。一年生のクイディッチチーム入りが禁止されていたのは、その辺りの理由もあつたのだなと気付いたのは10月も折り返した後だった。

もつとも、気が付いたら10月も末というのは多かれ少なかれ一年生殆どに言えることだろう。なんせ授業もそろそろと各分野の本題に入つて行き、次から次に宿題が出る。生徒たちは授業が終わつても談話室や空き教室に集まつてあーでもないこーでもないと話し合いながら課題に取り組んでいた。

しかしその輪の中に姿を見ない生徒もほんの少しだけ居た。

一人はグリフィンドールのハーマイオニーだ。「集中してるから話しかけないで」とでも言いたげな雰囲気振りまきながら凄く速さで課題を消化し、それが終わつても何かしら本に齧りついている。普段からの小言癖や「自分でやらないとためにならない」云々という講師のせいで、彼女に渋い反応をする生徒はロンだけではなくなつていた。

そしてもう一人は、やはりと言うべきか、魔理沙。同じく自分の宿題はさっさと終わらせてしまうのだが、こちらはまた別のタイプで話しかけ辛いとは思われていない。しかし活発過ぎて「ああ、メリツサならさっき〇〇に出かけたよ」という具合に気が付いたらどこかに行ってしまうているのだ。

そんな彼女が今執心しているのは、箒。しかし世界最速ニンバス2000のハリーと正反対でオンボロ。骨董箒、流れ星だ。しかも学校の備品の廃品。初めての飛行訓練で跨がったダメ箒……あの後結局、もうダメだということでも他に先立って用済みになっていたところを（ゴミ捨て場から）譲り受けたのだ。

校庭の隅のベンチで箒に関する本とにらめっこしながら分解したり組み立て直したり。とりあえず競技用箒の最低ラインくらいに直してみたいと思っている。意外なことに、ハグリッドが材料に適した小枝を持ってきたりと協力してくれた。おかしなイタズラの魔法の開発や機を伺うように立入禁止の森の境界をフラフラすることに精を出されるよりは直る見込みの薄い古道具に夢中でいてくれる方がよっぽど気が楽だからだった。

そんなハグリッドの期待を裏切って片手間に耳毛を伸ばして顎の下で蝶結びにする呪文を開発してしまったところ、ハロウィーンがやってきた。

蜂蜜や砂糖がたっぷり入ったお菓子の甘ったるい匂いが、朝 地下牢から上がって来たとたんに魔理沙の鼻をくすぐった。「トリック・オア・トリート』も無しに初めから用意してくれてるとは有り難い」なんて言いながら急ぎ足で大広間に飛び込んだ。しかし並べてあったのは普段と同じ、パンやソーセージの朝食。どうにも食堂の戸のスキマから匂いをまき散らしている大量のお菓子たちは、さんざもったいぶられた後、夕食時に一気に開放されるらしい。

とはいえお祭りごとは何も学校が主催するだけのものではない。みんな教室移動の間にも（或いは授業中でも）お菓子のやり取りで盛り上がっている。ドラコには一抱えほどもある高級菓子の詰め合わせが両親から届いた（ので有頂天で自慢していた）し、上級生の何

人かは市販の魔法菓子も顔負けの不思議な味がするビスケットやニョロニョロ動くチューリングキャンディーを作って配り歩いた。

しかしこれが闇の魔術に対する防衛学の授業で悲劇を引き起こす。……まあ、クイレルとその教室が放つ異臭と菓子の匂いが混じり合ったせいでダフネが体調を崩したというだけの話だが。その間もクラップとゴイルは悪臭も先生の目も何も気にせずスイートポテトを頬張っていた。

「ううう……一生の恥ですわ……」

「嘔吐つてのはなにも一概に下品な事じゃないんだ。古代ローマの貴族たちは日常的に吐いてたんだぞ」

なんとか授業を乗り切ったもののいよいよ切羽詰まった様子になったダフネを連れて、魔理沙はトイレにやってきた。いったん吐いてスッキリしようというワケなのだ。

「……つと、メリツサ？ ……大変そうね」

しかもいざ入ろうというところで結局他の生徒と出くわしたもんだから、ダフネの顔色は吐き気に恥ずかしさが混ざって余計に恥ずかしい物になってしまった。

「ダフネがちよつとな。そう言うパーバティは？ ……なんか浮かない顔だな」

パーバティは眉を下げて少し言いよどんだ。

「えーつと、こつちも、同級生がちよつとね。できればここは暫く使わないで欲しいんだけど……」

「すまんがそれは無理みたいだな」

ダフネはいよいよリミットを半歩超えたようで、青紫がかった顔をして口を押えている。目的地にたどり着いて気が抜けたところに”待った”がかかった辛さはそれなりの人に共感してもらえらるだろう。そうして、パーバティが次の言葉を継ぐ前にトイレへ駆け込んでいつてしまった。

「あー、まあ、お大事にね。それと……」

「先客はそつとしいてあげて……つてか」

言わずとも分かっていたという風な言葉にパーバティは安心した

らしく、魔理沙たちが来た道を帰っていった。

「ま、そのお願いをきくかどうかはどうかは私次第だがな」

魔理沙がトイレの中に入ると、なるほど、ダフネが顔を突っ込んで
いる以外にもう一つ使用中の個室があった。中から何か音がすると
いうわけではないが、逆に言うとう無理に息を殺している感じがする。
「腹でも崩したか？ グレンジャー」と、個室の薄い壁の向こうに居る
であろう知り合いに声をかけた。

「ほっといてよ」

俄かに後悔の念が膨らんだ。いらんものを突っついてしまった。
柄にもなく語彙の貧しい返事に、さすがの魔理沙も申し訳なく思った
のだ。せいぜい何かで癩癩を起こして鼻息荒く怒り泣きしているの
だろうと思つたら、まさかまさか歳若い女の子らしく声を細く震わせ
ていたのだ。「まあ、元氣出せよ」なんて面白みのかけらもない言葉が
自分の口から出た時はこつちが泣きたい気分になった。

「どうかしましたの？」

「いや、どうもしてない」

ハーマイオニーのことは気掛かりだが、何せ魔理沙は嫌われている
自覚が有った。ここからまた下手に関わると逆効果だろう。それよ
りダフネの金の巻き髪の端にへばりついたチョコと胃液の混合物を
魔法でさり気なく取り除くことが、今自分にできる一番の仕事だ。

ダフネの気分が治つてくると、いよいよディナー。ハロウィン・
パーティー。大店間は新入生歓迎の宴以来の美しさ（やかましさ）で
魔理沙たち生徒を迎え入れた。

普段の蠟燭の代わりにジャック・オ・ランタンが何色ともつかない
炎で辺りを照らし、数えようと試みるヤツは確実にバカだと言いつれ
るほどたくさんの蝙蝠が壁や空中にひしめいていた。魔理沙は糞が
落ちてこないか気になったが、事実辺りにそれらしい汚れは見当たら
なかった。で何かしらの方法で防がれているのだろう。

皆がそれぞれの寮の席につくと同時に金の皿に乗ったご馳走が湧
き出た。律儀に夕方まで間食を控えていた生徒はもちろん、ドラコた
ちもいざ料理を前にすると一気に胃袋にスペースができるのが分

かったし、ダフネも吐いた分だけ入れたくなくてきた頃合いのようだった。デブ二人は言うまでもない。

コルカノンを口に運びながら、魔理沙はハーマイオニーがグリフィンドールの席に居ないことに気が付いた。あのプライドの高いグレンジャーがパーティーにまで顔を出さないとはいよいよ何があつたか気になるなど思い始めた矢先、クイレルがドターンと倒れ込むような勢いで扉を開けて入って来た。そして、そのまま実際に倒れ込んだ。

「トロールが……地下室に……お知らせしなくてはと思つて」
そうしてそれだけ言ったきり、白目を剥いて静かになってしまった。

怖がりの小さな女の子と一部の男の子たちが悲鳴を上げた。上級生たちも「なんでトロールが?」「本当に言ってるの?」などと一齐に騒ぎ合い始め、静かにするよう諫める先生たちの声で喧騒は一層大きくなった。

「面白い催しだな」

「エイプリルフールとないませですわね」

「でもリアリティが無さすぎるよ。学校にトロールが入り混むのはともかく、仮にも教授がその程度で気を失うなんて」

言いながら、ドラコの顔は普段以上に青かった。

「いや、クイレルのことだからむしろそれは有り得る点だろ」

「そうだったね。ホント、クビにするべきだよ」

魔理沙たちは寸劇か何かだと受け取って相変わらず食事を楽しんでた。……しかし、どうやらそうではないらしい。破裂音が鳴り響いた。ダンブルドアが空中に爆竹を炸裂させたのだ。シンと静まった大広間に、重々しい声で指示が為された。

「監督生よ、今すぐに生徒を引率して寮へ帰るように」

監督生たちがサツと立ち上がって避難誘導を始めた。レイブンクローやハツフルパフの群衆にぶち当たって、グリフィンドールの監督生のパーシー・ウィーズリーが他寮にまで一際やかましく指図している。対照的にスリザリンは地下牢へつながる小扉から少しづつ抜け

出した。

「まったく、ホグワーツも地に落ちたものだよ」と、入って半年も経ってないドラコがやはり偉そうに愚痴った。地下牢の細い通路に入っ
て安心したのか、顔色はいつもの薄白色に戻っている。

「トロールってすんなり入り込めるものなのか？」

魔理沙は魔法生物図鑑のトロールの頁に連ねられた散々な文句（バカ、のろま、肥満、禿げ、汚い、臭い、卑しきだけは持ち合わせた生命の屑、その他）を思い出しながら呟いた。

「さあ。ホグワーツには怪物事件がいくつか有ったって父上から聞
てるし、何かそういうルートがあるのかもしれないね。……トロール
で避難騒ぎが起こるなんて笑い話は聞いたことないけど」

「侮られていますけれど弱いワケではないのでしょうか」

「はは、まさか。だってトロールだよ？」

「じゃああなた退治して来てくださるかしら？」

「はは、まさか」

ダフネはため息をついた。魔法族のパーティで見かけたときは
もっとクールな男だと思っていたのだが、今ではひょうきんなイメー
ジが先に立つ。

「でも少なくともクイレルみたいに情けなく気絶したりはしないよ」

「だと良いのですけれど。……でもメリッサさんなら軽く倒しそうで
すわね？」

返事は無し。こんなときにまでいつも通りフラつといなくなっ
ていた。

ダフネから報告を受けてスリザリンの監督生が大きく一つため息
を吐いた頃、魔理沙は本館の廊下を進んでいた。ツカツカと小さい足
音が静かに遠くまで響いている。

トロールを見てみたいというのが一つ目の理由。というのはまた
も魔理沙の知るものと魔法界で知られるものに差が有ったからだ。
魔理沙が見たことのあるトロールは禿げでなく全身毛むくじゃらで、
且つ強力な再生能力とことさらに人に対しての凶暴性を持ち、（だか
らって負けるとは思わないが）とてもバカの代名詞のように扱える代

物ではなかった。果たして魔法族が親しむトロールとはどの程度のものなのか……欲を言えば何かしらの素材が取ればと期待している。

二つめはハーマイオニーのことだ。ずっとトイレに籠っていたのならトロールのことも知らないだろう。さんざバカにしている魔法族の生物学者たちも、「ただし——」と、大きいトロールの皮膚はその分厚さのせいがある程度の魔法までなら撥いてしまうため注意が必要だと記述している。そもそもこちらの魔法は大抵の大型生物に対して効果が薄いようだ。「分厚い皮膚」や「堅い鱗」のような”守りのイメージ”に弱いのもかもしれない。……そんな考察は今置いておいて。余計なお世話かもしれないが、もし対面してしまったとして、ハーマイオニーの呪文がトロールに効くか心配なのだ。

「トロールがどつちに居るか知らないか？」

魔理沙はすぐに聞き込みを始めた。その一番目で成果が有ったのは幸いだ。緑の肩掛けを着けた厳めしい僧侶の絵画は聞き耳を立てるのが得意だった。

「寮に戻るんじゃないのかね？ お嬢ちゃん」

「急に催してな」

「ふーむ。それでなんでトロールの居場所を？」

魔理沙は悪びれもせず「うっかり出くわさないために決まってるじゃないか」と鼻で笑った。

「そうか。ならば、この塔の二階のトイレは使わんことだ。どうやらそつちに行ったらしいとご婦人方が噂しておった」

僧侶はお茶会をする貴婦人の絵画を見やった。いつも何やら楽し気にしゃべくっている絵だが、今は煙たそうな表情を寄せ合ってひそひそとやっている。

魔理沙は一言礼を残して歩き出した。……二階のトイレの方へ迷い無く。僧侶は呆れて、いつそハハハと大きく笑った。

二階のトイレと言えばダフネが嘔吐しハーマイオニーが泣いていた場所だ。魔理沙は三番目の理由——トロールが現れた原因(もつと踏み込むと”招き入れた”人物)を探るのは取りやめにして、ハーマ

イオニーのところどころに直行することにした。しかし残念。その次の角を曲がった瞬間に余計な相手と出くわしてしまった。

「なんだ!? ……ミ、ミストウツド君じ、じゃないか。ど、どうしてこんなところに」

大理石の壁の向こうからふいに現れたクイレルは、普段より一層声と視線を震わせている。

「ちよつとトイレだ」

「い、今はと、トロールが、が出てるんだよ。き、危険だ。後にしたらど、どうだい」

「あいにく差し迫ってな」

「じゃ、じゃあ、寮のトイレは」

「スリザリンの寮の場所知ってるか？ 下手すりや一回出してもう一回催すくらいの僻地だぜ」

魔理沙はスリザリン寮の場所が知られていないのをいいことに本日何回目かも分からない適当を言った。

「し、しかし……」

「漏らすくらいならトロールに潰された方がマシだつてのが乙女の心つてもんなんだよ。……そうだ。気になるんならそこまでついて来てくれりゃあいい」

「いや、トロールを探さなければ……」

「探してどうするんだ？ また気絶するのか？ ……つてなるとついてきてもらいう意味も無いな。じゃ、私は行くぜ」

辛辣なセリフを言うだけ言ってさっさと横をすり抜けて通り過ぎてしまった。クイレルは引き留めようと片手を伸ばしたが、すぐに引っ返ってしまった。今はあのアホな生徒より優先することが有る。

そうしてクイレルと別れて少し後、甲高い、恐怖を絞り出したような悲鳴が石造りの通路に反響した。魔理沙はもはや自重せず筋力強化と魔力ブーストを最大にして、壁にかかった絵画やタペストリーを轟轟と揺らしながら走った。油絵の眠り狼が何事かと目を瞬かせたが、そのころにはもう女子トイレの目の前だった。

ザラザラした灰色の小山のようなモノ……トロールがトイレの狭

い空間を埋めていた。その身長とさほど変わらないくらいに長い長い腕がグワングワンと振り回され、手にした棍棒が太い風切り音を響かせている。途切れたパイプが噴水になっている。切株のような脚が石の床板に亀裂を走らせた。そして相対的に見ると無いに等しい大きさのブサイクな頭にはハリーがしがみついていた。どうやったか（ついでに何故か）は分からないがトロールの鼻に杖を刺し込んでいる。

「メリッサ!? なんで——」

向こうの壁に張り付いて硬直しているハーマイオニーの、トロールを挟んで入り口近くにいたロンが一番に魔理沙に気付いた。しかし、その返事をしていない暇はない。トロールの前に立つが早いか、ドンツと大きく踵を鳴らした。鈍い水音と共に床が崩れたかと思うや沼が現れ、トロールの短い脚が沈み込む。周囲の瓦礫が浮き上がり暴風雨の如く撃ちつける。しかし、ハリーを避けるために頭の周りを外した攻撃では効果が薄かったか、まだ倒れる気配は無い。手を変えようかと思案している後ろから呪文が飛んだ。

「ウインガーディウム レビオーサー！」

ぬるりと静かに棍棒が浮き上がって、ふらふらと持ち主の頭の上に制止し、……その脳天にまつすぐ落ちた。トロールの有るか無いか分からない首が跳ねて、シジミのように小さな目が有らぬ方向を向く。そして、止めに、魔理沙の魔法によって鼻の杖が根元まで深く刺さった。

それで終わった。

ハリーはトロールの肩から沼の外に降りた。初めての戦いを経験して、冷たくなった膝が震えている。同じくどこをみているのか杖を振り上げたままボーっとしているロンに代わり、ハーマイオニーが緊張でおかしくなった顔色のまま喘ぎ喘ぎ言った。

「これ……死んだの?」

「完全に死んだ」

四人は動かなくなった巨体を見下ろした。恐ろしく愚かでも脳は脳。致命傷だ。鼻から流れ出るネットリとした血液が、沼の灰色の上

に気味の悪い模様を描いているようだった。

ハリーが血まみれの杖を引き抜くのを決心する前に、バタバタと騒がしい足音を立ててマクゴナガルが入って来た。その次がスネイプ、最後に、そのスネイプに引つ張られるようにして、クイレルだ。片やマクゴナガルの怒りに血が退いた顔を見るや、片やトロールの凄惨な死体を見るや、ハーマイオニーとクイレルはそれぞれ膝を折ってへたり込んだ。

「これは一体どういうことなんです？」

魔理沙がめんどくさそうに頭を掻く横で、ロンは何故か銃を向けられたマグルがするような格好になっていた。スネイプはトロールだったものに一瞥をくれた後、説教をマクゴナガルに任せていつものようにハリーに怨嗟の視線を飛ばす仕事を始めた。

「今ここに倒れているのはあなたたちの方だったのかもしれないですよ？ 何故寮に戻る列から抜け出したのですか……」

「私はトイレに行こうと思ってな。そのことはクイレル先生にも言っただが」

「クイリナス！」

「わ、私は」

突如飛び火した鋭い眼光にクイレルの声がいつもの二割増しで上擦った。

「ち、ちゆ、注意しました。どこか、かにトロー、ロールが、が居るか
らき、危険だと」

「注意するだけならマグルの看板にでもできます」

マクゴナガルがピシヤリと切り捨てた。そのまま職も切り落とされると思ったのか、ターバンの形が崩れ色が濃くなるほど一気に汗を噴き出した。

「も、もちろん、た、立ちふさがって止め、めました！」

魔理沙は「そうだったか？」と笑った。

「でも、漏らすく、くらいならトロールに潰された方がマシ、しなのがお、乙女だと言わ、われて……」

「じゃあハイ殺されなさいと言うのが教授のやることですか」

マクゴナガルは「校長に意見を訊くことになるでしょう」と呟いて魔理沙に向き直った。

「それで、そもそも寮まで我慢できなかったのですか」

「寮のトイレは間に合わなそうだったんだよ」

「セブルス」

「異性の侵入は禁止されておりますので女子トイレについては言及しかねますが……まあ、談話室そのものからして他と比べれば格段に遠いでしょうな。それに、一般的に女性の方が排尿の我慢がきかないとも言おう」

胡散臭いものを見る目に、スネイプは片眉を上げた。

「……そうですか。しかし、百歩譲って本館で用を足す必要があったとして、一階にもトイレは有りますが」

「新入生なもんで」

ハリーはよくこれだけスラスラと方便が出るものだと思気に取り忘れてしまった。

「……それで、済ませたのですか？」

「トロールを見たら引つ込んだ。もしかしたら無意識に出しちゃったのかもしれないけどな」

まったく困ったもんだと尊大な態度で首を振り、ぐちゃぐちゃのびしよ濡れになったトイレ跡地を見回した。マクゴナガルはもう話すのに疲れたという様子で、今度はハリーのほうに目を向けた。

「それで、あなた方は？」

「グレンジャーもトイレだよな」

マクゴナガルはあなたに訊いてないと言っても言いたいのか、僅かに顔を顰めた。

「その……少し長引いていて、トロールのことを知りませんでした」

「なるほど。ミスタ・ポッター、ミスタ・ウィズリーは」

「パーティーのときハーマイオニーが居ないなって……」

「二人は私を助けに来てくれたんです。二人が来てくれてなかったら、もう、今頃は……」

「少なくとも先生方が後から来た頃には絶対に間違いなく手遅れだっ

たろうな」

「それは確かにこちらの落ち度とも言えよう。……しかし、助けるにしても監督生に報告する等、より良い方法が有っただろう」

「慌ててて」

スネイプは不機嫌にフンと鼻を鳴らした。

「分かりました。無謀だった点を差し引いて、結果的に大人のトロールを倒して生徒を一人救った働きは評価できます。ミスター・ポッターとミスター・ウイズリーには10点ずつあげましょう。スリザリオンは……」

「ミストウツドは20点で良いでしょう。トイレに行くことは、吾輩ならそうはしまいと思えますが、クイレル教授が黙認したこと。そして、戦闘でも恐らくは……この沼など……中心的な役割を担ったのだろうか?」

「まあな」

「なら、皆、怪我が無いならそれぞれ寮に戻りなさい。パーティーの続きを談話室でやっているはずですよ」

「僕らは二人で20点、向こうは一人でおんなじだけだ」

トイレの出口で魔理沙と別れて、グリフィンボールの三人は階段を上る。戦いの興奮が冷めて、ロンはスネイプの鼻屑を非難する心の余裕ができてきた。

「しかたないよ。メリッサの魔法は凄かった」

「そうだけどき。棍棒をぶつけたのは僕だ。きつとアレが決め手だったね」

「じゃあそう言えば良かったのに」

取り調べの間中ロンは口を開けて呆けっぱなしだった。

「……ともかく、まあ、なんとするか君が無事で良かった」

そのロンが今度は耳を赤くしながら言った。二人の後ろを黙って歩いていたハーマイオニーは少し下を向いた後、「そう思ってくれくらいなら始めから陰口なんて言わないでほしいわ」と笑った。

「やっぱり可愛くないよ。キミ」

太った婦人の肖像画を抜けて寮に帰ると、ついさっきのスリルが嘘のように楽しいパーティーが続いていた。鼻にこびりついたトロールの悪臭も素晴らしいごちそうの匂いで掻き消された。三人は料理を囲む生徒たちに一目散に混ざり込んだ。大広間に居なかつたハーマイオニーはもちろん、ハリーとロンの身体も大仕事の報酬を求めていたのだ。

ちなみに魔理沙はジエマ含めた監督生六人によるありがたいお説教のおかげでパーティーに参加できなかつた。

十五話 玉遊び

ドタバタのハロウィーンが去って十一月に入ると、ホグワーツは思っていたように寒さを増した。空から地面まで寒々しい灰色で塗りつぶされ、湖は恐ろしいほど冷たい藍色をしていた。二日に一回はイカと目が合うスリザリン生以外は、湖全体が全く眠ってしまったと勘違いしてもおかしくないだろう。みんな日ごとに一枚また一枚と重ね着が増え、指定ローブのフードに有難味を感じている。ハグリットは毛皮と雪景色でほとんど完全に雪男と化していた。

そんな中、一層元気になってきた一団がいる。各寮のクイディッチ選手たちだ。この週末のグリフィンドール対スリザリンの一戦を皮切りに、ホグワーツはクイディッチシーズンとなる。その勝敗が寮対抗の得点に与える影響はかなり大きく、普段目立たないハッフルパフの数少ない寮対抗杯優勝パターンは最下位からクイディッチ点でごぼう抜きしてそのまま独走というものだった。反対に持ち前の優秀さ（狡猾さ）で平常点を重ねるスタイルのスリザリンにとっても気が抜けないシーズンだ。そういう理由で、ハッフルパフとスリザリンは伝統的に強いクイディッチチームについて研究と継承を行っていた。

その結果、スリザリンが辿り着いたのは制圧型の攻めを前提とした徹底的な体格主義。とにかく速くスニッチを取ることが役割のシーカー以外は……いや、シーカーでも出来るだけ大柄の選手を取った。

個人の技量は、その選手が卒業してしまえば残らない。”伝統的に”強いチームを作るには影響しない要素だ（もちろん有った方が良いが）。その点、「体格の良い選手を取る」という明確な基準と、そのような選手を活かす戦略は必ず継承できる。もちろんプロ一直線の天才や革命的なリーダーの前に敗れる事もある。しかし、そんな選手も数年後には卒業でバイバイ。後には天才に甘やかされたせいで弱体化したチームが残る。……グリフィンドールが昔からそんな感じだった。

そして、今年のグリフィンドールは優秀なシーカー——伝説のハリー・ポッターを手に入れたと知らせが入ったのが一ヶ月前のこと。

スリザリン生たちは心の中でハリーを呪う作業にいつもより熱心になった。実際に呪いの技を試した者も居るかもしれない。もちろん悪口も盛んになった。反対にグリフィンドール生やスリザリンに對抗心を持ついくらかの他寮生はハリーを称賛するのに躍起になっている。「また僕をダシにして喧嘩してるよ」とうんざりするハリーに、ウッドは「ハリーがシーカーなのは極秘のはずなのになんで広まったんだ？」と頓珍漢なことを言った。

「今年のグリフィンドールは確実に調子付いて来る」

スリザリンチームキャプテンのマークス・フリントはゴツゴツした顔に余分に皺を付けて深刻な表情だ。

天才が湧くにしても即戦力1年生シーカーというのはヒドい。考え得る限り最悪のタイプだ。あと7年も開始即150点試合終了のプレッシャーを受けることになる。

「ヤツは一年生だが……一年生だからこそ、全力でかからなければならぬ」

フリントが立てた作戦はこうだ。グリフィンドール戦ではとにかくハリーに嫌がらせをする。この際ファールでも持ち場の放棄でも何でもいい。その試合では負けるかもしれない。しかし、早い内に少しでもクイディッチに対するトラウマや、あわよくば怪我でもさせておくことでその次の試合の不調や数年後の伸び悩みを産み出せるだろう。その間に癖や能力の詳しい研究をして、今度は「勝つための」対策を立てる。

……なんだかスポーツの趣旨から外れているようだが、スリザリンチームは至って真面目に考えたつもりだった。「そういう戦略から言やあ、本を取り上げちまうってのは有効かもしれないな」

校庭でハリーから『クイディッチ今昔』を没収してきたらしいスネイクに、魔理沙が当たり前のように気安く声をかけた。

「なんのことやら。図書館の本の校外への持ち出し……それにグレンジャーからの又貸しを取り締まったまでだ」

魔理沙はよくやるもんだと呆れた。校外つつつても校庭だろうに、

また適当な理由をこじつけたな。いったいハリーの何がスネイプをこうまで駆り立ててるのか。関節痛か何かだろうか——最近歩くときに片足を引き擦っているが、それでも尚昼夜問わず律儀に校内あちこち歩き回ってはハリーに出会うたびに難癖つけて減点している。

「メリッサ、こんなところに居たのか。一年生はこれから応援の練習だよ」

ドラコが呼びに来た。魔理沙はうげえと僅かに舌を出した。

一体感バツグンの応援もスリザリンの名物なのだが、これにはそれなりの練習が必要だった。暖炉を中心に孤を描く談話室をそのままグラウンドの観客席に見立ててウェーブやコール、応援歌を繰り返した。当たり前だが、全員の動きが揃って初めて意味が有ることなので「私は上手く出来るから」とかと言って抜け出すことはできない。みんなが上手くなるまでやり直しだ。

応援の効果をイマイチ信用していない、そもそもクイディッチの勝敗にさほど興味が無い魔理沙にとってはモチベーションの無い苦痛の塊だった。プレーならともかく、応援なんてもっとワイワイ自由にやればいいじゃないか、と。

……だからと言っても、サボって先輩方に与える悪印象の方が影響がデカいのが現状。結局いつも大人しく参加している。

ふとスネイプと目が合った。

「あー、そうだな。すぐ行く。……何だよニタニタしやがって」

「いや、何も？」

そうはぐらかすと、片脚を引き摺っているとは思えない素早さで職員室の方へ行ってしまった。ハリーへの憎悪とはまた様子が違うが、スネイプは魔理沙に対しても意地悪で、何か苦戦しているのを見る度に喜色を浮かべた。毎週末押しかけられては好き放題されることへの意趣返しなのだが……

「全く、またたつぷり弄ってやらなきやな」

それが災難を呼び込んでいることに気付いているのだろうか。

「スネイプ先生と仲いいんだね」

「それアイツに言ったらお茶吹いて否定するだろうよ」

魔理沙に言わせれば、むしろスネイプはドラコがお気に入りの方だった。魔法薬学の授業ではハリーへの減点の半分もの高頻度でドラコに加点していた。それも、やはり初めて顔を合わせたその時から。これも謎である。

そろそろ一度本格的に人間関係を探ってみるのも面白いかもしれない。得点時のオーオーという低いコールを反復しながら、魔理沙は新たな計画を練り始めた。

そして試合の朝が来た。スリザリンチームはこれ以上ないほど殺気立ち、ドラコは「これは本格的にハリーをどうにかするかもしれない」とウキウキしてきた。寮から出て大広間では、スリザリンの反則にグリフィンドールがどう対応するか議論や一年生サッカーへの期待、それに心配の声があちこちから聞こえた。デブ二人はソーセージを革袋に詰め込んでいた。観戦しながら食べるつもりらしい。ダフネはそれを横目に見ながら、せめてもう少し手に脂の付かないものにすれば良いのと思った。二人のローブの裾は、既に今まで蓄積した脂やお菓子のカスで灰色っぽくなっていたのだ。

11時になると、城は殆どもぬけの殻になった。学校中の人間がクイディッチ競技場に集まり、選手たちが出て来るのを待っていた。決められた席に座りながら、ドラコはグリフィンドールの応援席に目を向けた。学年や男女が無秩序に入り乱れている集団の上の方に「ポッターを大統領に」と書かれた横断幕が掲げられている。

「あの布を墜落の受け止めに使ってやった方がポッターのためになるだろうよ」

「学生サッカーで大統領になれるならプロ選手は世界征服できますわね」

「この人気ならそれもそのうち有るかもしれないな」
全く、ついこの間怪物の侵入騒ぎがあったというのに、観客席を見渡すと教授連中がそこかしこで能天気な表情をしていた。ハグリットものそりのそりとグリフィンドール席の辺りを横断幕の方へ動いている。魔法族のクイディッチへの熱狂は理解し難いものがある。

クラブがソーセージを食べ始めたころ、グラウンドの両端から選

手たちが現れた。津波のように歓声が沸き起こる。審判を務めるマダム・フーチを間に挟んで、真紅と深緑のローブが向かい合った。もちろんそこにハリーも居る。顔は緊張しているが、それで身体が縮み上がっている様子は全くなかった。

「さあ、皆さん、正々堂々戦いましょう」

マダム・フーチは顔をスリザリンの皆さんの方に向けて言った。

「よいい、箒に乗って」

両チームの選手が箒に跨るのを確認し、マダム・フーチはクアツフルを投げ上げた。一拍も無く笛が鳴り響く。試合開始。14人の選手と、1人の審判が空へ飛びだした。

「さて、クアツフルはたちまちグリフィンドールのアンジェリーナ・ジョンソンが取りました——何て素晴らしいチエイサーでしょう。その上かなり魅力的であります」

実況席に座っているのはどうやらグリフィンドール生らしい。駅で蜘蛛を持っていた男の子、フレッドとジョージの友人、リー・ジョーダンだ。

少々危険なパスカットでクアツフルがスリザリンに渡る……デイフェンスを突き抜けたところにブラッジャーが突っ込んで再びグリフィンドールへ……フリントが急上昇で通り過ぎざまに腕ぎ取った——。

端々でグリフィンドール轟負な気がするが滑舌良くユーモア有る名実況と目まぐるしいパス回しと共に、試合は若干スリザリン有利でゆっくりと進んでいる。

魔理沙はその更に上空へ目を向けた。ハリーが鷹のように旋回している。こうして他プレーヤーとの接触を避けながらスニッチを探すのが、グリフィンドールの戦略だった。基本的に身軽な代わりに華奢なシーカーによく見られるやり方だ。

反対に、スリザリンのシーカーのテレンスはチエイサーに混ざって……時には箒でブラッジャーを打ち返ししながら、乱戦の最中を縫って飛んでいる。恵まれた体格で得点に貢献しながらチームメイトと情報交換することでスニッチを見つける作戦。スリザリンのお家芸で

ある。

その作戦の通り、スリザリンチェイサーのピュシーがスニッチを見つけた。……しかし、ピュシーがそのとき(運悪く)クアツフルを持っていたせいで、実況のためクアツフルを追っていたリーもそれに気付いてしまった。当然「ピュシーがゴールに向か——今横切ったの……アレは……スニッチか！ スニッチです!!」という具合に試合の最重要ファクターの存在をアナウンスした。

ハリーももちろん聞いていた。グンと急降下する。

スリザリンの陣形が、バツと蝙蝠傘を開くように組み変わった。

「避けるー！ ハリー!!」

至近距離を囲んだ三人のチェイサーに気を取られていたハリーの髪をブラッジャーが掠った。テレンスがズイズイとにじり寄り、フィールド端に追いやっていく。丁度スリザリンサイドだ。死角から急上昇で体当たりを繰り出したフrintに歓声が、弾き出されてあわや観客と衝突しそうになったハリーにはブーイングが叩きつけられた。

そこで笛が鳴った。あまりにも明け透けなタツクルは反則だ。プレーが止められた。グリフィンドルにフリーシュートが与えられ、10点を手に入れた。しかしそのうちにスニッチは再び身を隠してしまった。

仕切り直し。ハリーが上空へ離脱し、試合の中心はクアツフルの攻防へ。フリーシュートを防ぎ損ねたキーパーのブレッツチリーのパスから、フrint、ピュシー、またフrint……驚異的なことに、途中ブラッジャーが顔にぶち当たったのも何のその。長い腕を振りかぶってバシツとシュートを決めた。ボールは悔しそうに顔を歪めるウツドから、チェイサーのスピネットへ。

不意に強い違和感が襲った。長らく感じていなかった薄ら暗い魔力。

魔理沙は感覚のままにさっと目を走らせた。

「おいおいマジかよ」

ニンバス2000がおんぼろ流れ星でもしないような凶暴な挙動

をとっている。そして観客席ではスネイプがハリーを凝視してブツブツ言っている。なんてこった。あのおっさん、とうとう実力行使に出やがった。

しかし……いや、もう一人居る……。

と言うか、呪ってる本命はそっちだ。

「クイレル……!?!」

スネイプの斜め後ろの席で同じく、否、もっと陰しく悪意に染まった表情でハリーを見つめる者が居た。スネイプが対抗魔法をかけているのか、別の呪いをかけているのか分からないが、ともかくクイレルがハリーに呪いを仕掛けてるのは明らかだ。何か撃ち込んでやるか……いや、あの狐、実力を隠している。できれば直接攻撃魔法は使いたくない。

「見ろよメリッサ！ ポッターのやつ、タップダンスの練習でもして
るみたいだ」

「もう見てる。傑作だ」

双眼鏡を覗いて大はしやぎするドラコの横で、魔理沙は腹の前に両手の指を交差させて握り込んだ。小魚が跳ねるような感覚が、次第に魔法を使っても身体が持っていかれそうなほどの衝撃に変わっていく。ニンバス2000がハリーを振り落とそうとする力を手の中に引き受けたのだ。

ハリーはホッと息を吐いて汗を拭った。一時は箒から投げ出されそうになったが、ガタガタと微かに揺れる程度に落ち着いてきた。しかし、今度は前にも後ろにも身動きが取れない。ブラッジャーが来た。どうすることもできない。脇腹にめり込んだ。勢いで箒を軸に一回転して元の格好に戻った。観客席からは悲鳴が上がったが、ハリーはあまりのことに自分で笑ってしまった。

ウッドはクアッフルとハリーの様子とどっちが重大か決めかねている。なんだか様子がおかしい気がするが、ハリーは天才だし、箒は最高のものだし、上空で待機するという作戦は崩れていない。グリフィンドール席にも何とも言えないざわつきが広がり始めた。

「ハリーは何やってるの?」

「僕はクイデイツチ通だと思ってるんだけど、ああいうテクニクは見たことないな。でもパフォーマンスかな……笑ってるよ」

ハーマイオニーの質問に、ロンは自信無さげに答えた。少なくとも『クイデイツチ今昔』にはあんなプレイは載っていないかった。

「ありやあマズい顔だ……あんまり痛いと言つちまうんだ。人は」

「ハリー、さつきからおかしいよ。動けなくなってるみたいだ」

ウッドがタイムを取った。ハリーと何か話をしている。……持ち場に戻った。試合再開。二人はもう少し経てば箒の調子が戻ると思ったようだ。

「ニンバス2000がそんな、バカな。故障なんかそうそう起こるもんか。それに最新式の箒に手出しできる人間なんて限られちよる」

「じゃあ何だつて言うの？」

「絶対誰かがやってるんだよ」と、ロンが至極当然なことを言った。

「あのままじゃブラッジャーの的だよ。試合が続く限り、兄さんたちもハリーにずっと構ってられないし」

その言葉と同時にハーマイオニーは観客席の既にあたりを付けていたところを見た。予想していた光景がすぐに目に入った。

「やっぱり、スネイプだわ。ハリーをジツと睨みつけてる。基本から上級まで、杖無し呪いの典型だわ」

「見ろ！ ミストウッドもだ！」

ハリーへの嫌がらせと聞いて反射的にスリザリン席を見たシェーマスも声を上げた。スリザリン有利で沸き立つ緑の群衆の中で、一人だけ身動きもしない。「まさか」と呻いてハグリットがハーマイオニーの双眼鏡を挽ぎ取り、ハーマイオニーはシェーマスの双眼鏡を奪い取ってスリザリンの席を見た。

「どうする？」

「ハリーが退場したらその時点で棄権と一緒さ。シーカーは一人だけら」

「ならいつそ棄権するべきだ」

「棄権しちやったら何百点差どころじゃない大負けになるんだよ！」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ。今は自由がきかないだけで

済んでるみたいだけどそのうち……」

「私が行くわ」

言い合いするシェーマスとロンに双眼鏡を投げ返し、ハーマイオニーは観衆をすり抜けて駆けだした。ハグリットはまだ「いや、まさか」と唸って双眼鏡をあちらこちらにせわしなく動かしている。教員がそんなことをするとは思えないし、一年生が箒に何かできるとも思えない。他に誰か居るはずだ。

その間にもグリフィンドルチームの調子はどんどん落ちていた。みんなどうしたものか迷っている。なんの問題も無いのに「心配だから」といつて持ち場を捨ててしまったら戦犯確定だ。しかしスニッチが現れてもハリーが動けなかったり、またブラッジャーが襲い掛かって今度は頭に当たりでもしたら大変どころの騒ぎではない。

「メリッサさん、大丈夫ですか？ 顔色が……」

「そうでもない」

魔理沙の額に汗が浮かんだ。箒の動力魔法についてまだまだ素人ももんだから押さえるのは完全に力技で、しかもかなりの遠距離で難易度は高い。ニンバス2000のパワーはこの前流れ星を抑え込んだ時とは比べる気にもならない。長引けば魔力効率負けの要素は極めて大きい。どこかのタイミングで魔力補給したいが、なかなかその時が見つからない。

「クイレルめ……こんなときだけ根性見せやがって……」

そしてスネイプは近くに居る上に私に先生呼びを強要してくるんだから、いかげん先生らしくズバツと直接解決してくれ。いくらこちらの魔法使いが周囲の魔力に鈍感だからつてすぐ斜め後ろに犯人が居ることに気付いてないワケじゃないはずだろ。

「テレンスが急旋回！ スニッチか……!!? しかしハリーは動かない！ いや、箒がおかしくなったか……?」

ハリーの箒の揺さぶりはついに激しさを取り戻した。ロンとハグリットはもうすっかり青ざめ、バックヤードを疾走していたハーマイオニーも上から響くどよめきで状況の悪化をひしひしと感じた。階段を駆け上がり、腰を屈めて再び観客の間を縫う。スネイプの背中が

見え、気が逸る。足下をうろちよろされて、何人かがつんのめったり尻もちをついたりした。通り過ぎざまに、魔法で床板のほんの一部を砕いた。メキメキと軋みが広がって、数秒後、スネイプの周り三メートルくらいが崩れた。

これでハリーの飛行を妨げる者は居なくなつた。切羽詰まつて爪先だけで箒にぶら下がった態勢で下の選手にどうやって受け止めてもらおうか考えていたところだが、一気に持ち直す。急がなければならぬ。70点もの差が開き、おまけにテレンスの箒の先端すぐ近くをスニッチが飛び、今にも手を伸ばそうとしている。

ゴウツと音を立てて急降下。さつきから観衆はどよめきつぱなしだ。あそこまで酷い乱調も、ここまで鋭い飛行も皆見たことが無かつた。

「そうだよ！　これがニンバス2000だ！」

もうテレンスの横だ。もう先に手を出した方が勝つ。割つて入つたフrintトが手を出した（暴力）。箒が鳴つた。リーがフrintトを罵倒しながらフリーシユートをアナウンスした。ここでプレーを止められるのは水を差された気分だったが、箒が直つてやつと仕切り直しとも言える。ハリーは一つ咳をして、気持ちを切り替えた。

が、マダム・フーチは「試合終了」と宣言した。テレンスがスニッチを掲げて飛んでいた。

一拍遅れて、スリザリン席から爆発のような歓声上がり、グリフィンドール席からは困惑の声とヤジが飛んだ。マダム・フーチに何か投げつけようとした生徒もいた。

もちろんフィールドの中に居るグリフィンドールチームが詰め寄つた。「テレンスよりフrintトの反則が先だった」「プレーが止まっている間だからスニッチは無効だ」と口々に叫んだ。しかし、マダム・フーチはこう答えた。

「フrintトのファウルの方がテレンスのキャッチより先でした。が、テレンスのキャッチの方が私の笛より先でした」

ワケが分からない。さらにまくし立てれば「ルールの文面と過去の判例に従えば、プレーが止まるのは笛が鳴つた瞬間で、キャッチはそ

れより先だから有効と取る」ということだった。マダム・フーチも悔しそうな顔をしていた。

「20対240でスリザリンの勝利です」

リーはそれだけ言って拡声器を放り投げた。グリフィンボール生はちよつとした暴動が起こりそうなほど荒れ狂っていた。スリザリンへの暴言はもちろん、マダム・フーチへの不満。期待外れのハリールへの悪口——これは故障したニンバス2000の信頼性の問題という方向に変わった。一方スリザリン席では千切れそうなほどに旗が振られ、地鳴りのよう応援歌が響いていた。

試合から数時間経った。チームのミーティングとマダム・ポンフリーの治療からやつと解放されたハリールは夕日に照らされる校庭を横切つてハグリットの小屋へ向かっている。ロンとハーマイオニーがそこに居るとネビルから聞いた。あの二人なら余計なことを言わないでいてくれるだろう。談話室で「何でマジメにやらなかったんだ」と的を外れなことを言われるのは我慢できなかったなかつたし、逆に「ハリールは悪くない。ニンバスの故障のせいだ」と弁護されるのも嫌だった。ニンバス2000は素晴らしい箒だ。あんなの何かの間違いだ。チームメイトやマクゴナガルに言われて、次のハッフルパフ戦までにニンバス社へ検査に出すことになったけど、「異常無し」で返つてくるに決まっている。

「……本当に、最低だ」

ハーマイオニーの説明を聞いて、ハリールは中々言葉が見つからず、絞り出すように言った。

「でも、メリッサはどうか分からないけどね」とロンが付け足した。

「シエーマスが言うには、箒の動きが激しくなったとき、メリッサは君の方を見るのをやめて何か食べてみたいだし。それにトロールのときは助けてくれた」

「でも、メリッサはスネイプと仲が良いよ。頼まれたら聞くかもしれない」

そうだと本気で思っているワケではないし、もちろんそうであつて

ほしくもないが、今のハリーの口からはネガティブな言葉が出るようになっていた。

「スネイプに命令されたらやっぱり聞くのかしら」

「スネイプはそんなことやるようなヤツじゃない。命令なんでもつてのほかだわい」

三人が魔理沙がどちらの味方なのか話す中、ハグリットがスネイプまで無実だと主張しだした。

「スネイプがどうしてわざわざハリーの箒に呪いをかけなくちやならん」

「ハグリットも見たでしよ？ あの時、あの行動。瞬きもしないでずーっと何か唱えてたわ」

「それこそハリーを守ろうとしてたんじやろう」

ハリーは、まさかハグリットがこんなに分からず屋になるとは思いもしなかった。もし方がスネイプと別の誰かが呪いをかけているのに気付いても、ニヤつきながら傍観こそすれ妨害することは決して無いだろう。ロンも「スネイプをなんでそんなに信用できるんだよ。普段のを見れば分かるじゃないか。あいつって相当歪んでる」と言っただけで説得しようとしている。しかし、ハグリットは「ホグワーツの先生がそんなことするワケない」の一点張りだ。

「確かにグリフィンドールに意地悪をするところも有るが——」

「ハグリット、スネイプはおかしいよ。その、グリフィンドール嫌いを抜きにしても」と、ハリーは黙っていたことを言う決心をした。

「ハロウインの、トロールが出たとき、スネイプが一人だけ四階の方に行ってたのを見たんだ。それで、その次の日から片足を引き擦ってる。魔法でもなかなか治らない大きな怪我をしたに違いないよ」

「それか、マダム・ポンフリーの治療を受けてないのかもしれないわ。やましいから」

「足を引き擦ってるのは知らなかったが……そのときの話なら聞いちよる。スネイプもトイレに駆けつけたはずだ。怪我しとったらそうはいかん」

「大怪我したすぐは痛くない。僕だって今になって痛くなってきたも

の

ハリーはローブの下で湿布薬まみれになった横っ腹をさすりながら言った。

「トロールは僕たちが相手した。それに二階だし。だから、あの時スネイクが大怪我させるようなのは、四階の犬だけだ。スネイクは四階の廊下の先に行こうとしてたんだ」

四階の犬。立ち入り禁止の廊下の先へと続く仕掛け扉を守る、三つ頭の怪獣犬。

遡ること一か月と少し。マルフォイに騙され、フィルチに追われて夜中の校舎を逃げ回ったことがあった。そうしてハリー達三人とネビル（持ち前の不幸が重なって同行していた）は四階の廊下に迷い込んだ。その時遭遇したのが、トロールにも引けを取らない巨体と三つの頭を持つ犬である。一目散に逃げ出して事なきを得たが、もし、先に進むために対決することになったら……あの犬はどれほどに危険だろうか。見当もつかない。きつと四人まとめてあの世行きだ。片足だけで済んだ分、スネイクは優秀なのかもしれない。

「何故フラッツフィーのことを知っちゃる？」

ハグリットは驚いて茶を注ぐポーズのまま固まっていた。

「そつちこそ、あの犬を知ってるの？」

「そりゃ知つとる。あいつをあそこに置いたのは俺だ。守りの一つとしてダンブルドアに頼まれて」

「あの先に何が有るの？」

「訊かんでくれ。重大な秘密だ。代わりに俺もお前たちがそれを知っている理由を訊かんから」

「でもスネイクが狙ってるんだ」

ハグリットはこれにも「スネイクは Hogwartz の先生なんだから有り得ない」と応えた。

「お前たち、そのことは忘れるんだ。アレはダンブルドアとフラメルの秘密なんだ。先生方でも多くは知らん。アレに首を突っ込んでると、箒事故も——俺は有り得んと断言するが——スネイクの呪いも関係なく死ぬことになりかねん。ハリー、せつかくあの人から生き延び

たのに、好奇心なんかのために死に急がんでくれ。……さあ、今日はもう早く帰って寝るんだ。明日、また別の楽しい話をしようじゃないか」

「ただの好奇心なんかじゃないよ。重大なことならなおさら——」

「若いころは大まじめにバカをやらかしまうもんなんだ」

ハグリットは疲れた様子ながら、頑なに三人を追い出した。

「フラメルって、誰だろう」

城の方へ振り返りながらロンが言った。ハグリットの忠告は三人には届かなかつた。

十六話 クリスマス、朝

毎日のように最低気温を更新し続けて、12月も半ば。月始めのころは雪合戦に興じていた生徒たちも、もううんざりだと言わんばかりに室内に籠るようになった。その室内も場所によつては隙間風で冷え切り、吹雪に叩かれて窓がガタガタと騒音をまき散らしている。こんなときでも使いに出される梃たちが気の毒だ。配達を終えた梃たちは帰る前にしばらくハグリットの世話を受けることになっていた。

一方、地下は平和なものだった。夏涼しく冬暖かいというのは地下住居の特徴だ。湖の表層が凍り付いてしまったおかげで、湖底近くのスリザリン寮の窓から見える生き物は、冬だと言うのに増えているようだった。何度か水中人も横切つて行つた。灰色のザラついた肌に、獣めいた黄色い瞳と攻撃的な口元。魚人とか人魚とかというより人っぽいシルエットの魚という印象だ。ドラコは「アレが人魚？」と心底がっかりし、テレンスが「夏休みにでも地中海の人魚を見に行こう。彼女たちは素晴らしい」と励ました。

そして12月と言えば、その末にはクリスマスが控えている。ハグリットが運び込んだ大きな縦の木に、マクゴナガルとフリットウィックが飾り付けをしている。あと何週間か有るのに気が早いんじゃないかとも思うが、ここから更に城の至る所に付け加える飾りのことを考えると、済ませておかねばならないことだった。

「だつてえのに、ここは相変わらずの辛気臭さだな。しかもトツプレベルで寒い」

「換気が行き届いているのでな」

「この臭いの中で良く言うな。わざとやってんじゃないか？」

「如何にも。用も無いのに居付かれては困るのでね」

「用も無いのに居付く奴がいるのか。他人事ながら気の毒だぜ」

「……この茶は苦いな」

今日魔理沙が持ってきたのは緑茶だった。

「分かつてると思うが、私は用が有つて来てるからな」

これはいつもの冗談ではなかった。

「具合はどうだよ」

スネイプは、左と、右と、足を置きかえた。三頭犬から受けた傷は痛みも無くすっかり完治していた。

「良好だ」

「だつたらもつと良きそうな顔しろよ」

三頭犬の牙に呪いの力でもあったのか、魔法薬でなかなか治らなかった傷。魔理沙はこれを体の再生を阻害する魔法と考え「カルシウムでできた添え木と蛋白質でできた包帯で応急処置をする」という屁理屈で潜り抜けた。

スネイプはますます眉を寄せた。

「全くもってイギリス魔法界最高の学校じゃアございやせんか？ 生徒を殺す気満々の気狂いを飼っているなんて」

魔理沙はニヤあつと、機嫌がいい時のスネイプのような顔をした。

「それに四階には先生さんでも制御できない化けもんが居ると」

「つまりん愚痴は用とは言わん」

「おいおい、話の前置きくらい我慢しろよ。それに愚痴でもないし。ま、クイレルに関してちよつと面白い情報が有るから、教えてやろうかどうかかって話だ」

「この件で吾輩より知っていることが有ると？」

「さあ？ 私はスネイプ先生がどこまで知ってるのか分からないんでね。『面白い』ってのはあくまで私の主観だ。……そう睨むなよ」

全く何が面白いのか。魔理沙は横を向いてクスクス笑った。

「交換条件と言うつもりだろうが、吾輩は何も話さん。手も策も足りている」

「……本丸はヴォルデモートだろ？」

「そうかもしれないな。『全ての陰謀は、あの人』に通ず』とはよく言ったものだ」

魔理沙はあと一歩踏み込み方を間違えたようだ。スネイプは交渉は終わったとばかりに煎餅をかじり、その堅さと飛び散る破片に顔を顰めた。

「ちえっ、手ごわいな」

「君が気にすることではない。余計なことには首を突っ込まぬよう」
「この学校で史上最悪レベルの殺人鬼の釣り出しが行われようとしてるなんて、到底無視できることじゃないと思うんだがな。ハリーが”持って”なかったらもう二人は死んでるぜ」

スネイプは耳をふさぐ代わりに煎餅の破片を屑籠に集めるのに精を出している。

「それで、クリスマス休暇には帰らないのかね」

「色々と酷いな」

「吾輩ができることと言えば、君の安寧のために退学届けにサインするか、君の自宅との交通手段を整える手助けをするか、どちらかだろう」

まるで自分が慈悲深くて親切な先生だとしても言うような表情だ。

「まあ”あの”スネイプ先生からそんな親切なご提案を頂けただけでも成果と思うことにするか」

描いた絵図とは違うが利益は出たと一応納得して退散し、寮に帰ると休暇の旅行の話に花が咲いていた。一年生のくせにその真ん中にドツカリ座っていたドラコが顔を上げた。

「メリッサ、どこに行ってたんだい？」

「だいたいこの時間はスネイプ先生のところですよ」

「当たり前だ。家との交通機関の整備について話してた」

「それは公共事業的な……？」

ミリセントの憶測に、周りの生徒がハッと魔理沙を見た。ミストウッドという正体不明の家系に、よく分からない期待が広がっていた。

「いやいや、個人的なもんだ。何か知らんがむやみに飛んじやいけないことになつてるからなあ。この冬の間に対策をな」

「それでなんだけどメリッサ、27日、僕んちのパーティーに来てくれないかい？ 行き来も楽になるって話なら」

何人かの生徒が視線を下げた。スリザリンは身内には優しく、内部の仲は基本的に良いが、その背景に血筋の問題がつきまとう。ドラコ

が入ったことで、両親が魔法使いでも「マルフォイ家のパーティに呼ばれる家系かどうか」という格差の気配が以前より色濃くなっていた。

「今のところ無理だな。家のやつらは疑り深い。ここでの友達付き合いにもいつもいつも慎重に慎重にうるさいんだよ」

「メリッサに手紙が来てるのを見たことないんだけど……」

パンジーは言っているのか迷ったが、いつそ素直に訊くことにした。

「大切な連絡を鳥なんか頼るワケないだろ」

「ああ、そう」

そして「訊くほどのことでもないだろ」というような返しに何とも反応できなかった。

「まあ数年も経てば出てくることも有るんじゃないか？ 私だけで良いつてんなら参加できないでもないが、そういうワケにもいかないんだろ？」

「僕は別に構わないんだけど」

ソファに沈むように深く座って、ドラコは両親に特例を認めさせる口実を探そうとしたが、良いものは何も思いつかなかった。

「メリッサの家って、クリスマス休暇の間何してるの？」

「別に何も。クリスマスが特別な物じゃないからな。キリストなんk（配慮）……イエスさんとミストウッドとは無関係だし」

「そう……」

「それにしてもみんな盛り上がったるよなあ」

質問が一通り終わって、魔理沙はその辺の椅子の一つに腰を落ち着けた。ジェマが何とも言えない憐れむような顔をしているのは無視した。

「久しぶりに家族に会えるしプレゼントも有るし、26日は色んなお店でセールがあつてお祭りみたいになるし27日はパーティだし……なにより授業が無い」

「そう、そう。プレゼント！ ドラコのところは毎年大変だろ。善意の雪崩で怪我するなよ」

マーカスがにこやかに肩を叩いた。クイディッチの試合でグリフィンドールに勝ったおかげでこのところ寝ている間も笑顔を絶やしていないという。一回り太った感じもする。

「あいにく、もう昔に怪我しててね。最近はベッド横じゃなくて空き部屋に置くようになってるよ。皆ももしプレゼントを送ってくれるなら幅を取らないやつにしてほしい」

「ドラコさんはクイディッチがお好きですし、スニジェットでも差し上げようかしら」

「おいおい、それは保護対象の代表みたいなもんだろ」

マーカスは何のつもりかサムズアップした。

「冗談ですわ」

木を隠すには森の中という。いつぞやの絨毯の失言を隠すつもりか、ダフネは頻繁に規制品ジョークを言った。なお、全部素で言っているという噂も有る。

「それで、何を贈ることにしたのかね？ 贈る気が有ればの話だが」

休暇初日の夕方。隠し森の、魔法がかかっていない端っことで、魔理沙とスネイプはちよつとした小屋を作る作業をしていた。中に暖炉を作り、魔法界で『姿くらまし』に次ぐ瞬間移動方法である『煙突飛行ネットワーク』を導入しようという魂胆だ。

「まあそれなりに世話になってるし、歳暮代わりに送るつもりだよ」

「歳暮……」

「そのまま、年の暮れの贈り物。この一年お世話になりましたってな。まだ半年も付き合い無いけど」

「どこの文化だ」

「私の周りの文化だよ。ま、ドラコには適当にペンダントでも。……さて、これで十分だろ」

二人は何歩か後ずさって小屋の全体を見た。魔法で土を盛り上げて形を作りそのまま高質化させるという荒い方法のために、全体に茶色く丸っこかった。しかし意外にも、これがプレッツェル・ステイツクが刺さった菓子パイのような見た目で可愛らしい。スネイプは顔

に出さない程度に驚いたが、魔理沙は初めから計算していたようだった。

そうして最後に近所の子供のたまり場にならないよう、茨の繁みで覆った。魔理沙はこの作業の途中、可愛らしい見た目にする意味がなかったことに気付いた。

「ともかく、あとは手続きだけだよな」

「では、行こう」

スネイプは拳に握った手を差し出した。手首を掴めという意図だろうが、魔理沙は無視してその根本の上腕に抱き着いた。握手さえ避けようとしたスネイプへの天邪鬼だ。

ヒュツと飛んで、ダイアゴン横丁のレンタルフクロウ便から魔法省へ申請の手紙を出し、煙突飛行でホグズミードへ。魔理沙はキラキラした粉の一掴みの半分を暖炉の火に落とし、半分はさりげなくしまいだんだ。ポツという音と共に火が大きくなって、色もエメラルドグリーンに変わった。足を踏み入れる（スネイプと違って屈む必要はなかった）。炎そのものの温度こそ人肌よりすこし低いくらいになっているものの、煤と灰は熱く煙たいままだ。涙と咳を堪えながら「ホグズミード」と唱えると、今度は高速回転。料理屋の大型グリルの上に優雅に着地したときには煙突飛行が大嫌いになっていた。

ホグズミード村は魔法族しかいない村では最大の物だという。イタズラ用具店やお菓子屋、イギリス一の幽霊屋敷があるという噂を知っていて後ろ髪を引かれたが、スネイプは問答無用という様子で通り過ぎてしまった。

そうして村の外れの小道からホグワーツへ。一年生たちが使う道ではなく、入学のときに上級生たちが向かった方だ。少し進むと三倍ほどの幅の道に出た。こつちもぬかるんで凸凹していたが、轍が見えるのが大きな違い。馬車道だ。すこし突っ立っていると、ガタゴトと揺れながら、古めかしい馬車が一つ到着した。

「こりや趣味の良い馬だこつて」

魔理沙の口から乾いた笑いがこぼれた。馬車そのものは「古めかしい」で片づけられるが、繋がれた馬は古いとか年寄りだとかを軽く通

り越してまるでミイラだった。骨の浮き出たガリガリの黒い馬の身体に蝙蝠っぽい羽とトカゲじみた頭くつついている。トドメに目は死んで数時間経った上に熱を通された魚のように濁っていた。

「見えるのか？」

「見えない感じのアレなのか？」

「セストラル……T—H—E—S——。図書館でも調べるが良い」

黴臭い箱に閉じ込められてグラグラ揺さぶられる道中は決して快適とは言えなかった。少し前の煙突飛行のこともあり、魔理沙は少し無口になっていた。スネイプはやたら饒舌だった。たぶん嫌がらせだから降りるときに足を踏んづけてやった。

ホグワーツに残っている生徒も教師も本当に少なく、毎日大賑わいだった食事時の大広間も、それぞれの長机に数人がポツリポツリと座っているだけだった。クリスマスを家族で過ごさないのは何かしら”事情”がある場合くらいだ。

そういう意味で、ウィーズリー兄弟が残っているのは意外、さらに図書館に居るといえるのは輪をかけて不思議だった。ハリーと一緒に、近代魔法史や偉人伝の本を広げて唸っている。

「父さんと母さんが兄さんの一人に会いに行くんだ」と、ロンが答えた。ロンの兄の一人、元グリフィンドル首席且つシーカーのチャリーはドラゴン保護の仕事のためにルームマニアに居た。

「それで、突然勉学に目覚めた理由は？ 特に歴史は不人気な教科だったと思うが」

ハリーたちはとても具合の悪いような顔をした。魔理沙が持っている本の表紙絵が気味の悪い闇の生物の蠢く姿だったからではない。「えーっと、僕たち、ちよつと成績が危ないんだよね。だから自主勉強をしてるんだ」

「危ないならもう少し授業範囲に合った勉強をした方がいいと思うぞ。授業はまだ紀元にも入ってないくらいだ。すっぽり2000年近く抜けてる」

「あー、そうだね、まあ、興味有る範囲からってことで……」

ハリーたちはクイディッチの後、ハグリッドの口からこぼれた「フ

ラメル」の項目を探し回っていた。しかし、どんな人で載るならどんな本なのか分からない。今では近代史に関しては専門家でもなかなか見ないような書物にまで手を出していた。

そしてそれはスネイプが狙っている四階の宝が何か調べ、更にはそれを阻止するためだ。

ここで問題なのが、メリッサがどちらの味方なのかという話だ。今のように明るくてグリフィンボールにもフレンドリーだが、一方でスリザリン生でも他に無いほどスネイプと親しい。本当ならメリッサにもフラメルについて訊きたいくらいだが、嗅ぎ回っていることがスネイプにバレるかもしれないと考えると出来ない話だった。

「勘付かれたかな」

魔理沙が立ち去った後、ロンがハリーに耳打ちした。

「分からない。……でも、調べ方を見直すにはいいタイミングだと思う」

「見直すって、どうやって？ 聞き込みとかはできないし……今だってマダム・ピンスにも訊かずにやってるんだぜ？」

ロンはもう諦めようと切りだすつもりだ。

「ハグリットがあんなに一生懸命になって隠すんだ……やましい物かもしれない」

ハリーは図書館の奥まった一角に目を向けた。

ロープで仕切られた向こう側、許可証を持った生徒だけが閲覧を許される本の棚だ。強力な闇の魔術や危険な魔法薬の知識を必要とする極限られた上級講義を受ける際に使用する。もちろん、先生たちがハリーのためにサインしてくれるはずはない。

「パーシーが堅物じゃなきや監督生の信用を活かしてくれたかもしれないけど、残念ながら」ああだ」

「フレッドとジョージからイタズラのノウハウを教えてもらえば……」

「たぶんそれができてたらもう僕らは」お宝」にお目にかかっていると
思うな。ここって、いかにもあの二人がめっちゃめっちゃにしたがりそうな
落ち着いた場所だもの」

フラメル調査が行き詰って、二人はいっそクリスマス休暇を満喫することにした。人が少なくなつて談話室の暖炉も寝室の大部屋も好き放題に使えるようになって、それこそ城主気分でゆつたりと過ごした。

そんな中で、二人が熱くなつたのはチェスだ。

駒が一つ一つ生きていくようで、言葉を話し、プレーヤーの命令で動いた。ロンの駒はおじいさんのお古らしく、少しくたびれていたが正に歴戦の勇士のようで、ロンの言葉に子気味良い短い返事をして応えた。反対に、ハリーはシェーマスから借りた新しい駒を使つていたのだが、これが酷く反抗する。初心者ハリーを信用せず、大駒に至つては見下してすらいふようだった。これは交代でプレーした魔理沙がクイーンに無慈悲で惨たらしい制裁を加えるまで続いた。そうして従順になつた部下と共に挑んだ戦いで、ハリーはロンとの実力の差を痛感させられた。ポーン一つの対価にルークやビショップを払わなければならないのは、駒が言うことを聞かないせいではなかつたのだ。

そしていよいよクリスマスの朝。

厳めしく重々しいスリザリン寮に、突如としてプレゼントの山ができていた。その目に刺さるような鮮やかな色合いと何とも言えない幸福感に、魔理沙は「乙女の部屋に不法侵入されてるじゃないか」と考える間もなく跳ね起きた。

一つ手に取る。艶のある深い緑色に銀のリボン……スリザリンカラーの包はドラコからの高級箒研きセットとクイディッチプロリーグのスーパープレイ写真（もちろん動く）集だ。魔理沙が箒改造に凝っているのをチャンスと見てクイディッチに引き込むつもりらしい。それに対抗したのか、ダフネは空飛ぶ絨毯の切れ端（もしくは空飛ぶ厚手のハンカチ）とジンニーヤーの煙人形（そのまま、煙でできた人形）を贈つてきた。いずれもアラブ世界由来のものだが、キリスト教の行事であるクリスマスにはどうなのだろう。アラブとイスラムが完全なイコールで繋がれるわけではないし、魔理沙本人がなかなか気に入ったから、何も問題無いと言えそうなのだが。

それにしてもこつちから二人に贈った手作りペンダントに比べてかなり金のかかってそうなのが来たな、と苦笑した。

あとはパンジーからそれひとつで香油を塗ったように艶が出る髪ブラシ、ミリセントからの背伸び薬は余計なお世話……他にも、魔理沙からも贈った人やそうでない人まで色々なスリザリン生からのプレゼントがあった。さすがに関わりの薄い間でのプレゼントはしよぼかったが、それでも全体でプレゼントに使った金額は莫大なものになるだろう。

しかしスネイプに贈った薔薇の香りとオーラの的なものが出るシャンプーのお返しはついに見つけることができなかった。

同じとき、スリザリンほど社交辞令にうるさくないグリフィンドール寮でもちよつとしたプレゼントの山ができていた。それをハリーとロンが口々に感想を言い合いながら崩していく。

ハグリットの横笛は見た目こそずんぐりしていて粗削りでも口にあててみると違和感はそんなに無かったし、音は鼻の声のようで深みが有った。その次に開けた薄っぺらい封筒の中身はハリーの叔母夫婦、ダズリー家からの50ペンス硬貨だった。これはキャッチしないタイプのコイントスの後ロンのものになった。マグルのお金だし、特に七角形なのが面白いらしい。反対に、ハリーはチャーリーから口ンへ贈られたドラゴンの爪に心奪われた。しかし、これはロンもとても気に入っている様子だったから、ハリーにとって1ペンスの有難味も無かったコインと交換で買い取ろうとは言いだす気にもならなかった。

ロンとハリーに、同じ包みが何組かあった。一つはハーマイオニーから百味ビーンズと、蛙チョコの大箱。もう一つはメリツサから毬藻。クリスマスプレゼントはもらうものだとはばかり思っていたから、まさか同級生から来るとは考えていなかった。ロンは「来年からは僕らも贈らなきゃだめかな」と複雑そうな顔をした。そして大きくて柔らかな一つは、ロンの母親であるモリー・ウィーズリー手製のセーターで、ハリーがエメラルドグリーン、ロンが栗色だった。たくさん手作りお菓子も入っていた。母親のお節介癖にロンは少しはずか

しそうだったがハリーはとても嬉しかった。

最後に、ハリーの方に一つの包みが残った。ダーズリー家のゴミと負けず劣らず質素な包みで、かなり軽い。あまり期待する気にもなれず、ぞんざいに破いた。その裂け目からヌルリと銀色のものが滑り出し、床に広がった。触ってみると、液体ではなかった。とても滑らかで空気か水かと間違えそうになるが、確かに布だ。とても薄い。腕にかけて広げると、なんと向こうがきれいに透けて見えた。

……腕ごと。

「それ、『透明マント』だよ……!」

ロンの言葉は興奮のあまり逆にゆっくりだった。

「でもなんでそんなに高いもの……ニンバス2000みたいにマクゴナガル先生かな」

ハリーがマントを腰に巻いたり頭から被ったりしている間に、床に落ちていたカードをロンが読み上げた。

『君のお父さんが亡くなる前にこれを私に預けた。君に返す時が来たようだ。上手に使いなさい。メリークリスマス』……名前が無いよ。まさか『メリークリスマス』って名前じゃないよね」

「父さんの……」

「……だとしたら、これ凄いよ。めちやくちや」

「どういうこと?」

「聞いた話だけど、透明マントって、透明になる力がどんどん無くなるらしいんだ。普通……いや、透明マントってだけで”普通じゃない”高級品なんだけど、普通、何年ももたないんだよ」

その感慨に浸る間もなく、ドタドタとドアの外で足音がした。ハリーが反射的にマントを布団の下に隠したのと殆ど同時にフレッドとジョージが入って来た。二人もウィーズリー家のセーターを着ていた。

その後でパーシーも一緒になって大広間に行く間、ハリーはマントを隠して正解だったと考えていた。

——フレッドとジョージは、きっと父さんのマントを僕より上手く使ってしまう——

十七話 クリスマス、夜

信仰も感慨も無いが、ともかく魔理沙はクリスマスを大いに楽しんでだ。

膨大な数のプレゼントの確認が終わって大広間に向かうと、見計らったようにブランチが出揃ったところだった。七面鳥のロースト、ポテト、チポラータからメットヴルストまで各種ソーセージ、豆のバター煮、肉汁や果実のソース……どれもこれも素晴らしい見た目、匂い、そして圧倒的な量。ここに居るみんながみんなクラツプとゴイルのように手当たり次第に掴んで口に投げ入れても、まだまだ次食べるものを見つけるのに一切苦労しないだろう。

もちろんそれをただ座って大人しく食べるわけではない。スリザリンの貴族さん方も居ないし、行儀にうるさい先生たちはワインを飲んで赤ら顔。切り分けなんて面倒なことはせず、好きなトコから齧りつける。料理といっしょに用意されていたクラツカーが何の脈絡も無くひっきりなしに放たれた。飛び出した光と金銀のテープは空中に舞ったまま落ちないし、クリスマスプレゼントの追加とばかりに踊り人形やその他細々とした玩具も特典で出てくる。そして何故かハツカネズミも飛び出して、チューチュー賑やかに鳴きながら走り回った。これには猫のクセにいつも飼い主に似た湿気り顔のミセス・ノリスも機嫌を良くしていたようだった。

魔理沙と双子が撃ち合ったクラツカーの煙のせいであるで雲の中にいるようになり、おまけも膨大な量になってそれぞれ両腕に抱え込んでも持って帰れない程になった頃、無限に思えるほどおかわりされていた料理はやっと打ち止めになった。しかし魔理沙たちはまだまだ撃ち足りない。ハリーとロン、それにバカ真面目に「新学期の予習をする」などとたわごとを言っていたパーシーも引つ張って雪合戦に向かった。

「全く、魔法も少しくらい使えばいいのに『魔法禁止』なんてルールを律儀に守っちゃってまあ」

「僕らが『ぴゅーん、ひよい』してたのに気付かなかったのかな？」

雪合戦は猛烈なものだった。始まったとたんにあちらへこちらへ玉が飛び交い、いちいち注意してはすぐに目を回してしまっていただろう。ビーターの双子はもちろん狙って当てるのが上手かったし、魔理沙はパーシーを盾にした。スリザリン生であることと、年下の女の子であることの間で揺れるパーシーの目の前で素直にお願いするそぶりを見せれば天秤は容易に傾いた。そしてハリーもシーカーらしい俊敏な身のこなしで玉を掻い潜った。その代わり雪の地面を転げまわって結局ぐしょ濡れだったが。

フレッドはいつのまにか前から後ろから集中狙いされて雪だるまになったパーシーからハリーたちの方へ目を向けた。

「つい昨日か一昨日まではバカ真面目がもう二人居たよな」

ジョージがニイツと笑い、魔理沙も「歴史……だったよな。誘ったのは私たちが、雪合戦なんてしてていいのか？」と瞳を怪しく輝かせた。始めは魔理沙と双子で争っていたはずなのに、パーシーに続いてハリーたちまでも結託して襲うつもりだ。

「えーっと、まあ、一通りやったし……」

「おっほん！ では、これよりテストを開始します」

雪の弾丸のハンターたちは、マクゴナガルのマネをして言った。

「答えられなかったり間違えたりした場合は罰として一発当てますので、そのつもりで」

「第一問」

「中世の魔女狩りでワザと何度も火あぶりになった人物と言えば？」

ハリーとロンは顔を見合わせた。答えられない。「フラメル」という文字を探してページをめくり続けていただけで勉強していたわけではないのだから。パンつと二人の後頭部に雪玉が弾け、おまけにその反動で額をぶつけ合わせそうになった。

「第二問」

「小鬼の反乱で本部となったのは？」

パアンツ

「第三問」

「1932年、ドラゴンがマグルを襲ったのは『何事件』か」

このままではパーシーと同じ結末を迎えてしまう。ロンが脳味噌から冷や汗といっしょに言葉を絞り出した。

「ま、ママレード事件」

「それはウィーズリー家のパーシーとビルとの間で二週間続いた喧嘩のことですよロン・ウィーズリー」

バシーン

「第四問」

「ホグワーツ創始者四名のファーストネームを全て言いなさい」

「ゴドリック、サラザール、へ、へれ？」

「たぶん、ヘルガだったと思う」

「そう、ヘルガ！ レイブンクローは……」

「……」

べしゃっ

バシッ

パンッ

……

「おいおい、本当に何やってたんだ？」

六問目辺りから三人は試験官らしい演技をするのをやめ、十問目には完全に飽きてしまった。魔理沙はともかく、勉強嫌いな双子の方は質問のネタも切れかけた。

「じゃあサービス問題だ」

「みんな大好き、今朝のパーティーでも陽気で奇怪な冗談をかましてたダンブルドア校長は何で有名？」

「何って……」

「ホグワーツ校長として……」

ハリーとロンは、一問目とは全く違う理由で顔を見合わせた。これは紛れもない本当のサービスだ。

「ホグワーツ校長、近代の魔法使いの中でもっとも偉大だと言われている、グリンデルバルトを破ったこと、ドラゴンの血液の12種類の利用法の発見、ニコラス・フラメルとの錬金術の共同研究で有名!!」

ハリーにとつては自分を魔法界へ誘った人物の姿を初めて教えてくれた印象深い品、ロンにとつてはコレクションを妨げるように何度も現れる厄介な品、ダンブルドアの蛙チョコカードの文面。二人は一目散に図書館へ駆け出した。

「あ、おい！……どうしたんだ？」

「さあ？ あのハーマイオニーとかいうマジメちゃんと付き合うようになってから変なんだ」

今度は魔理沙たちが顔を見合わせて首をかしげる番だった。

「ばあつかばかしいぜ！」

ダンブルドアの伝記を机にたたきつけながらロンは盛大に悪態をついた。「ダンブルドアの知り合い」という手掛かりしかなかったのに、どうして自分たちはダンブルドアの周りを調べようとしなかったのか。この本を見れば、前書きから錬金術師、ニコラス・フラメル云々と書いてある。

「どうしてこんなこと、質問されるまで思いつかなかつたんだろう」

「言われてても気付いてなかつたよ」

ハリーはため息をつきながら「マグルですら知っておくべき超偉大魔法使い50人」を閉じた。

ニコラス・フラメルは665年前生まれの錬金術師で、「賢者の石」によって不老となった。しかも活発に活動していたのは彼の人生の初めの方であるため近代“生まれ”の魔法使いを扱った書はもちろん、最近の出来事ともあまり関わりが無い。

「近代つてことに拘らなければ、どんな歴史書にも載ってるよ」

ロンはまた嘆いた。マダム・ピンスが迷惑そうに睨んできた。

「僕たちは勝手に『ダンブルドアの秘密の友達』だと思ってたんだ」

「700年前生まれの超有名共同研究者だったね。ばあつかばかし」

ハグリットが隠したことから勝手にダンブルドアが秘密にしている、つまり「ダンブルドア」という言葉と並んで名が出てくることは無いと決めつけた。そのくせダンブルドアの知り合いなのだから最近（生まれ）の人と決めつけた。思い返せば進んで避けていたような

ものだ。

「でも四階の廊下の先にあるものが何か分かったよ」

「賢者の石、『永遠の命と黄金の源』だね。そんなの誰だって欲しい」

ハリーは学用品を買い揃えにダイアゴン横丁へ行った日、銀行でハリーの両親の遺産を取り出すついでに付き添いのハグリットが何やら小さな包みを取り出すのを見ていた。そして新聞にその金庫に盗みが入ったという記事が書かれ、しかし小鬼たちがなにやら含んだ返答をしていたことを思い出した。あの大きさ、まさに石ころだった。あの日、ハグリットは魔法界の案内をすることと同時に重要な秘密の任務を行っていたのだ。

賢者の石。それさえ手に入れてしまえば、いくら裏切者の盗人としてホグワーツから追われることになっても最悪負けはしないし新しい手下も作り放題だ。野心的で非常識、そしてチャンスが有る人物なら狙う価値は十分に有るだろう。そしてスネイプはその全てに当てはまっているように思えた。

「それで、どうするのさ。この先7年どころか永遠にグリフィンドル生が虐められるかもしれないと思うと、僕は何としてもスネイプを止めなくちゃならないと思うけど」

「そう言われると……どうしよう」

二人はやっぱり行き詰まってしまった。ハロウインの夜の怪我についての証言だけでなく、クイディッチ場でスネイプの怪しい行動を直接見たハグリットでさえスネイプの肩を持つ。それほど一年生と教授の力の差は大きい。もちろん直接戦ってもそうだろう。

「とりあえず、クリスマス休暇のうちにフラメルは誰なのか分かったんだ。予定よりは良いんじゃないかな」

「そうだね……ハーマイオニーが戻ってきたら、何か方法を考えてくれるかもしれない」

「それか、ハグリットがまた何か口を滑らせてくれるか試す？」

善は急げと言う。少し遅くて膨大だった朝食のおかげで昼食が不要だったために開いた時間で、二人は早速ハグリットの小屋を目指し

た。少し先に見える開けっ放しの大扉からあと数歩も進めば真っ白の校庭へ、というところで横の細い通路から声がかかった。

「お、用事は終わったのか」

二人の背筋がビクツと跳ね、さらに振り返った瞬間凍った。メリツサの隣には事も有ろうにスネイプが居た。

「この寒い中どこへ行くこうと言うのかね？」

「えっ、ええっと……」

スネイプの顔でぎゅうううツと皺が深くなり、二つの目がギラリと動いた。ああ、まただ。今スネイプの頭の中ではグリフィンドルから減点する屁理屈が高速回転しているに違いない。しかしハリーは真つすぐ見返した。自分を殺そうとした奴、その野望をどうにかして壊そうとしている自分。今や明確に敵どうし。嫌がらせなんて当たり前だ。先生の立場を乱用するなら勝手にどうぞ。

そうして覚悟を決めたハリーだったが、スネイプの声より先に魔理沙が割って入った。

「なくんか面白そうだな？ 私も混ぜてくれよ」

「い、いや。丁度メリツサたちの雪合戦がまだ続いているか見に行こうと思ってたんだ。それで見たところ終わってるみたいだね。僕たちは談話室に帰るよ」

「はくん？ あやしくぞお？」

魔理沙は猫のように、或いは蛇のようにハリーに纏わりついた。女の子にこれ以上ないほど近付かれて、カアツと顔が熱くなったが同時に悪寒が。「いや本当に何でもないので」と押し退けて、なんとか籠絡されずに済んだ。

「ちえー、はじめかー？ 先生に言うぞー。なースネイプ先生」

「バカバカしい」

「うわ酷でえ四面楚歌。……って、もう居ない。小芝居くらい見て行けばいいのにな」

「私の言葉は全く本心だ」

「雪玉よりよっほど冷たいぜ」

夜。デイナーとクリスマスケークが腹の中で完全に溶け切った頃、魔理沙はまるで彼女自身が目覚まし時計になったかのようにパツと跳ね起きた。そのまま杖を引つ掴み、いつもの服を魔法で黒く染め上げて足音も無く地下通路を抜ける。おもむろに床へ手をかざすと、埃のような白いものが微かに道を描き出した。

校庭への大扉前の通路……昼間ハリーたちと鉢合わせたところだ。

光の筋は魔理沙が進むにしたがって次々とその先を示した。

いわゆる、お化けキノコの一種である。一定強度の魔力に反応しておできみたいな小さな子実体を生やし、さらに胞子も魔力によつて僅かな光を発する、ただそれだけのものである。この瘴気も水分も少ない石床の上では撒かれた胞子も弱っていつて徐々に光りにくくなり一日も経てば死んでしまうが。

……つまるところ探偵ごっこに最適だ。散らばり方でその場に留まった時間が分かり、強弱でいつ通ったかが分かる。魔理沙は数時間前のハリーの後を尾行しはじめた。

自分たちと別れて速足……曲がった角で少し立ち止まり、走り出す。そのままグリフィンホール寮前へ。交差点のように道が重なっている。魔理沙は眠りこける太った夫人の前で、一番古い道を選び出した。光が細く微かだが、前後の密度が高い。歩く速さは普通だが、元の格好より何か上に羽織っていったのだろうか。ともかく、さっきの道のすぐ横を通って、また大扉前へ。さらに前後がつまり、そろりそろりと忍び足だったことがうかがえる。……にしても、ちよつと不覚をとった気分になる。別れてから本当にすぐだ。まだこのタイムニングなら私とスネイプはすぐそこでバカ話を続けていたはずだ。キノコくつつけて慢心していたか、忍者稼業はまだまだ未熟なようである。

雪明かりに難義し地面に顔をくつつけて反応を探りながら進むと、今度はハグリッドの小屋に着いた。スープでもご馳走になりになり上がり込みたい寒さだがこの夜中では説教を喰らうことになるに決まっている。道は折り返して、再び校舎へ。石畳に上がったところの様子を見ると、それなりに長い間外に居た（つまり小屋に居た）ようだ。一

度察へ戻って、デイナー。また戻って、数時間後に出かけている。

「ハリーも規則破りか」

もう一本、一時間前くらいの道が有るから、ハリーはもう戻っているのだろうか……いやはや、ドラコにそのかされたでもなく。英雄殿の自主校則違反はどんな顛末だったのだろうか。

道はそろそろと階段をなぞり、四階へ。更に奥へ奥へ……そして扉に突き当たった。

「おいおい、ここは……」

魔理沙はさすがにたまげた。

「禁じられた廊下……ってやつじゃないのか……!?!」

しかも、ハリーはこの中に入りさえしたようだ。取っ手に手をかける。鍵がかかっているようだ。ハリーが鍵を……？ まさか、な。魔理沙は杖をそつと揺らし、「アロホモラ」と囁いた。こつちの方が「まさか」だ。こんな簡単な呪文で開いてしまった。

中では、黒々とした巨大な三つ頭の犬が待ち構えていた。スネイプの話から想像してたより巨大で俊敏。何かワケ有りで置いてるモノとやり合うワケにもいかない。すぐに跳び退いてドアを閉めた。

しかし……離れる道を見れば……ハリーはさっきの自分よりずっと長いことこの中に居たようだ……。

その後、ハリーはフラフラと夜の散歩を楽しんだようだ。塔と塔をつなぐ頼りない渡り廊下や壮大なタペストリーの前で立ち止まってみたり、長い長い螺旋階段の途中で引き返したりしていた。何かに追われたのか、そこから走って走って——

そして再び、扉へ突き当たった。

さっきのこともあって、少し緊張しながらノブを捻る。今度は何事も無く開いた。端に寄せられた椅子と机、埃が溜まらないようにひっくり返された屑籠……殆ど普通の空き部屋だ。

しかし、魔理沙を拍子抜けさせはしなかった。

夜宙を映した絵画だ——。魔理沙は引き寄せられるように、部屋の真ん中にぽつんと置かれたその前に足を進めた。輝かしい満天の星空を描いた薄っぺらいものじゃない。虚空が見える。”本物”かも

しれない。無意識に手を伸ばした。無情、冷たく堅い感触が宙と魔理沙を隔てた。絵画でも本物でもない、いつかどこかで見かけたテレビジョンのようなものと解釈した。そうして初めて魔理沙はその金で飾り立てられた枠に目を移した。

ERISED STRA EHRU OYT UBE C
AFRU OYT ON WOHSI

『私はアナタの顔ではなく心の望みを見せる』か

再び夜空に視線を向ける。

確かに、この闇の向こうに言いようの無いほど惹きつけられる。が、何故だろう？ 少なくとも「世界は無に還るべきだ」とかの物騒な考えは持っていないはずだが。

「望みが無いヤツにはどう見えるんだろうな……」

「そんな人が居るかというところは怪しいが、そのときは、ただの鏡じやろうのう」

魔理沙の体はビクリと固まった。浮かれていたのか、声をかけられるまで気付かなかった。それも目の前に『望み』が映し出されているこんな時に。だが、体が動かなかったのをいいことに、全く動じていないふりをした。

「鏡なのか。その辺に有る魔法の絵の仲間かなにかかと思った」

「大抵はその秘密に気付かずとも鏡だとは思うものじゃが……あべこべの珍しい例じゃな。君の姿は映っておらぬのか」

ダンブルドア……ホグワーツ校長にして、変身術から決闘、錬金術まで、占い学以外のあらゆる分野に名を残す近年で最も優れた魔法使い。

そして、クイレルという危険人物をあえて野放しにしている喰えない男。……それが悪いとは言わない。が、優しいだけのおじいさんでは決していない。

私の見ているモノが見えていないようなのは少しだけ救いだけど……。

「能力は上に書いてあるんだから簡単だろ。嘘じゃなけりや、の話だが」

ダフネの謎のアラブ推しのおかげで、文章を右から読む発想は割とすぐに浮かんだ。鏡ということも加われば、なおさら反対読みには納得できる。

「タチの悪いものだらけだな、ここは」

魔理沙は尚も鏡の方を見たまま言った。

「いつでも新しい発見が有る」

「こんなに次々吹っ掛けられても困るんだけどな」

「しかし君自身も積極的に探しておるじゃろう。気づかずに過ごしてしまう者のほうが多いよ。君に、いつ思いもしなかったような質問をぶつけられるかもしれないと身構えている先生も居るくらいじゃ」

ダンブルドアは呑気に「ほほほ」と笑い、同じ調子で質問を投げかけた。

「君の素晴らしい感性は、このイタズラモノをどう見るかね」

『何が見える』じゃないんだな」

「レディに対してそれはちと不作法かと思うての」

「ならこれそのものが不作法だぜ。『鏡よ鏡』って呼びかけられてから応えるのが礼儀つてもんだ」

魔理沙はやつと調子を取り戻して冗談をひねり出した。しかしやはり目の前の鏡は鏡の仕事を放棄していて、うまく表情も解せているか確かめることはできなかった。

「まあ、ちよつとした話のタネにはなりそうだがな」

「他の者に教えるのは禁止じゃ」

変わらず穏やかながら、少し厳格さを含ませてダンブルドアは言った。

「発見を発表できないのはもどかしいことじゃが、夜間徘徊のバツとしては軽い方じゃろうて」

「そうかもな」

魔理沙は踵を返して真っすぐ部屋を出た。流石にもうハリーの尾行をする気にはなれない。それどころか廊下を何メートルも歩いても、何となく視線で追われている感じがする。

「流石に格つてもんが有るか」とぼんやり反省しながら、魔理沙はベツ

ドのやわらかさに意識を沈めた。

十八話 不運

クリスマス休暇ももう終わり。新学期の一日前に生徒たちが戻ってくる、雪に閉ざされていたホグワーツは息を吹き返したようににぎやかになった。

ダフネは魔理沙のクリスマスプレゼントを早速着けてきたが、ドラコは「男の僕がつけるには可愛らし過ぎる」と箱にしまったままらしい。クラップとゴイルはまた一回り太くなった。ともかく、魔理沙たちは特にクリスマスのことを中心にこの休暇の思い出話に花を咲かせた（一応、あの鏡のことは伏せておいた）。

一方でハリー、ロン、ハーマイオニーの三人はそう気軽でいられなかった。顔を合わせるなり、ニコラス・フラメルと四階の廊下について相談を始めた。

「賢者の石、ね……」

まずハリーたちがハーマイオニーに、この休暇で新しく分かったことを話した。ニコラス・フラメルは錬金術師で、四階の廊下の先に有るのは『賢者の石』という不老と黄金の素であること。そして、それを守るために（それが賢者の石だと知らされているのはごく一部だが）先生たちがそれぞれ魔法の罫を作っていること。これはクリスマス後の午後、ハグリットのところに行って聞き出した。一度は魔理沙に声をかけられてしまったが、その後透明マントで突破したのだ。あの三頭犬は多くの罫のうちの一つだった。そして、こともあろうにスネイプも罫を仕掛けた一人らしい。

「じゃあ、スネイプの分以外の魔法の罫が解けなければ良い……それか、無理に解こうとしている証拠を掴めばいいのね」

「ハロウインの夜にあの化け物犬がやってのけてくれてただけだなあ」

「脚の怪我だね。もう治っちゃったみたいだけど」

「でも、少なくともあの犬の部屋、つまり一番初めの罫も抜けられないってことよね。まだ余裕はあるわ」

そういうワケで、三人はスネイプを出来る限り見張ることにした。

四階の廊下に近付かないかはもちろんだが、授業なんかでどうしても限界がある。そんな時は様子だけでも注意深く観察した。今後スネイクが怪我、特にバカでかい噛み傷を受けるようなことが有れば、またあの犬にやられたということだ。ハグリットに言ってみせれば、今度こそもしやと疑ってくれるだろう。他の罫の仕掛け人と仕組みが分かれば、同じように報告できるかもしれない。

が、他の先生はハグリットはどうっかきりしていなかった。ハーマイオニーがそれとなく探ろうとしても、フリットウィックは完全にとぼけていたし、マクゴナガルは逆に「どうしてそんなことを気にするのか」と詰め寄って来たほどだ。相対的に、とても頼もしかったはずのハグリットと怪物がとても簡単に破られてしまいそうに思えてきてしまった。

そうしてハリーたちが重要な一步をイマイチ踏み出しかねているうちにしばらく経ち、生徒たちが授業と大量の課題のやつつけかたを思い出した頃、校内はある噂でもちきりになった。次のクイディッチの試合、グリフィンドール対ハッフルパフ戦の審判をスネイクが務めるというのだ。

「どうとう直接的な手段に出たね」

スネイクは、グリフィンドール——特にハリーに嫌がらせをするために審判になったに違いないとみんな思っていた。ドラコは面白くてしかたないという様子だ。スリザリン寮の緑の灯りのせいも相まってとても意地悪そうに見える。

「ポッターに恨みは無いけれど、良い見世物として楽しませてもらうよ」

「それも良いが、私は一度普通のクイディッチを見てみたいもんだ」
魔理沙はぼやかした返事をした。スネイクの嫌がらせがこれまで也十分に直接的だったことと、ドラコがハリーのチーム入りで思いつきり逆恨みしたことを指摘するという選択肢もあつたがそれはやめておいた。

魔理沙はスネイクが審判になった本当の理由を知っていた。スネイクはハリーを守る役目を負っているのだ。前回のようにハリーの

様子がおかしくなるようなことがあれば、即座に試合を止めるのだろう。本人はクイディッチが嫌いらしくとても不本意そうにしていた。そういった苛立ちも含めて、結果的に皆の予想通りハリーへのちよつとした嫌がらせも行われるだろう。

「それにしても不思議ですわね。スネイプ先生つたら、グリフィンドールのこととなると随分大人げ無くなりますもの」

魔理沙が「こりやスネイプとグリフィンドールとの和解の目は無いな」と苦笑いしていると、ダフネがふと疑問を口にした。魔理沙はおつ、と僅かに姿勢を正した。それは自分も少し気になっていたことだ。

そしてその答えはドラコの口からあっさりとこぼれ出た。

「それはそうさ。スネイプ先生は学生時代、グリフィンドールに散々迷惑をかけられたからね。特にポッターの父親は、成績優秀な先生を敵対視してバカな仲間といっしょに嫌がらせを繰り返したそうだ」

なんと、意味不明な敵意は親の代の問題だったらしい。……赤ん坊のころに亡くなった親とのイザコザを子供に当ててるとか、あまり聞きたくない話ではあったが。

「そうだったのか……。すごいなドラコ。なんで知ってたんだ？」

『先生のグリフィンドールいじりが面白い』って手紙に書いたら『当然だろう』って。僕の父上が学生時代に先生と親しかつたらしくてね」

その場はそれで流れたが、魔理沙が後で当時を知ってそうな絵画たちなんかから情報を集めたところ、他にも色々なことが分かった。

ドラコは「バカな仲間」と言ったが、ポッターの父親、ジエームズとスネイプは共にトップクラスの成績優秀者だった。実力で敵無し、クイディッチチームでもエースとグリフィンドールのスターだったジエームズは、因縁の通りにスリザリン嫌い。中でもひととき陰気ながらに尊大で闇の魔術に傾倒しており、しかも自分に対抗できるほどの能力を持っていたスネイプを標的にちよつかいをかけまくっていたそうさ。獅子と蛇の対立の伝統というのは凄まじいもの。一年坊主のハリーとドラコですら「さあ決闘だ」というところまでいったの

だから、それが卒業までとなると……。スネイプたちの戦いの中で生まれ、ホグワーツ生が今日でも使っている攻撃の呪文も一つ二つではないという。

そうやって青春のほとんどを対グリフィンボール、対ポッターに捧げていたのだから、今のスネイプがああなつてしまったのも（もちろんはた迷惑に変わりないが）仕方がないのかもしれない。いくら魔法界の英雄とはいえ憎い憎いジェームズの得意だったクイディッチで、その息子のお守りとはどういった拷問か。命じたのはダンブルドアだろう。そもそもクイレルを飼っていることといい、魔理沙はますますダンブルドアという人間が分からなくなった。

ハリーだってスネイプに見守られるなんてこと、願い下げどころか考えてすらいない。ロンと一緒にしよつちゆうぼやいている。

「スネイプがなんで審判なんか。あいつの口から箒やクイディッチの話が出たことが有る？ どうにかして悪さしたいって以外の理由が思い浮かばないよ」

魔理沙はこの、ドラコみたいな野次馬を除いて誰も得しない状況が可笑しくてつい笑ってしまった。「確かにスネイプがクイディッチを嗜むって話は聞かないな。むしろ嫌いだろうよ」と割って入ると、ハリーとロンは少し驚いた後「クイディッチというより、数人で何かするっていうことがそもそも嫌いなんだろうけどね」とため息をついた。それもそうだ。なんたってスネイプはこの私とのティータイムでさえ鬱陶しそうにするんだから。

だけど、向こうだってその嫌なことを押して任務を果たそうとしているのだ。

「まあ、純粹にクイディッチのジャッジがしたいワケじゃないだろうさ。ただ、『なんで審判なんか』とは、スネイプも言っていたぜ？」

狐につままれたようなハリーたちの顔を見て。魔理沙はもう一度あははと声を出して笑った。

「『なんで審判なんか』……本当にそう思ってるなら、止してくれればいいのに」

寮に戻って、ハリーたちはハーマイオニーも呼んで話し合いをすることにした。敵か味方はともかく、メリッサはスネイプと親しい。賢者の石やハリーの命を守るため、三人はメリッサの言葉にも注意することにしていった。

「誰かに命令されてるってことなのかな」

”誰か” って誰さ」

「分からない。親玉が居るってことなんだろうけど……」

ハリーはしばし視線を宙に泳がせた。親玉。僕に危害を加えたい親玉。因縁と言えばヴォルデモートだけど、もう倒れたはずだ。

「いや、待てよ……？」

スネイプはもう一つ、賢者の石も狙っている。賢者の石は永遠の命の源。なら、弱っている人を蘇らせることもできるんじゃないだろうか。そして、ヴォルデモートのことを「倒れた」「居なくなった」と言う人は居ても「死んだ」と言う人は不思議と聞いたことがない。

「親玉は、ヴォルデモートだ」

口に出しながら、ハリーは確信していた。

「その名前を言わないでくれよ。っていうか、あの人は君が倒したはずだろ？」

「ロン、確認だけど、ヴォ……じゃなくて、例のあの人が『死んだ』って話は聞いたことあるかい？ 『倒された』じゃなくて」

「え？ いや。でも『消えた』とか」

「上手く隠れば『消えた』ようになる」

ロンは言い返せなくなった。なにせ、自分が知る中で隠れるには最高の道具、透明マントの効果も一言で言えば被ると消える能力だ。何も分からないが絶対的に恐怖の対象として知っている。「例のあの人が、今そこにも透明になって立っているような気さえしてきた。」

「力を取り戻すために賢者の石を手に入れる。力が有ったときになぜか負けてしまった僕を殺しておく。これがスネイプの役目なんだ」

そう結論付けたハリーに、ハーマイオニーが待ったをかけた。

「ちよつと違うと思うわ。例のあの人のためにハリーを狙っているなら、もつと手厳しいはずよ。例のあの人は魔法界全体を恐怖に陥れる

ほどの闇の魔法使いだもの」

「それは、僕を倒すより賢者の石を手に入れる方が大切だからだと思う。僕をどうにかできても、賢者の石で復活できなくちゃ意味が無い。例えば呪文や毒で僕が死んだら学校は大騒ぎだし、犯人が分かるまで調べることになるはずだよ」

「犯人が分からなくても先生たちの警戒心が強くなるだろうから、石を狙いにくくなるかもね」

「うん。だから、誰が悪いワケでもない事故に見せかけられるクイデイツチの試合で動いて来るんじゃないかな」

考えたくもない方向に話の筋が通ってしまった。スネイプとの間ですら大きな力の差があったのに、闇の帝王とまで言われた魔法使いが絡んでくるとは。重苦しい沈黙の後、ハーマイオニーが口を開いた。

「……マクゴナガル先生や、他のグリフィンズ生にも見張ってもらいましょう」

「でも、ハグリッドもマトモに取り合ってくれなかったのに。また『かもしれない』って話……疑心暗鬼扱いだよ」

「悪さをするだろうってことは皆思ってるわ。殺されるなんて大袈裟に聞こえることを言わなければ、きっと大丈夫。大きな事故を起こすつもりだなんて予想してなくても、見張ってもらえるだけで良いんだから」

こうしてハリー達は魔理沙の意図とはまったく逆の推理と対策を進めたが、それは仕方ないことだった。スネイプはハリーに対して明らかに不親切で攻撃的だったし、憎しみの籠った目つきで追い回していた。赤ん坊のころに魔法界から離れて戻ってきたばかりの男の子に一体何故、と考えれば「実はあの人の手下だから」という答えもとても納得しやすい。特にハリーはハグリッドやマクゴナガル、それにダンブルドアからもジェームズを称賛する言葉しか聞かされていなかったのだから。

そんなこともつゆしらず、誤解を解くヒントを出してやったつもり
の魔理沙は呑気に箒作りの魔法を調べていた。過去についてももう少

し調べる気もあつたのだが、そろそろスネイプに睨まれそうだな。ならば、と、今まで力を入れていた研究に戻ることにしたのだった。

しかしまあこっちはこっちで難しい。件のオンボロ箒、今では一応思った方向に飛べるようになったのだが、そこからがなかなか進まない。これまでは昔の魔法に関する本から製法を拾ってきたのだが、それ以上の情報がなかなか見つからないのだ。というのも、飛行速度や旋回能力が現在の競技用箒レベルになってきたのは、箒メーカーの登場で、箒が各家庭で自作するものではなくなってから。これ以上は専門職の領域で、一般に出回っている魔法書に製法は載っていない。製法ではなく性能について書き連ねた箒図鑑は掃いて捨てるほど有るのだが。

「やあ、ミス・ミス・ミストウツド」

棚に本を戻して「こっからは調べものじゃなく本当の研究になるな」と気合を入れ直したとき、クイレルに突然声をかけられた。魔理沙は「ああ、ドーも」と気にしない風を装ったが、頭の中は鏡の前でダンブルドアに出くわしたときと同じくらい緊張した。

クイリナス・クイレルと言えば学校一気弱な男の座をネビル・ロングボトムと争っているまっ最中の男である。そんな人物が、魔理沙のような”目立つ”生徒に好き好んで話しかけるといふのはありえないのだ。……普通に考えれば。しかしクイレルはハリーを墜落させようとするような隠された顔も持っていた。もしあのとき、”誰が邪魔したのか”に気付いているなら、クイレルが魔理沙にしかけてくるのは当たり前のことだ。

クイレルの顔を窺うと、まだ残酷な危険人物の無表情にはなっていない。”ありえない”ことが起こったか、それとも疑ってはいるが確信はしていないということらしかつた。

なら話は簡単。さっさと退散するだけだ。

「何か用か？」

「い、いや、そういうワケでは、な、ないんだけれど。べ、勉強熱心だなと思、もって」

「そうだな。確かに私は勉強熱心で忙しい。というわけで、じゃあな」

「そ、それなら、一年生の分野以上のことに、について、お、教えられるけど」

妙に食い下がる。しかも他人からの言伝なんか有るようではない。疑われている。魔理沙はあと一步のところまで冷や汗でも出しそうになったがなんとか心を落ち着けた。そして「そういうことは一年生の分野の授業を面白くしてから言ってくれ」と舌でも出しそうなほどバカにした様子でクィレルをあしらった。

メリッサ・ミストウッドは無能でつまらないクィレル先生なんて眼中に無いんです。腹に一物抱えたヤバイやつだなんて全くもって毛ほども感付いておりません。だからどうぞあなたも気にしないでください。

幸運なことに、それからクィレルは魔理沙にアタックして来ていない。まあ、来たたら来たで、別件で問題にしてやるつもりだったが。一年の女子に付きまとう変態教師として。

そうして数日。グリフィンドール対ハッフルパフの試合の日がやってきた。グラウンドに現れたスネイプはとうとう鬼の形相になっていった。

「なんかスネイプが箒に跨ってるだけでちよつと面白いな」

「箒も似合いませんわねえ。大きな音が出るものなんて」

「君たちどつちの味方なんだい」

「ドラコもにやけてるじゃないか」

「まあね」

選手たちがワツと空へ飛び出す。魔理沙たちの反対側の観客席で、心配そうな顔をしたロンが見えた。隣のハーマイオニーはこの前のスネイプやクィレルのようにブツブツやっている。守りの呪いか何かだろうが、どつちにしても外部からの魔法を防ぐしかけとか無いんだらうか。教員席に目を移せば、マクゴナガルはいつにも増して厳しい表情。ダンブルドアもニコニコとはしていない。

開始の笛が鳴る。この状況を一番簡単に収める方法は、ハリーがスニッチを即座に獲って試合を終わらせることだが……それより先に一発目の不当ジャッジがかまされた。スネイプはやっぱり、任務とは

別に個人的な恨みも晴らす気でいたようだ。

チェイサー同士のありふれた接触が悪質なタックルとして処理され、ハツフルパフにクアツフルが渡る。グリフィンドールキャプテンのウツドが頭を搔きむしった。ドラコは双眼鏡を覗きながら「見なよあの顔」と大はしやぎだ。

「エンジンかかってんなあ……」

激しいブーイングの嵐の中試合が再開される。再開したと思っただらまた止まった。フレッドがブラッジャーを観客席の方に打ったと言いがかりがつけられた。それが終わると今度はスネイプの方にブラッジャーが撃ち込まれた。スネイプは髪を振り乱して激怒しながらハツフルパフに4回のペナルティシユートを与えた。グリフィンドールチームは完全に頭にきていた。ウィーズリーの双子は普段の悪戯つぼさもどこへやら、完全にスナイパーの顔になっていた。

「これハリーじゃなくてスネイプが先に死ぬんじゃないか？」

「次やったらきつと退場させるから大丈夫だよ」

「なるほどな」

しかし次のブラッジャーはハツフルパフから飛んで来た。普段どんなに軽んじられても耐え許すハツフルパフが唯一誇りを賭けて勝負するのがこのクイディッチである。それをこうしてメチャクチャにされて、ハツフルパフもカンカンになっていた。スネイプはペナルティをとらなかつた。

「グリフィンドールに嫌がらせするために覚悟決めすぎだろ」

「狙い撃ちされてますわね」

ペナルティが無いと分かったハツフルパフのビーターはスネイプをロツクオンした。審判を退場させて公平なマダム・フーチのジャッジを取り戻す魂胆らしい。ブーイングが止んで、歓声が沸き起こった。リー・ジョーダンのアナウンスもしきりにはやし立てた。

何度か顔の横をブラッジャーが掠め飛んで、5度目でスネイプもさすがに試合を止めた。それでもたった一回のペナルティシユートだ。

グリフィンドールに10点入り、試合再開。途端にハリーがものすごい勢いで急降下した。魔理沙はまた呪いかと一瞬身構えたが、どう

やら違う。スニツチだ。普通はシーカーの妨害のために使われるブラッジャーが審判を叩きのめしている間、ハリーは悠遊とスニツチ捜しに集中できたのだ。ハッフルパフのシーカーも慌てて追従する。しかし、ハリーの才能とニンバス2000相手に後から追いつこうなんて無理な話だった。

数秒後、ハリーが右腕を振り上げる。その手にはしつかりとスニツチが握られていた。試合終了。グリフィンドールの勝利である。

選手たちが次々とグラウンドに降りてきてハリーを褒め称える中、完全に負け犬になってしまったスネイプは足早に立ち去った。もちろんそれを逃がす魔理沙ではない。興醒めしてのそのそ帰り支度をするスリザリン生の間を縫って競技場の出口に急いだ。

「よお、調子はどうだ？」

黒くひよろ長い後姿に声をかけたが案の定無視される。

「気持ちには分からんでもないが、そっちもイジられてもしょうがないことくらい分かってるだろう？」

「生憎のところ吾輩にはそんな暇な時間は無いのでな」

「おいおい」

あまりに下手な逃げ文句に呆れた魔理沙だったが、どうにもそれだけではないことに気が付いた。スネイプの足は校舎ではなく森の方に向かっていている。

「ひよっとしてまたお使いか？」

返事は無かったが、スネイプの無反応はたいてい同意の意味だ。

「クイレルのことか？ まあ、そうだろうなあ」

「またも無反応。」

「私もあいつに軽く目エ付けられてるし、是非とも頑張ってもらいたいね」

「どういうことだ」

スネイプはやつと魔理沙の方に顔を向けた。めんどくささの他に「何故早く言わなかったのか」という苛立ちも含んだ視線だ。

「お、心配してくれてんのか？」

「もちろんだとも。君の使う妙な魔法が向こうに渡るかと思うと心配

で夜も眠れん」

「昼寝でもすれば？」

二人は森に向かいながら互いの状況を話した。スネイプは魔理沙が既にクイレルに怪しまれていることを知って、かなり口が軽くなつた。いつそのこと分かっていることをしつかり教えて自衛させようという考えだ。

「クイレルの背後にあるもの……以前は冗談で言ったが、実際のところ、あの人と見ている。我々はあの人の情報を掴むためにクイレルを自由にさせているのだ」

「どこかで何かの命令を受けているだろう、な。それが森だと？」

「森で誰かに会っている……というのはいささか短絡的であろうが、そうでなくとも手掛かりにはなろう。クイレルが君に話しかけることと同じく、森に行くことも”ありえない”のだからな。闇の魔術に対する防衛術の教員として、教材となる闇の生物を捕らえているわけでもないようであるし」

「だが……つまるところ、クイレルのしつぽを追って行ったらそいつにぶち当たつちまう危険が高いんじゃないか？」

「さよう。しかし、クイレル程度の者を使いに行っているようでは、向こうも本調子ではないだろう。クイレルは二面性こそあるが、魔力が特別に高い人物ではないはずだ。……ときにミストウッド、以前『クイレルについておもしろいことがある』とか言っていたが、まさか……」

「そのまさかだ」

スネイプは思わず立ち止まった。魔理沙の様子からはいつもの冗談っぽさが無くなっていた。

「クイレルの魔力は人間のそれじゃない」

十九話 雑談

試合から何週間か経って、冬の間数カ月もほとんど空を覆い続けていた重苦しい鉛色の雲が綻ぶことが多くなってきた。それと共に、なんとハリーたちとドラコたちの交流も増えてきていた。主に（冷たく言えば）これまでコウモリをしていた魔理沙が無理に両者をくっつけているような面が強く、特にドラコとロンは皮肉の言い合いばかりだ。とはいえ今までのように退学の策略を張り巡らせるまで拗らせたりはせず、お互いに距離感がつかめつつあるようにも見える。まあ、それまでのグループに面白いこと好きな魔理沙とお淑やかで女の子らしいダフネが加わって華やかになるのも、11歳の男の子であるロンにとってなんとなく悪い気はしないことだという面も大きい。車で縁のあったパーバティも魔理沙とドラコがグリフィンホールに近くなるのを喜んで輪に加わることが多かった。

ここで面白くないのはハーマイオニーだ。魔理沙ダフネに加えて跳び抜けた美少女であるパーバティまで近づいて来て劣等感が……なんて可愛らしい理由ではない。決して。

「メリッサはスネイプの側近なのよ？ 気付かないの？ メリッサが付きまとして来るようになってから、反対にスネイプがちよっかいをかけてくるのが少なくなっただわ。メリッサはスネイプの代わりに私たちを見張ってるのよ」

「少なくともメリッサには付きまといわれてるって感じはしないけどなあ。ドラコは鬱陶しいけど」

ロンは呑気な様子だ。スネイプのように突拍子もなく出くわしたということは記憶に無い。今までと同じように話しかけて来て、今までならドラコが話を切って連れて行ってしまっていたところで、ドラコも話に加わるようになっていただけのように思う。

「それに、メリッサがスネイプに素直に従ってるとは思えないよ。この前の、スネイプが実は審判を嫌がってるなんて、本当にスネイプの手下なら言っちゃいけないはずだよ」

「結果的には私たちはそこから推理したけれど、相手がそのつもりで

言ったかは分からないわ。混乱させるためのまかせかもしれないもの」

「そこまで疑ってかかると何もできないよ。メリッサは見た目通り僕たちと向こうとの間に立ってると思う」

実のところ、ハーマイオニーの言うことはほとんど当たっていた。確かに、魔理沙はスネイプの代わりにハリーたちを見張る役目を受けている。……理由は想像とは違うもので。

ところでハリーたちがハーマイオニーの言う事を素直に取り合わないのには、公平な判断以外にもちよつとした理由があった。二人ともハーマイオニーがイライラしているから何にでも文句をつけるんだと思っていた。

最近、ただでさえうるさかった勉強虫がとうとう手が付けられないまでになっていた。テストが近いと言って、図書館でも、寮でも、歩きながらも視線は教科書に張り付いたままだ。そうでなければ、カレンダーに印をつけて残りの日数を心に刻みつけていた。ハリーが見たところそれは三か月も先だったけれど、ハーマイオニーのこの必死さはどういったことだろう。ハリーとロンも最近は図書室なんかで机に向かう時間が増えた。ハーマイオニーが周りにも先の見えないテスト勉強を強要しだったので、ポーズだけでも従っておとなくさせるためだった。

「確かに薬草学の勉強が早急に必要だわなあ」

そうして土曜日に来てやってくる羽目になった図書館の机。向かいの席の魔理沙が呑気な調子でそう言うと、ハーマイオニーがバツと顔を上げた。スネイプからテスト問題を聞き出して、それがとても程度の高いものなのかもしれない……。ハーマイオニーの形相に、ダフネは思わず眉を寄せた。ドラコはクスクスと、わざと分かるように中途半端に顔を隠しながら笑った。デブ二人は油でギトギトの手を見たマダム・ピンスに門前払いされていた。

「スカルキャップ、時計草、ラベンダーのページには付箋を貼っておけよ」

はて、1年生で習う範囲にそれらを使う重要な魔法薬が何かあっただろうか。はじめは意味するところが分からず動きが止まるハーマイオニー。しかし、流石、ダフネの「素敵。リラックスできるハーブですわね」というヒントをもらってからの反応は速い。皮肉にも取り合わず「大きなお世話よ」と最小限の返事をした。

ロンは口をへの字に曲げた。

「……ハリー、言ってみてやれ」

「言ってみて聞くなならこんなことしてないよ」

ハリーはさして興味の無い本のページを一定間隔でめくる作業を続けながら答えた。ここ最近の騒動で上の空の勉強をつづけながら、ハーマイオニーの”お世話”は避けられそうにないことだけは身にしみて学んだ。

「同情するよ」

「絶対バカにしてるだろ」

ロンはドラコのニヤケ面を睨みつけた。ついでにハーマイオニーも苛立った様子で……正確には、”より一層”苛立った様子でドラコに文句を言った。

「あなたたちはこんなおしゃべりしてていいのかしら？」

「ダメだと思ってるのはグレンジャーくらいだと思っただけよ」

「メリッサはともかく、マルフォイにはお引き取り願いたいね」

「そこをなんとか許してくれよ。ほら3クヌートあげるから。これで三日くらい君の家族を養えるだろう？」

「よーし僕も一緒に外に出るよ。白黒つけようぜマルフォイ」

「気合が溢れ出んばかりといったご様子ですけど、だからって杖の芯まで外にはみ出させなくても良いのでは？」

その一言で、ロンの心はしぼんでしまった。もしダフネが男だったら、ハーマイオニーのように身近な存在だったなら余計に反発して燃え上っていたかもしれない。いつも済ました様子の彼女に、カツと強く言うことは難しい。控えめではあるが恨めしそうにダフネに目を向けるロンの後ろでドラコはわざと顔をそむけ「やれやれ」と勝ち誇った。

「おっと、そんなことよりあれ見てみなよ」

と、ドラコは首をひねったおかげでもっと面白いものを発見したようだ。面白いものならなんでも興味がある魔理沙もその方を見た。

「ハグリッドか」

「あいつ、文字が読めるのか？」

なんと、図書館なんかにはハグリッドがいるのだ。分厚い体に負けなような分厚い本に顔をくつつけるようにして読みながら本棚の狭い間に挟まっている。

それまで我関せずという様子で『変身術入門』に目を落としていたハリーが顔を上げた。ハグリッドを馬鹿にした態度が気に入らないからだったが、見てみると確かにその野性的な格好と本棚とのミスマッチはひどい。もじやもじやの髪と髭はこの際いいとして、せめて毛皮の上着は脱いで来たらよかったのに。

「書くのはアレだが、読むのは問題ないみたいだな。新聞読んてるのをよく見かけるぜ」

「写真を眺めてるだけじゃないのかい？」

「いや、内容について話したこともある。さすがに読んてるだろう」

「書くのはアレ、ですのね……」

「とどこどころ綴りを間違うくらいだよ」

5文字に1文字くらい。

「それにしたって、あの本は分厚いけどね。僕ならごめんだよ。あの本を読まなくちゃならないくらいなら文字が読めなくてもいいよ」

ロンはまた顔に皺を寄せた。魔理沙は「この調子でいくと図書館を出るころには10歳も老けてそうだ」と笑いそうになるのを咳でごまかした。

「みんな立派な大人なら新しい知識を学び続けるものよ。ハリーに口んもちよつとは集中したらどう？」

まったくブレないハーマイオニーの忠告を聞き流し、魔理沙とハリーは目を細めてハグリッドの手元を盗み見た。

「んー、卵……灼熱……飼い方……ドラゴン。ドラゴンの飼い方の本みたいだな」

「ハグリッド、ドラゴンに興味があるみたいだしそう考えるとあり得ることなのかな……」

詳しくは知らないが、ハリーがハグリッドからこれまで聞いた話ではドラゴンは素晴らしい生き物らしい。いろいろな生き物（それこそ怪物犬も）に興味を持っているハグリッドが目をつける生き物としては自然なように思った。

「いやあ、『もしドラゴンが手に入ったら』って妄想の道楽に使うにやあ、あの本は重いと思うがなあ。二つの意味で」

「それこそ挿絵を見ているだけではありませんこと？」

「そうじゃないと困るね」

「そう言やドラゴンの飼育は違法だったか」

「うん。ハグリッドが魔法省に引つ張って行かれる姿は見たくないぞ……」

「僕は一度見てみたいけどなあ」

実際はほとんど関わることも無いむさくるしい大男の進退になんて大きな興味も無いだろうに、マルフォイは心底面白そうにニヤついている。本当にロンをからかうことにかけては期を逃さないヤツだ。

そうこうしているうちにひとしきり読んで満足したのか、ハグリッドは本を戻して図書館を出て行った。

ロンとドラコの言い合いにマダム・ピンスの雷が落ちて、ハリーたちもまとめて図書館から追い出されたのはそれから数十分後のことだった。

「ほんっと、我慢つてものができないの？」

図書室を出ると、すぐ近くにダブル太つちよがどこから調達したのか、ミートパイ片手にドラコたちを待っていた。地下牢の方に去っていく背中に出した舌の後、ロンとハリーにはハーマイオニーのお説教が待っていた。

「でも、ドラコのやつ言うことは君も聞いていただろう？」

「出入り口に溜まるな」と、またもマダム・ピンスにせっつかれ、廊下のちよつと奥まったところに移ってからロンが反論した。

「なんでもからかってくるんだし、もう聞き流した方がいいと思うよ、

ロン」

「そうよ。勉強して成績で見返してやればいいの。さすがねハリー。でもあなたも言い返してたわよ」

「それはハグリッドを引き合いに出すから……」

それにハーマイオニーだって魔理沙の冗談にムキになっていたし、うるさく言われる筋合いはないはずだ。というのは心の中に留めておいた。女の子の機微に対してちよつと純粹なところが多いハリーでも、口に出したら何が起ころるかくらいは予想がつくようになっていく。

しかし、その予測を立てるのはちよつと遅かったかもしれない。宿題の片づけ方から歯の間の食べカスまで、ありとあらゆるお小言が耳に詰め込まれ始めた。ハリーが嵐が過ぎるのを待つ心の準備をしかけたとき、ロンはあきらめずに話題を変えようとした。

「そうだ、ハグリッドだよ」

「何が？」

「ハグリッドは、どうしてあんな分厚い本を読んでいたんだろう」

「その問いはテスト範囲にはないわよ」

「どうして、って、ドラゴンに興味があるんだから、ドラゴンの本を読んだっておかしくないと思うよ」

ちよつといつも通り様子のおかしいハーマイオニーに代わってハリーが返事をした。

「ドラゴンに興味を持ったのは最近のことなのかい？」

ロンはこう言いたいんだろう。「ドラゴンを最近手に入れたから、詳しい情報が欲しくて難しい本を読んでいたんだ」と。ハリーは、ハグリッドが禁止されていることをするはずがないと言いたかったが、初めて彼と出会った日に早速ナイショにしなければならぬことをしていたのを思い出した。ダンブルドアを貶したダーズリー一家に対して魔法を使ったのだ。

「でも、そんなことを知ってどうするの」

「ハグリッドは良い人だよ。それは間違いない。でも、すぐくうつかりしてる」

ハリーたち自身がこれまでハグリッドのうっかりの恩恵を大いに受けてきたものだ。ドラゴンを飼っていたとして、いつまでも隠し通せるだろうか。例えばそれをスネイプが知ればどうなるだろう。

「つまり、今からハグリッドの小屋に行こうってことだな」

ポンと肩が叩かれ、ボンつと心臓が跳ねた。背中を見送ったはずのメリッサがすぐ背後に居た。

「ここ、ちょうど隠し通路の出口なんだよ」

甘話 隠し事

「さーて、鬼が出るか蛇が出るか、ドラゴンが出るか。ま、美味しいお茶とサンドイッチくらいは出してもらおう」

ザクザクと芝を踏んで上機嫌で歩く魔理沙の後ろをハリーたちは額に汗を浮かべながらついていく。

ドラゴンを手に入れたかもしれないハグリッド。その小屋について来ようとするメリッサ。スネイプに見つからないようにうまくハグリッドを助けようという話なのに、（ハーマイオニー曰くスネイプの手下である）メリッサが居たら本末転倒だ。でも、なんとか取り繕おうとしたハリーたちの口を「ま、お前たちの気が進まんなら私一人で行くだけだ」というセリフが塞いだ。

「なあ、杞憂で済むと思うか？」

ハグリッドの小屋の前まで来ると、昼間だというのに、その窓まで完全に塞ぎ切られていた。

「なんだ、ハリーに、ロン、ハーマイオニー。……それにお前さんもか」
家の異様な雰囲気とは対照的に、ハグリッドはにこやかな様子でハリーたちを出迎えた。魔理沙と目が合ったときは、髭の奥で多少口角が下がったようだが。具合が悪くなったのはむしろ4人の方だ。ハグリッドの背後、部屋の中からムワァツと熱波が降りかかった。分厚いカーテンを閉め切っているだけでなく、暖炉もフルに稼働しているようだった。

4人は入口すぐの妙な位置に置かれたテーブルにつくよう促された。妙なのはテーブルの位置だけではない。普段はのんびりしたハグリッドとの会話だが、今日は向こうからどんどんと話題を振ってきた。なにかをごまかそうとしているのは明らかだった。用意されたお茶は、この熱気の籠った部屋で飲むには少し熱すぎる。

「そう言や最近、よくいっしょにおるな。マルフォイとも」

クイディッチの話題や勉強のことに乗るのをハリーとハーマイオニーがなんとか我慢したら、今度は魔理沙の方に目を向けた。

「もともと、何かと縁があったしな。汽車でもそうだし、私とグレン

「ジャーは入学前の買い出しでも顔を合わせた」

「顔を合わせたからって仲が良くなるとは限らないわ」

「ハーマイオニーはツンとそっぽを向いた。スネイプを抜きにしても、この2人はとことん相性が悪いのかもしれない、とハリーはおかしく思った。」

「そう言やドラコとハリーも買い出しの時に会ってたんだったな」

「あー、うん。顔を合わせたからって仲が良くなるとは限らないね」

「ハリーはドラコと初めて会った時のことを思い出した。ああ、最近はよく一緒にいるけれど、むしろあの時のことを思い出すたびに感情が冷える思いだ。お互いのことを全く知らない間柄で、ドラコの口から出てきたのはマグル生まれや貧しい人に対する差別に侮蔑と、自己愛、尊大さばかり。たまに愉快的なヤツに見えても根っこは”アレ”なんだな、と。」

「なんだよ、根に持ってたんのか？ 悪かったって。な」

「ハーマイオニーはわざと馴れ馴れしく大げさに抱き着こうとする魔理沙を「初対面のことだけじゃないでしょ！」と押しつけた。」

「いやあ、それにしてもあつついなあ。燻製でも作ってるのか？ でまあ、卵の燻製つてのは殻を剥いてから燻すもんだぜ」

「と、さっきのせいですれた襟元を整えて椅子に座りなおしながら、唐突に魔理沙が本題へ切り込んだ。ハグリッドがいくら努力したとしても狭い小屋。暖炉の火に揺れる黒い球体は嫌でも目に付く。ハリーたちは少し気の毒になって言い出せなかっただけだ。」

「いやあ、ちいとやり過ぎてな。表面が黒く固まっちゃったんだ」

「じゃあ早く引き上げないと。違うか？」

「違わないが、うむ。……要求は何だ」

「潔いな。じゃあお茶のお替りとサンドイッチが欲しい。あ、茶は冷めたやつで」

「ハグリッドはウグウと鼻を鳴らした。しばらくすると魔理沙の言ったとおりのものがでてきた。」

「お、ありがとよ。挟んであるのは何だ？」

「イタチの干し肉とチーズだ」

ハグリッドは不満げに鼻を鳴らしながらも律儀に答えた。

「ううむ、メリッサ、お前さんには箒の材料とかを工面してやつちよるだろう。ハリーもどう言ってそそのかされたのか知らんが……」

ハグリッドはそれぞれの前にサンドイッチを配ると同時に、順番に恨めしそうな視線を送った。ハリーは「そういうことじゃないんだよ、ハグリッド」と誤解を解こうとしたが、魔理沙が「ああ、まったくもってな。本気で脅すつもりなら、もつと思いついた要求ができるネタだぞ?」とセリフを重ねた。ロンはうんうんと頷いた。ハーマイオニーは「あんたにその危険があるのよ」と額に手を当てた。

「だからな、本題は——」

ふいに、魔理沙の瞳が輝いた。ハグリッドはどきりとした。ハーマイオニーはそれ見たことかのため息を吐いた。

「そのドラゴンがなんて種類なのかってことだ」

魔理沙はニヒいと歯を見せた。「メリッサが『どっち』でもそれは本題じゃないんじゃない……」ハリーが首をかしげる間もなくハグリッドが答えた。

「ノルウェー・リッジバックつちゅーやつだ。ドラゴンの中でもなかなか尖ったやつでな。火を吐くことを覚えるのなんて一番早い」

「ほう、ドラゴンと言えば火だが、そういう意味ではかなりドラゴンらしい種類ってことか」

「そうだと」

ハグリッドはさっきまでのことは忘れたように上機嫌になった。自分の家の広さや材質も忘れてるようだ。

「だが他のドラゴンと違ってこいつは何でも選り好みせずに食べる。陸に住んでる生き物殆どに、水の中のものまでな。鯨だつてこいつらにとつちやあぶりはんだ」

「それって人間も危ないんじゃない……」

ハリーとロンは青くなった。でも魔理沙とハグリッドはそういう方に考えないようだ。

「じゃあ餌は楽な方か」

「いや、そこはな。子供のころはちよつと気を付けて専用のものを上

げた方が良いらしい。ブランデーと鶏の血を主にな。本で読んだんだ。三十分おきにやらんといかんそうだが、心の準備は万端だぞ」「ハグリッド、子供の間の世話はいいけれど、ドラゴンはずっと子供じゃないのよ」

ハーマイオニーが諭すように言った。

「うむ、まあ、そうだとも。でもな、ドラゴンほど素晴らしい生き物はほかに無い」

ハリーはなんと言おうか困った。少なくとも、素晴らしいかどうかは問題じゃないはずだ。

「まあそう言うなよ」

他の子供達と違って、魔理沙はいかにも楽しそうにサンドイッチを頬張った。

「ハグリッドも飼育のプロフェッショナルだ。ヘマなんてしないよな」

「ああ、もちろんだともー」

魔理沙がドラゴン飼育なんて面白そうなことに反対するわけがなかった。まして自分で責任を取らなくてもいいならなおさらだ。ハグリッドは援護に気を良くして意気込んだ。

「ハーマイオニーも、ドラゴンを間近で見られるなんて、こんな勉強の機会が他に有るか？ 魔法生物学の先生だってドラゴンの赤ちゃんを触ったことがあるかねえ？」

ハーマイオニーはハグリッドほど簡単ではなかったが、それでも先生以上の知識というものに全く心が揺れないわけでもない。

「素晴らしいのはもちろんだが、もうひとつ、よく考えてみる。このドラゴンの卵ほど珍しいものもそうそう無いんだぜ？」

ハリーには返す言葉が無い。それに、何を言ってもハグリッドは聞き入れそうにはないし。ひとまず、注意しなければいけない相手だったメリッサがドラゴン飼育に乗り気だということと安心しておくことにしようと考えた。

「ほんと、ドラゴンの卵ほど珍しいものも無いよなあ……」

湖底の談話室で大鳥賊を眺めながら魔理沙はつぶやいた。

さて、ドラゴンそのものへの興味はもちろん有る。ところで「どこからそれが湧いてきたか」だって気になる。

「あら、メリッサさん、どこへ行つてらしたの？ 気付いたらはぐれているものですから驚きましたわ」

奥の女子寮の方から、鳥賊が目に入らないように横歩きをして、ダフネがやってきた。

「ああ、図書館に戻ってたんだ。これ、借りようと思つてな」

魔理沙は手に持っていた本をたたんで表紙を見せた。ドラゴンの本。ハグリッドが読んでいたものだ。小屋に行つた帰りに図書館に寄つたのだ。

ハグリッドのところに行つたことまで言うドラゴンのことを隠すためにどんどん難しい会話になりそうだから伏せておいた方が良く考えた。少なくとも、この談話室では。ドラコでなくても、野性的なハグリッドを不快に思うスリザリン生は多い。ドラゴンのことを知れば、先生に密告するやつ割合はそれなりにあるだろう。ならば行先から誤魔化すべきだ。いつもどこかに行つている私の行方なんて、いまさらイチイチ確認するヤツは居ないのだから。

「あら、そうでしたの」

ダフネは悲しく思つた。今まで、メリッサが1人でどこかに行くことはよくあったが、それについて嘘を言われたことはなかったと思う。少なくとも、図書館にだけ行つたのではない。

居ないことに気付いてすぐ、ダフネはメリッサが戻っているかもしれないと、ちよつとロックハートの新しい本を借りるのも兼ねて図書館へ探しに行つていたのだった。

「ところで、ドラゴンの卵っていくらで買える？」

「え？ 確かウエールズ・グリーン種ですと……いえ、存じませんわよ？」

ドラゴンの卵は幾日かをかけて、静かにその様子を変えていった。炎の明かりに照らされて、厚い殻の中にぼんやりと見える。最近では

明らかに形ができてきていた。

「そろそろか」

魔理沙はちよくちよく卵の様子を見に来るようになっていた。色々忙しい間を縫って訪問するのはそれなりの苦勞を伴う。しかしそれだけの価値はあると考えた。それにハグリッドにとつても悪いことではなかった。まだ要注意な生徒だとは思っているものの、ドラゴンの飼育に好意的な同士は1人しかいないからだ。

「ああ。だが、まだあとちいとかかるだろうな。いよいよ中で羽根の棘まではつきり見えるようになって来てからが本番だ」

「待ち遠しいな。そうなるまであといくらだ？」

「例の本によると、今ぐらいたともう数日だそうな」

「じゃあ足して、孵るまであと一週間とちよつとくらいか。予定がうまく空いてればいいが」

「心配せんでも、生まれるときにやあ知らせてやる。そんときにや、ハリーたちも呼んでやろう」

ハグリッドは暖炉に新しい薪をくべた。火の勢いが変わるのに反応して、卵の中でドラゴンが身じろぎしたように見えた。

「そう言えば、ハリーたちは最近来てないのか？」

「テストがどうかかって言うし、それにどうもドラゴンが気に入らんらしい」

残念そうに髭をなでる。白いすがついた。

「じゃが、孵るとここを見たら考えが変わるだろうさ。ドラゴンの美しさが分からんことはなからう」

「私も、ぜひとも見るべきだと思うぜ。こんな機会も無いだろうしな。まったく、どうやって手に入れたんだ？」

何回かの問答の後にダフネから聞き出した値段は、魔法界の経済に疎い魔理沙にとつてもかなり法外なものに聞こえた。しかも、本に書いてあることからするとハグリッドが育てようとしているのはダフネが言っていた種類よりもっと希少だという。正直、ハグリッドの一生の給料より高くつくと思うのだが……。

「それこそ、こんな機会はどう無いだろうな。村のpubで呑んどつた

ら、ドラゴンの売人なんだか、男と賭けをすることになってな」

「え、そんなことで貰えるもんなのか」

魔理沙は唸った。魔法界の規制は抜け道が多い印象だが、まさかドラゴンも脅しだけで、本当はその程度の扱いなのか？ それじゃわざわざダフネの”連れお花摘み”を断ったり、ハリーの監視について全く抜かりなくやっているようにスネイプを誤魔化したりせずに、卒業でもしてからゆっくり機会を探せば良かったではないか。

しかし、そういう失望を感じ取ったのか、ハグリッドは「いやいや、」と首をふった。

「ただ単に賭けをしたんじゃないとも。実を言うと俺だから渡したんだろうな。相手も、俺が森番の仕事や色々飼っちよることを話してから初めてドラゴンの卵を出してきたし」

そう言いながらひとしきり火の世話をして、ハグリッドは「まあ、俺も酔ったからどんな交渉をしたか詳しくは覚えておらんが」と自慢げに椅子へ深く腰かけた。魔理沙はいかにも尊敬しているように目を輝かせながら『ドラゴンの卵を出してきたし』って何だよ」と思った。渡す相手のアテも無しに懐に入れてパブへ行くようなものなのか？ ドラゴンの卵ってやつは。

「それでも、賭けの後にも渋ったがな。『ちゃんと世話できんやつに渡すとあとが大変だ』つちゅーて。だがとっておき、フラツフィーの話をしてやったらとうとう素直に領いた」

「フラツフィーって？」

「三つ頭があるでつけえ犬さ。ああ、見せてつちゅーても見せてやれんからな。どこで飼つとるかは秘密だし、何より危ないからな」

魔理沙は「ええー」という声にため息を隠した。どこで飼つてるかもどれだけ危ないかも知っている。

「そんな危ないもんをどうやって飼ってるんだ？」

魔理沙は少しだけ身を乗り出した。何と言っても性格はともかく実力は確かなスネイプが手ひどくやられた相手だ。荒っぽい突破ではなく、”手懐ける”方法は非常に興味深い。魔理沙は純粋な興味半分、「教えないでくれよ」という反対の気持ちも半分で質問した。あの

三頭犬は凶悪大量殺人犯の復活を食い止める守りの1つなのだから。

「それも秘密だ」

「知らないからってんじゃないよな？」

「そりやそうだ」

「でも教えてもらえないんじゃないや、知ってるなんて信用できないぞ」

「……今度は何を企んどるんだ？」

「わかったわかった」

ハグリッドは注意すべき生徒を相手していることを思い出したようだ。魔理沙はちよつと安心しながら「何も企んでませんよ」と手を上げた。

「でも、それで売人は納得したのか？ 禁製品を扱ってるやつなんて、私よりよほど手厳しい気がするが」

「そりやあ……」

ハグリッドは「あ」という顔をした。魔理沙は「あーあ」と顔を覆った。